

真の宝  
(上卷)

## 序

この「真の宝」五大宝典は、御本席より河原町初代会長深谷大先生が頂き、その高弟にわかれた原本を、そのまま印刷したもので、金の力でたやすく求めることのできない、実に大切な我がお道の生命とする極めて尊い宝典であります故、よく研究して末代の家宝として保存せられんことを。

昭和二年十月二十六日

於 御地場編輯者 敬白

真の宝(上卷)目次

一年中節の理……………	七	人間一代の理……………	壹
一日の刻限……………	八	九四の訳……………	弐
八柱神身体世界御守護……………	八	大小閏の訳……………	元
八柱神誠と埃……………	九	朔日満月晦の理……………	元
八柱神人間に入込み日々御守護……………	三	月の出入りの訳……………	元
八柱神及び御心……………	七	満潮干汐の訳……………	〇
八埃の幹より千筋の枝葉……………	〇	しほみち、しほ千の理……………	〇
八埃の裏表……………	三	太陰太陽……………	〇
八埃裏表の心に悟る理……………	六	九曜星の訳……………	五
八色の意味……………	元	交合交際の訳……………	五
一日と一と月と同一の理……………	三	陽氣本元の理……………	壹
一年と一と月同一の理……………	三	五臓の訳……………	壹
一日と一年と同一の理……………	言	指の理……………	充

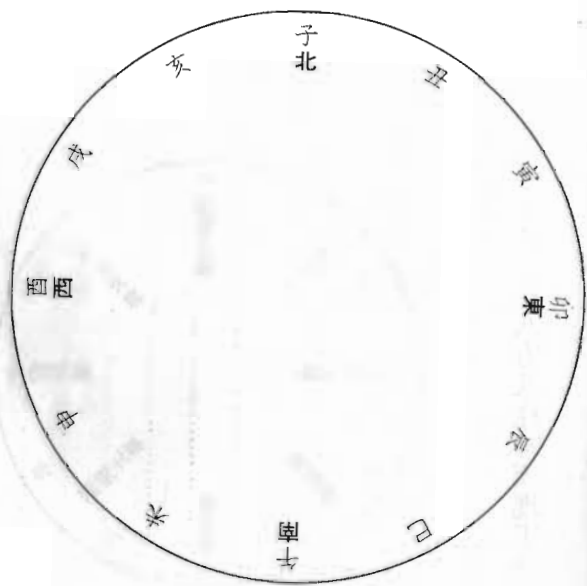
誠の訳……………	六	神を祭る理……………	叁
勤めの訳……………	七	九つの鳴物の理……………	叁
言葉の大切なる心得べき根元の理……………	三	草木に花の咲く理……………	六
五音の元本……………	七	竹に寅と云う理……………	九
(衣食住)機の理……………	七	牡丹に唐獅子の理……………	九
着物の理……………	七	庚申の理……………	〇
膳の理……………	七	湯だちの理……………	〇
りきもつの訳……………	七	敷物の理……………	〇
文具の理……………	八	印形と肉の理……………	〇
屋敷堅め石搗の理……………	八	十路盤の理由……………	〇
宮社堂館家の理……………	八	地球を国と云う理……………	〇
鳴物の意味……………	八	四季の理……………	〇
神様供物の理……………	八	人間身の内の事……………	〇
供物道具並びに飾付けの理……………	八	子のやどる理……………	〇
七福神元本の理……………	七	夫婦交合を色事と云う理……………	〇
正月祭より十二月の理……………	六	乳の理……………	〇

月様は万物の元……………	二五
世界地震ゆる理……………	二五
雷の理……………	二六
こえる、やせるの理……………	二六
嫁入りの式の理……………	二七
草木のいきの事……………	二八
よあい、つよいの理……………	二九
まけた、かったと云う理……………	二九
やさしいと云う事……………	三〇
動物の三種……………	三〇
雨降る理……………	三一
月様御姿を竜と云う理……………	三一
こいしと云う理……………	三一
風ふく理……………	三一
開關という理……………	三三
つき日と云う理……………	三三

からてんじくと云う理……………	三四
時と云う理……………	三四
四季の理、銭の理……………	三五
女の子を糸さんと云う理……………	二七
神の御顕現……………	二六
瓜と茄子の歌……………	二四
松竹梅の理……………	二四
正月祝いの訳並びに門松を立てる理……………	二四
嶋台の訳……………	二四
十干十二支の本元……………	二四
男身体の五倫五体……………	二五〇
女身体の五倫五体……………	二五一
夫婦の五倫五体……………	二五一
高天原竜宮の訳……………	二五
十二支の訳……………	二五

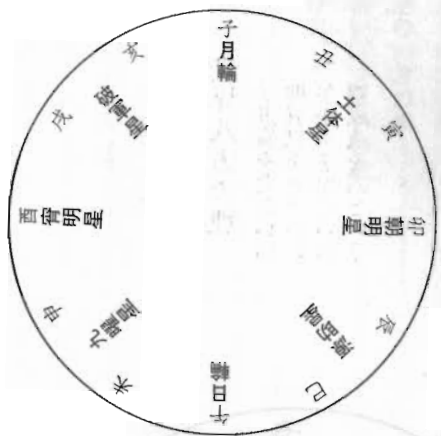
世界八方の理

子丑寅を北といひ  
卯辰巳を東といひ  
午未申を南といひ  
酉戌亥を西といひ

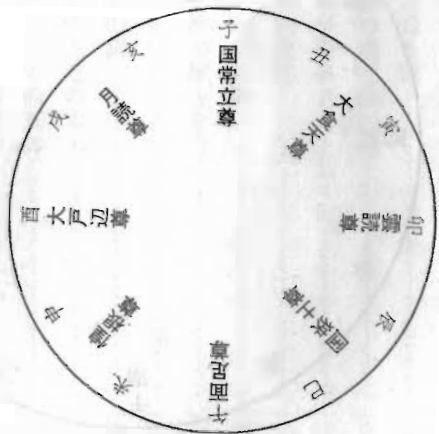




八方八柱の神御神心

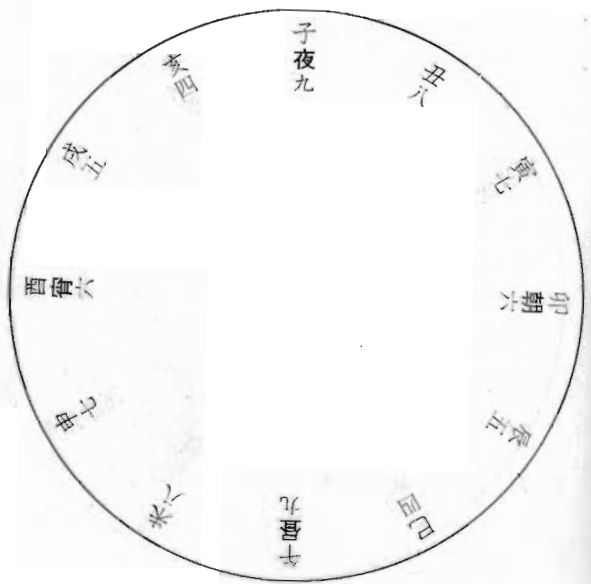


八方八柱神天理王命



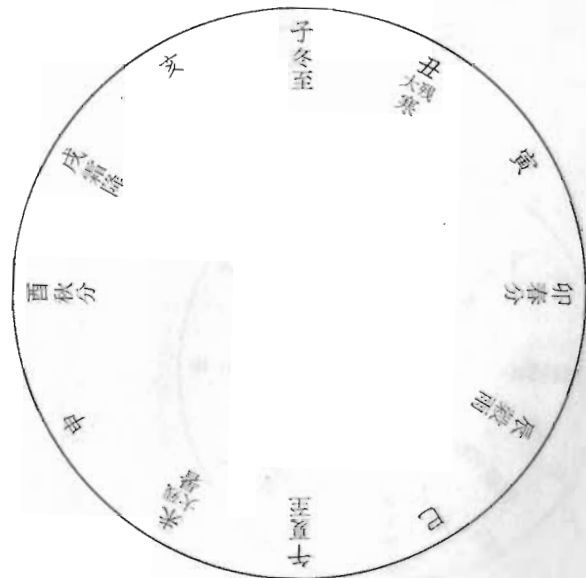
一日の理

子丑寅を夜といい  
卯辰巳を朝といい  
午未申を昼といい  
酉戌亥を宵という  
即ち十二時なり  
八つ半夜益  
共我真中



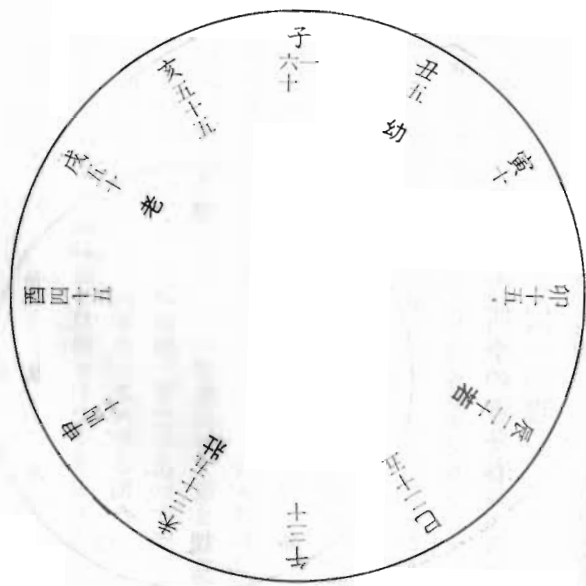
一年の理

冬至より三月を冬といい  
 春分より三月を春といい  
 夏至より三月を夏といい  
 秋分より三月を秋という  
 春分春彼岸の中日  
 秋分秋彼岸の中日  
 大寒のあき冬の真中  
 大暑のあき夏の真中



人間一代の理

一歳より十五まで幼といい  
 十六より三十まで若といい  
 三十一より四十五まで  
 壮といい  
 四十六より六十までを  
 老という  
 一年と一日と同一なり  
 五年と一月と一時と  
 同一なり



身の内と世界東西南北と  
同一の理

北左 南右  
東前 西後



身の内四季の理冬春  
夏秋と同一の理

頭冬 顔夏  
腹春 背秋



一年中節の理

十一月の中冬至、五月中夏至、二月中彼岸、八月中彼岸、三月の節に節句、九月の節に節句、冬至より春彼岸迄を冬と云う。春彼岸より夏至迄を春と云う。夏至より秋彼岸迄を夏と云う。秋彼岸より冬至迄を秋と云うなり。冬至とか土用とか彼岸とか中とか節とか云うことは、その時季刻限が即ち神様の御守護の四季である。

身の内にとつては節々が節、その節々の間が中、心の理にとつては神様が心使いに乗って働いて下さる時が節。人間が心使わず或は寝た間とかすべて身を使わず働かぬ時が中。人間がどうせいででも神が守護下さっている間が中。例えば食事をなす時は節、食後は中、又大小便の時は節となる。指でも節の処は節、その間の中、全身皆同じ。人間は中なれば埃は出来ぬが、節と云う間に埃が出来る故二十一節という。身の内の廿一節は目二つあって一つの節、耳二つあって一つの節、鼻一つ口一つ首骨の節一つ、両手に六つの節、背筋腰骨節一の両足あって六つの節あり。腹臍の括りの節一つ大小便の処二つ以上身の内の大節なり。人間は他の動物とは異りて皆身体心の使い道の自由自在が叶う故、その使い方にて埃を作るなり。

## 一日の刻限

時、旬、刻限と云う事が一番大切なり。或は怪我、過失、火難、病難等すべて善き事悪しき事、万事その起つた時刻も神様、物体も神様、身体も神様。

時計は竜頭と云うて月日なり。夜十二時より午前二時迄子の刻、月様の刻限二時となれば丑刻となる。二時より六時迄丑寅の刻、大食天尊、六時となれば卯の刻となる。六時より八時迄雲読尊、八時より十二時迄辰巳以下同じ。一日も神、一月も神、一年も神。身の内八方世界は八法、万物皆八方の神様より外になし。その神様には御心及び御役も違い、御守護の四季刻限があるものなれば、その神様の刻限に当って起る事は各々御守護処及び物体と対照し、定つたる天理よりその出来湧く現象によって明かなり。譬えば怪我をなすとせば第一身体の箇所又次にはこれに對する物及び場所、刻限又はその事情を見る。善悪共にその神様の刻限を逃れる事できぬ。

## 八柱身体世界御守護

天地日月水氣温みも同じ事、月日兩神は万物の親、万有守護の大元、月日の御入込みなくては

六社の神御働き出来ぬ。陰陽和合即ち月日より万物は産れ出で、各々形を現わし、この世に生命を有す。冬は整う理又納まる理、世界にても同一の理、根に在る。春は養うと云う理（身の内にては腹は養う理）、世界にてはめぐむ芽切る理。夏は生育という理、世界にても同一、茂る、成長、成育の理。秋は働きと云う理（身の内にては背は働く理）、世界にては熟する理、実入る。草木も根があつて木があり、花が咲き、その花の中に実が乗る。この四つ四季。天理は冬が始まりで春夏秋、実が乗ると言うたら皆秋の理、大戸辺尊、月読尊なり。人間にとつては立身出世成功成立と云う如し。又世界万づ草木は我が心ありて成長し、花咲き実を結ぶに非ず、皆月日なり。人間は月日の神魂より産まれたる分心にて、身体は八柱の神の御心の顕れなれば、八社の神入込み御住居い下さるが故、心身の自由自在が叶い、神は人間の心に乗って御働き守護下さる。無形の精神有形の肉体共に月日が親である。

## 八柱神誠と埃

誠は冬の理、智慧は夏の理、金銭は春の理、力は秋の理。誠が表に現れて智慧裏表なり、智慧が金を使い金が力を使う。

欲しい惜しいの根を切るは誠。分けへだてなくして心をつなぎ、怨み、それみ、悋氣、ねたみ

の心を起さざるは金銭。悪口、仲言、笑い、そしりの心を使わざるは智恵。自慢、我慢、高慢の心を捨てて人を立つる心が力と言う。

欲しいという心の埃を去り悪因縁を切ると云う心になるによりて、心に誠というものが出来る。即ち惜しみの埃、出惜しみ負け惜しみ等の心と、人を憎む心を去って智恵というものが出来る。即ち天理を悟る智恵なり。論ず考える智恵、我身可愛い埃、分けへだての心と人を怨みねたみの心を去るから金銭並に食物が出来る。高慢我慢等の埃と、人を立てぬ、我身だけ立て我意を突張る心を去って力が出来る。即ち心の力なり。人を助け教える道の力なり。もっとも身体の力量はその内に在り。以上神の心(宇宙の真理)に叶えば如何程でも心次第に徳は備わる。神より授かる智恵も力も神の貨物、日々常に心使うその使う心一つが我がの理、心の理によって与わる出来る。

又春はめぐむ、恨みへだての慾。夏は茂る、もえる、惜しむへだての慾。秋は実乗る、高慢取込みの慾。冬は根に入る、欲しいの慾。

人間身の内は借物、心一つが我がの理。心一つ一つの心と云う、その心というは我がの理という。一つの心は八つに働く。ほしい、おいしい、うらみ、はらだち、かわい、にくい、よく、こうまんと云う、これが心の働きという。その働きに裏と表がある。使い様、使い場所、使い道が間違えば埃となる。水も火も風も(この世第一の宝)大切というても、時に或は洪水となり、火難暴風となる。この同じ大切な火水であれど所変れば難という。人間の心もほしいもおもしろいもか

いも無くてならん心なれども、只めんめん到我身ほしいおもしろいかわいのか心では埃となり罪を作る。なれど物大切人大切、人を可愛いと思うて落とさんよう捨てんよう落ちる人を惜しみ、こわれる品すたれる品を惜しみて通るは誠なれど、我身惜しみ骨惜しみ人に与うる物惜しみは、誰れから見ても喜ぶの好くのと云う心ではあるまい。すれば心がいかんのやない、使い道がいかんのや。使い道が分らんからである。十人十色というて同じ心の者は一人もない。元々同じ草木果物でも、松や杉でも、唯一つの実を蒔いて地へおろして段々修理する。一つもへだてなく肥を施し、一つ畑に作りても皆同じ物と云うのは無いようなもので、人間も元一つ月日様より産みおろし下された心にて、岐美様の雛形より命一つの心の理にへだてはなければ、ずっとおしならべて年限九億九万の水中、八千八度の道中にころりと色合い数々に違うて来た。欲しいが強い者もあれば惜しいの強い者もあり、可愛いの強いもあれば憎いの強いもあり、色々変り来た。同じ心の者無いようになりた。親子でも夫婦の仲も兄弟も皆めいめに心違うで、似たる心の理を寄せて親子という、兄弟という。何程似てるようでもよくよく見れば違う所ある。その違うは悪いのではない、これだけでなくならんであれど、使い道の違うのがいかんのや。心ばえの違う所、これが見込みという。『真実を見て役割をする』と仰せられたる所以なり。

## 八柱神人間に入込み日々の御守護

男神五柱は人間にとりて男の理、一家にとりては夫の理。女神五柱は女に当る、一家にとりては嫁の理。しかし月日二神は人間にとりてはすべて主宰者故、親、主君、或は親方とか一家にとりては主人、主婦、父母等。人間のする事は一つもない、皆神様なり。男神は男に入込み女神は女に入込み、世界も身の内も同一に御守護下さる。皆人間の自由用が神の自由用御働きである。神様と身の内と別々に思うては天理は分らぬ。神は身の内にござるなり。神様と身体を一つに考えねば悟り論しは明かに分らん。

一日の刻限にては、午前二時丑の刻より寅卯辰巳午の刻迄女神様。人間をとりにて女に当る。午後二時未の刻より申酉戌亥子の刻迄男神様故、男の理、雲読尊なり。夜九つ子刻、月様、一年に取れば冬至、丑八つ冬の土用、大寒、大食天尊。卯刻明六つ春彼岸、雲読尊、辰刻五つ春土用、国狭土尊、昼九つ午刻日様、夏至。未八つ夏の土用、大暑惶根尊。酉刻暮六つ秋彼岸、大戸辺尊。戌刻五つ秋土用、月読命。皆八社の神。人間も同一。

一代にとりては、生れて五年間、子、国常尊。六歳より十五歳迄丑寅、大食天尊、十六歳より二十歳迄卯、雲読尊。二十一歳より三十歳迄辰巳、国狭土尊。卅一歳より卅五歳迄午、面足尊。

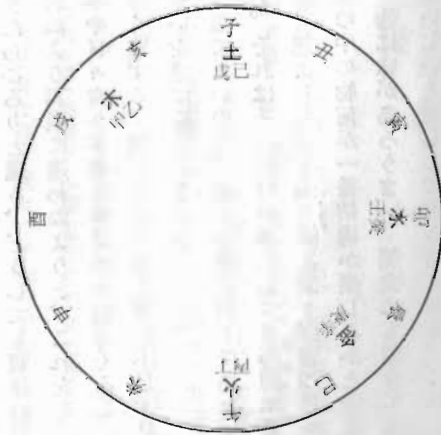
三十六歳より四十五歳迄未申、惶根尊。四十六歳より五十歳迄酉、大戸辺尊、五十一歳より六十歳迄戌亥、月読尊。皆八社の神。人間も同一なり。身の内は神様の貨物であるという事が確かに分つて腹に入れていたら、論しは誠に容易なものである。

又我一人の身と云う。小さい事を楽しむと云うは一代の苦しみ通りておるも同じ事、世界を見て楽しむ親様の御心伺うて楽しむというは、どれだけ大きいとも高いとも分らん。我身はもう十分という心定めて足納せにゃならんが、道は十分と思うたらころりと違ふ、どうしても親様の思召の処迄と云う、どうしてもこうでも、しきりた日に遅れぬよう刻限に違わぬようと、これを心にかかけ楽しむという心なくばならん。人間は目先の楽しみや日々食う事着る事又色々むさくろしい事を深く楽しんでどうもならん。不足を思う故楽しみ深く感ずる。例えば日々食う事に不足不足を思っている者程食う事に深く楽しみを持つ、又深く味いを感ずるといふようなもの。

世の中に塩は塩の味と云う、味噌は味噌と云う、塩は塩でよいのや、塩が味噌と同じであれば間違っているのや。どちらが嘘であるか迷うておる如し。それはそれだけの事にしてその用に重きを置いて通ればよい。それを用よりも体、体よりも想、想よりも美と云う味と云う肝腎の用が分らんようになる。甘い物と云うと食過ぎるが如く、世の中の物何が一番結構か楽しみかかと云うに、食物が楽しみと云うても、それを段々貪りてみよ、物に味があるうまい。美食にも飽きてとんと楽しみなく通りている人もあれば、まずい物でもおいしいと楽しんでおる者もある。これど

世界八方身の内八方の理

見尽くせんを法といひ  
見尽くせるを方という



人間五倫五体世界五行  
同一の理即ち十子

五倫は首より上、心の働き  
五体は首より下、身の働き

ちらが食事の楽しみにしているか。酒かと云うても酒につかりて動めている者にとつては楽しみにしておらん。その心と、水飲んでもあゝ息ついたと云うておると、どちらが飲んで楽しみがあるか。すれば物に別はない。

又同じ心の理は八つ、同じ身体で万人同じものなら一つ味と云う。身上に別もない、只心一つの治め方ばかりや。世上どんな物をも眺めて見ればどんな足納もつくつと云う。又足納真から治めたら不足という心も起らぬ。別に望む心も出ぬ。望まねば別に深くも感じぬ。これはこれの味と云うだけのもの、楽しみとも苦しみともならん。これでなくてはならん。ただ天の持え御与えの御心を喜ぶだけになる。凡夫と云う物は楽しみあるよう思う者は物だけのもの、何程結構な物と云うても我れに持っている心の理によつては楽しみとならん事が分らん。天の御心尽しの理が分らん。金も砂の如く数あれば大切でない。酒も水の如く多ければ大切と思ふまい。水も酒の如くせねば取れぬ物とすれば酒の価がする。物より外に楽しみがないと思ふが凡夫。

真の楽しみを知らん者はその場その場だけのもの、続かんような楽しみ。酒を飲む、飲んだら酔う、酔うたら要らん、要らんとした酒の楽しみあるまい。花を見る、見たら一時楽しむ、何程も見れば飽きる、飽きたら花は楽しみとならん。それなら何が心に真から楽しい、真から嬉しい面白というか、何が切目ないかという。めいめい名が楽しみか賞められるが楽しみか、好き嫌い、この心はどこから出るか。一つの癖とも云う、めいめい因縁心とも云う。人に可愛がら



れて好く者もあり、人に立てて貰うて好く者もあり、これは十人十人皆違う中に、高慢の人は可愛がられて喜ばんかわり、立られたら何よりの妙味を感じる、これ高慢心ある故である。親様の御心は、どうして貰うて喜ぶと云うでなく、立ててくれればめいめい立てられる理を拵え、共に理が賑やかに成るで楽しみ給う。何もめいめいにどうこう望み給うのやない、思う理を返して下され、返せば楽しいやろう。そこで誠結構と心計る、その心の喜ぶ理を見ようと云うより外に御心はない。

親様は人間に心一つを授け、万物は親様の物、それで心を受取りて物を与え下さる。これ物は天の心の籠りたる物、心一つによりて天より如何なる事も自由用という。そこで真心一つを天へ供えて通る程誠はなし、楽しみはなし。心一つに日々感謝と云う、日々恋しいと云う、日々親の理を真から奉る心。借物が分れば心一つより外に我れはあろうまい、神の魂と云うても理を分けて八柱と云うて理は天の心、天の力というて別に天より働いておる働きは皆月日様の光、月日様の力なり。日々互々助け合いと云う。互に人の為を思う、人の楽しみ見て楽しむと云う心より誠はない、誠の楽しみはない。これが元々親様の思付きとも云う。又この心が元となりて今日世が出来、万物が出来、御苦勞下され、ただここに止まる、これより外にない。人間互々結構結構という心を使うから、見て楽しみ、楽しむ心を見て楽しみ下さる。これより外にない。

## 八柱神及び御心

仁は月様の情より仁が出る。人を慈愛しむ、養い育てるといふ親心。

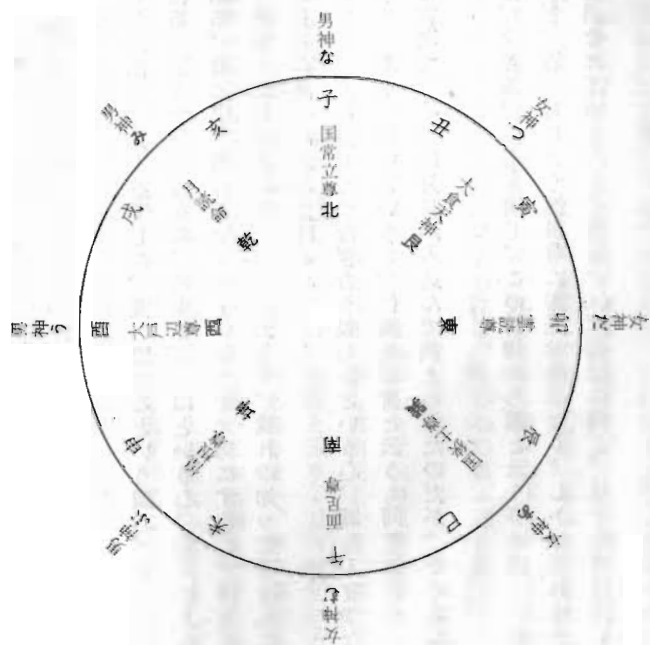
義は惶根尊から出る。云うた事を違えぬ、約束を違えぬという心。相互に人に満足与える誠。礼は月読尊から出る。君に忠、親に孝をするという人を大切にする心、即ち互人を立てる心。智は大食天尊より出る。これは互に知り合うと云うて、我れの知った事は人に教える、互に知りて行くという心、見分け聞分けかみ分ける心。

信は国狭土尊より出る。互に睦じくつなぎ合う親しむという心、即ち人をつなぐ心。

木火土金水というも、地水火風空というも、仁義礼智信と云うも同じ五行の人道である。これは儒教から出ておる言葉で、孔子に月日が入込んで教えられたのだが、その本が分らなないのである。

惶根尊は義の神様、交際義理の道も同じ、この神様から義と云う事は出ている。すべて皆月日二神より出る徳なれど、義は月日より惶根尊に御任せあるなり。しかしこれは余り偏よると偏屈になる。いわゆる仁過ぐれば弱となり、義過ぐれば偏屈の例え。以下礼智信同じ。皆裏表にて八柱神の心。





又なむあみだぶつうの意味を人間及び一家にとれば、なほ國常立尊の理を夫、亭主より、など云い出し云い付ける理。

むは面足尊の理で妻、夫の仰せに従わむと答え飲込み受ける理。父母と云うは天地夫婦なり。なむと云うも同じ事、天地日月同じ事、地と天とは実の親なり。(水気潤い温みも同じ)。

あは国狭土尊の理で女の道具の神様なり。又亭主の働き得るつなぎ物を待つて妻子があと口をあげ開く理。(皮つなぎも同じ)。

みは月読尊の理で男一の道具の神様なり。又物実を与え、みを入れ、みを立て養う理。(辛骨突張りも同じ)。だは雲読尊の理で人間を胎内に宿し込みくださる時の理。又両便をだと通じ下さる理。(飲食い出入り、水気あげさげも同じ)。ぶは惶根尊の理で、ぶくつと懐胎する理。又口々ぶうくと息をする理。(言葉風吹分けも同じ)。つは大食天尊の理で、胎内肉縁を、つと切り下さる理、又死する時息を切り玉う理(切分けも同じ)。うは大戸辺尊の理で、胎内より引出し下さる理。又うんよく、うと生れ出る理(導き引伸ばしも同じ)。

元々泥海中に月日いたばかりでお互心と心の陽気見合うて通るより、多く子供抱えて陽気を見よう楽しみと云う理を始めようと思召され、人間をはじめ陽気の者を拵え陽気暮しの理を見て楽しんでもうという思いつき、なんと世界を始めかけたら、日様に御心示し給う御相談という。

奈と云えば無と云う、むは睦じいともい。これ互々の心の誠を通うと云う。又向うがこちら

を思う思いとその思いが一つに成りたる理。好きも嫌いも楽しみも一つとし給い、目的も一つとし給うた理である。異存不足の無い処、はい結構と人間に譬えば恋人に呼ばれて答えるような理は末代生涯変らぬ理となりて始め給うた、これがこの世の元。又人間の思いと違ふ。違ふ筈や、世界は神の物、皆自由にならん物は一つもない。無理すれば一時どんな模様にも変えられんではないけれど、親という子という、どうもならん理は可愛い一条である。どうしてなりともこうしてなりとも踏張ってやりたい、及ぶ限りは出来る限りはというはこれ有難き親の理、御心。そこで道も年限遅れたというは、皆心とんと揃わんからや。なれどこれ一時揃えられん事はないが、成るべくなら日を延ばしてなりとも一人でも多く、一つでも苦しみせつなみ見せんようというは真の御心。どおせ通らにゃならん、なれど一時に迫れば皆々苦しむどうもならんから遅れて来たのや。

### 八埃の幹より千筋の枝葉

身の内は身の内御守護処によりて明かなり。一日の理も一代の理も辰巳に当たる時、この時に起る事は縁談、色情、金銭の間違ひの理が起る。この道に關しつなぎを切った埃、即ち恨みの埃が現れる。この埃が作つてあればこの御意見身の内に現れる。又この時に事情が起り或は迷い或は苦しみ、失敗、死亡等。

一日に取れば五つ四つの刻限、一代に取つては廿一歳より卅歳迄、十年間は国狭土尊、前世にこの道に大きな埃があつたら、この時に死んでしまふ(大抵は色情)。又すべて前世に因縁を作つた刻限になると病が重くなる、或はその事情に迫る。戌亥も同じ理に取り悟る事。されど月読尊様には気の短い剛情、人を踏倒す心、立てるべき処立てん腹立ちの埃、その性質に悟る。一代に取れば五十一歳より六十歳迄。又六十歳より上は元の一に戻る還曆、同じく未申に当る時現れる事、人の害を成す風を吹かしてある言葉で人を倒してある、即ち憎みの埃が現れる。卅六歳より四十五歳迄惶根尊様。丑寅大食天尊様も同じ理に取り悟る事。然して丑寅は怨の埃、その性質、例えば人を憎む埃も身慾より起る如し。皆、かくの如く天の理を知るなり。神様の御心と人間心の埃とを悟りて論ず。論しは裏から論すか表から論すかこれが見分けによる。これが肝腎なり。然して人に怨み腹立てさすような者は我れも怨み腹立ちの埃ある。一家でも内輪である心は外にもその心ある如し。

水は低きに向う。低きに宿り静かな処に威がある。火は高きに向うて空を思う。賑やかな処に懐かしき理がある。人間は片寄りはいかぬ。空も下を思わにゃならん。なれど理は天が台、天思うて下思うというのでなくばならん。下思う故天思うというは元を知らぬ故なり。いかに天に無理ありても下従わにゃならず、下だけだけ苦しくとも天の為には動めにゃならんとは心に持つ理。さればとて天は親、無理を云う事は一つもない、下を思い下さる一条の外はない。心の台と

云う、根というを天に置き、天の思召一条に添うて通らにゃならん。一つの心に智は借物、氣も借物、心一つの理は皆同じ事（理氣智水火風も同じ）。なれども天の親神の御心入込み給うという、心貸し給うというは、心大きく低くふとる、これ心に心貸し下さるなり。一代やない末代の理なれど、旬によりて入込み給うなり。俺という我と云うは、人間にありてはならん。めい／＼の心から智恵除けたらいか。暗闇に立った如く、氣退いたらいかん。心細り瘦せたら、我心というも勇む事出来ようまい、いずんで何もかも出来やせん。心に悪理というて因縁心の理添うて来たらばいか。又来るを待つてこれはいかんと思ひながら押えられぬようになる。これ第一聞分け。めい／＼心というてこの三つの理を支配される道聞分ねばならん。因縁心の理を切りて頂くは、前々心あたり充分の懺悔という。親様にもたれて七柱様の理で払うて下さる。これ因縁心の埃を払うという。迷わした理から迷わにゃならん、欺した理からうるたえにゃならん。万事成した理から案じが湧いてくる。狂わした理から狂う心出来てくる。人から返して来ずとも、めい／＼心に添うて湧いてくるという。

## 八埃の裏表

欲しいから惜しい。腹立ちには恨みより生ず。恨みでこらえておいたら国狭土尊の御意見なれど、

恨みがこらえ切れぬゆえ腹立ちとなる。腹立ちには恨みが元、我身を恨みていれば腹立ちにならぬ。又腹立ちから恨みとなる。可愛いと憎みが裏表、我身が可愛いから人が憎い、人が憎いから我身が可愛い。怒と高慢、怒から高慢、高慢がしたいに故怒をする。

辛い、甘い、苦い、酸い、四つが食物味の元。月様の辛味に苦味が合うて塩となる。にがりが出る。これが月様御苦心の理、味の王、四の王。甘味は日様の慈悲の現れ、味は初め苦く酸くなれば終り、春。苦いものが酸くなる、秋の理。

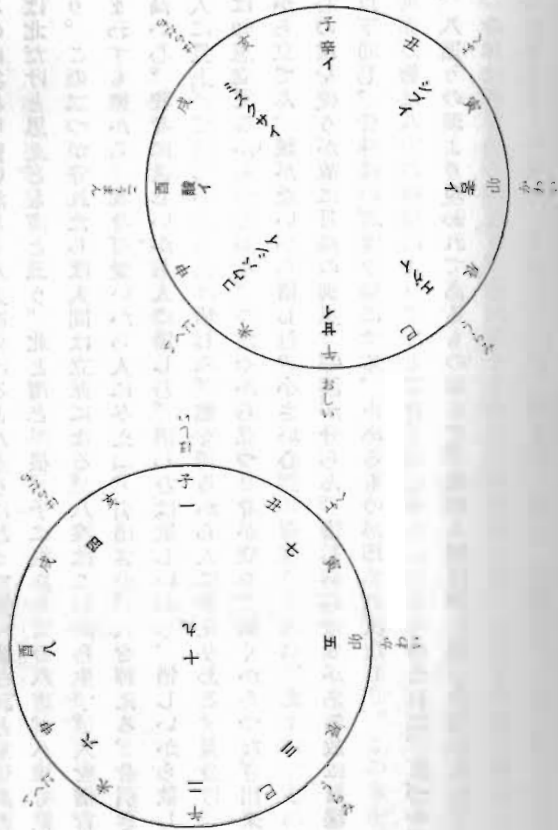
食物の味は神様の真実心味いなり。神様の御心味いと人間心の味いと別の別がある。月様は情け水心、誠治まる心、人間足納は誠正直、水心にて天の理にはまる。足納の理が治まらねば不足、不足から腹立ち、高慢、憎み、惜しみ、恨み、可愛いとなり、遂に怒で固ってしまう。悪因縁の暗闇に入る。（逆廻り埃）

足納の理が治まれば怒が切れる。足納によって前世の悪因縁が切れる。心に神の明りが入る。恰も丑寅刻を切れて卯刻に至れば世界が明るくなる如く、心鮮かに正邪理非判断となる。怒分へだてなく人をつなぐ、つながる、慈悲人を育てる。満足与える。高慢が無くなる故、我身に徳がつく。人を立てる、大切にされる心になりて我身が立つ。怒を切るは思い切り、諦め、聞分けと云うも同じ理。聞分けよきは思切り（物の区別区域をつける）よき理、心定めるも同じ誠無く心小さく則ち怒深くして思い切り、心さばきの出来ぬ時は心発散せず、精神清浄綺麗に成る事能わ

ず。思い切り無き心の定まらぬ小さき心が慾にて、きたないと云う。

又欲しいと云うも我身へこうして欲しい、どうして欲しい、どう思つて欲しいと思ふのが人間心。ただどうしてこうして欲しいは自分の他の者と者との勤め合いをさして、共に楽しみたい、めん／＼には何を取るのやない、ただ見て楽しむと云うは親様の御心、人間でも子供にどうして欲しいと云うは真の親の理であらうまい。ただどうしてやったらと云う。やりたいばかりに親の心を知るのを待っている。どこへたよらいでも大丈夫な親に力ある。それを知らしむと云うは立てて欲しいや崇めて欲しいからやない、頼りを認めさして心安心したい故である。そこで心に理を受けて自由用さして下さる。何思つても親様の心と一つ理という、同じ事思つと云うのやない、同じ理を思つと云うのや。そうして時々浮んで来る、天から写す、又時々知らず／＼のよりに言葉出る。皆天より話している、天より口を借りて云うのや。皆誰れでも心澄ませばそれ相等に理は借れる。又氣も借れる、智も借れる。これどんな者でも何んでも自由用という、借物の身と我れの物と分けてみよ。神様の力、理気智、と分けてみよ。それは一つ、ただ欲しい惜しい可愛い憎い恨み腹立ち慾高慢、これより外は我れで無し。これ思ふだけより働き無く力無し。これを現わし下さるは皆神なり。

欲しいから惜しい、腹立ちから恨み、我身恨めば腹は立たぬ。憎いから重慾する。人が可愛いかったら強慾はせぬ。例えば物を買つても同じ。人はどうでもかまわんという心が慾故、憎みと



裏表。人が可愛いかったら値ぎりこぎりはせぬようなもの。我身可愛いの高慢がしたいから、頭を高くするのは我身可愛いから。八方に分けると八通りになって別々になれども皆裏表一つなり。子と云えば北だけと思えども南と云う。北と南とが根、子に根あつての八方、八埃も欲しい惜しいが根なり。この二つが守れたら人間は立派になる。八埃はこれから生ず。人を憎む、悪口、仲言吹きまわすも慾から。我身可愛いから人に与えぬ、引出さぬ、人を押える、身引き、身勝手、行届かぬ高い心。我身に欲しいから人に惜しむ。惜しむは欲しいから、惜しいから欲しい。例えば我身が人に見上げて欲しいから負け惜しみ。慾を切るから人に満足与わる。見分け、聞分け、思い切りは知恵立てるからつながらる。つなぐから立つ。身が立ちて働くからつなぎ出来る。つなぐ心ないから立てん、誠がないから惜しむ、小さい心。

欲しい心の埃を使うが故に月様の御恩、守護が分らん。惜しい心の埃がある故に日様の御恩が分らん。以下同じ、皆神様の真実を無にする、止めるものが即ち八埃なり。

又この世界万物は八方の神様によりてことごとく造化せられたるものなれば、万づ一切は八社の御苦勞、八通りの理より現われてあるものにして、殊に人間は神の御心の現われにて神の宿り所として、身体は神を祭る所なり。恐れ多くも八方の神様には皆一方利きの御神徳にして、八社の神が一つにまとまりて現われ下さるものが人間身体と成り、靈魂は月日の分魂である故、八社の神は月日に副いて入込みその分け下されたる神魂たまごに附添い下さる故、八社の御心徳及ぶ御働き

を一身に具備してその自由用を現わす。(それ故に恩に尽きれば牛馬とも落ちる、勝手な事に神様を使うから迫る)

身の内に八社の神が入込み下さるが故にその性を受けてその心が働く。即ち八方の神にて構造せられし人間故、その原質の性より出ずる八通りの誠が働くと共に、埃も八通りより生ずるなり。八ツの埃は神の御心より出るものにして、この本をよく悟らして頂かぬ事には天理が分らぬ。御論しは神の御心即ち天理より出るものなれば、八埃が即ち論しなり、台なり。この本を知らず握らず、又これを軽視しこれを見ては、いかに苦心し年限重ぬとも、御論しが胸に鮮やかならず。神様の真実(根本真理)が治まらざれば我心魂の掃除が出来ぬ、澄まぬ。心に神宿れぬ故見分けが出来ぬ。本が分れば御論しは実に平らな容易なものなり。

神言に『この世へ出た人間というは何程の理というやわからせんで、これをよくつたえてやつてくれ。この理おさまれば何よの事もみなわかる』

又『八ツ聞いて八ツ説くだけではどうもならん……八つと云う理が心におさまらねば、どうもならん』又『一言説いたら百巻の書物……』と仰せられたる通り、天啓は一句千巻の意味を包含するものにして、成人次第見えて来る。神はひたすら吾々人間の成人を待ち給う事切なり。神の言葉を味い到するに、要するは吾々の悟りによるの外あらざるなり。即ち実践躬行によって八埃を掃除すると共に、神明かみを我心に宿し体得するによつて分り来る絶大なる靈救の道教え納めの道

故、神言に『心に納まった理は末代の理』又『末代の出世』と仰せ下さるなり。

### 八埃裏表心に悟る理

思い切りの悪きは恨み七の表三、三の裏七愆から恨み。四と六腹立ちから憎み、荒い言葉が出る。憎みから腹立ち。五と五我身も可愛い人も可愛い、これは埃にならぬ。これは天理に叶うから裏表は無いと云うてもよい。二と八表に高慢があるから心の底に惜しみあり、惜しみから高慢。一の裏九欲しいから苦をする、この世の苦は欲しいから苦。第一物の始めが欲しい、物の始まりも埃の始まりも欲しい。例えば高慢がしたいゆえ埃の方にはきぼって出すが、真実の方にはよう出さぬ。自慢や高慢で人にわるく云われよまい、きたないと思われよまいという心で出している故、心には惜しい惜しみが生ずる。高慢がしたいから惜しむ心。例えば惜しんで与えぬ、人に物を教えぬが如し。人に負けるべき事、又負けて我身に徳が付く理に叶う処を負惜しみ、負けても負けん我慢高慢なる如し。

愆切る事切らぬ、分ける事分けぬ。愆から人に恨みを受けるも、又我れが思い切り諦めをせず、人を恨むが三恨み七愆、皆裏表なり。皆埃は十の理なり。金の国狭土様に切れる大食天様の如く、裏表にて十社となる。これは埃の裏表とは違うから論しには使う事稀れなれど、我心に悟

る理なり。

### 八色の意味

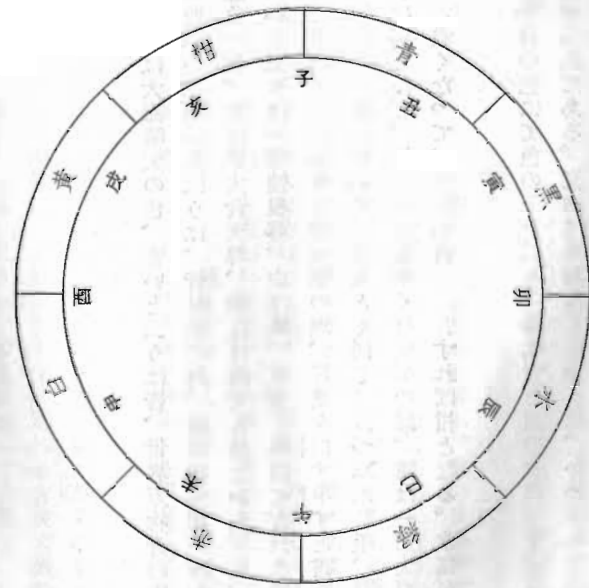
八方の神様の色で、万物が染まるなり。青は大海晴天の色、青いと云うは皆、世界万物身の内ことごとく月様の理。赤は日照光、一切明かい、赤いと云うは、皆日様の理、陰陽御夫婦の理なり。緑は国狭土尊、木葉とか、竹とか緑色一切。黒は皆大食天尊、例えば鳥でも鳥とか九官鳥、鶉の如く、天然物で黒きものは勿論。白いと云うは一切惶根尊、白は風。水青く風白くと云うて、風で皆物が白くなるなり。かの雪の如し。雪は六花と云うて惶根様の理、言葉面白く申すと書く。雲読様は水色、萌黄も同じ萌え出ずる色芽出し。草一切の色、浅黄とも同じ。万づ草木粒毛、春は萌黄、浅緑が緑となり、緑が秋になれば黄となり、柑色（にんじき）となる如く皆夫婦の理。黄は一切大戸辺尊、柑色は月読尊、秋の神様なり。黄が濃くなって、柑則ち黄に赤合すれば柑となる。水気が去る干るに従つて黄柑赤と色変る。

又紫は青六分赤四分が真正の紫、月日和合の色にて色の王と云う。緑は青と黄の合色、宇宙万物の色合は八色及び混合して皆濃淡彩色せられてある。又白は風無色とも云う故、いわゆる太陽の七色と云うが如し。真の元色は青、黄、赤、白、黒、五色なれど、陰陽合体八方の神様の理に



八方八色の理

- 青黒冬 国常立尊
- 赤白夏 大食天尊
- 水緑春 面足尊
- 黄柑秋 惶根尊
- 雲読尊
- 国狭土尊
- 大戸辺尊
- 月読尊



て、八色に分かる。人体世界万物は八色により同じく合色により、各々その神様の理を知る。例えば人体頭は青地と云うて水、月様、冬髪の黒色に大食天様、顔は夏、赤と白、赤味なき真白く青いが如きは薄情の相というは、日様の色がないから火気、誠を失うた埃ある色、色黒いは慾が深い。細かく行けば顔でも八色が現れる、皆その心使いが現れるなり。ただし心が澄まねば明細の事は見分らぬ。身体或は病でも、又すべての物、白い物が黒くなるとか、赤い物が青くなるとか、本色を失うて色々濃淡変色すればその理を知るなり。すべて天理は宇宙全体全般に渉ること故、一々これを縦横細密に説明せんとすれば、到底筆紙にてはその真味を会得し難く、尽せぬもの。又神様の御言葉は一を聞いて十を悟る、十のものを十聞かねば分らんようでは天理は容易に分らん故、神様は皆悟りばかり、論しの御言葉下さるは深き思召のある処にして、我々の力を付けて下さるものなり。心を練らし磨かせて下さるは魂に末代の徳を授けるが為なり。心の成人次第に皆分るなり。

又人間の眼には鮮かに見えねども、一昼夜でも神様の刻限によりて、世界の色変ると仰せらる。子の刻は青、丑寅の刻は一昼夜で最も暗黒の時、卯の刻明け六つ暁方水色、辰巳刻緑、午刻赤明か、未申の刻白、そよ／＼と風起りて、一昼夜で最も明白の時、白昼、酉の刻、暮六つ日西に傾く頃黄、戌亥刻柑、黒夜と云うは丑寅の刻、白昼と云うは未申の刻。一年にて寒暑と同じ。あやというは黒白の事なり、即ち夜昼にて丑寅大食天尊、未申惶根尊なり。一日も一年も一代も同一

に御守護下さるなり。

万物の青いと云うは水という理にて、月様の御心苦勞と云う理なり。宇宙海河の青く、山野青々として繁茂する森羅万象は皆水より現れ、苦勞と云う理が榮えておるなり。月様元々無き人間、無き世界御造化下さる御苦勞の理、月様辛味に苦味が合うて潮となる。塩は味の王、四季四方四王、人間も苦勞と云う理が最も尊き事なり。苦勞と云う理があつて万事榮え成立つ。

### 一日と一と月と同一の理

一日にて夜子丑寅の三時は一日より八日迄、朝卯辰巳の三時は八日より十五日迄、昼午未申三時は十六日夜九つより二十三日迄、宵酉戌亥の三時は二十三日より晦日宵亥戌酉の刻迄なり。  
(一日夜九つ子刻より三十時、即ち二日半、三日朝巳刻迄、) (三日の昼九つ、午刻より、五日宵の四つ、亥刻迄、) (六日夜九つ子刻より、八日朝四つ巳刻迄、) 右七日半にて九十時は一日、三時と同一にて一カ月七日半四つ、即ち三十日、三百六十時は一日十二時と同一なり。一日の一と時と一と月の三十時と一日の三時と一と月の九十時と同一、一日十二時と一と月三百二十時と同一の理なり。七日半九十時、十五日百八十時は満月、三十日は三百六十時暗黒なり。

### 一年と一と月の同一の理

冬至より三つ月九十日間は一と月にては朔日、夜九つ子刻より八日朝巳の刻迄九十時、春分より三月、九十日間は一と月にては八日、昼九の午の刻より十五日宵四つ、亥の刻まで九十時、半年百八十日、半月百八十時。夏至より三つ月、九十日間は一と月にては十六日。夜九つ子の刻より二十三日、朝四つ巳の刻迄九十時、秋分より三つ月、九十日間は一と月にては二十三日、昼九つ午の刻より三十日、宵四つ亥の刻迄九十時と同一なり。一年三百六十日と一と月三百六十時と同一なり。三月節句、九月節句は一年中の大潮時なり。一と月にては八日上弦、二十三日下弦、一年三百六十日と一と月三百六十刻が天の理なれど、人間男女大小の理あるゆえ月にも大小の守護下さるなり。大が三十日、小が二十九日、人間男女大の理にて五尺二寸、女小の理にて四尺八寸、人間初め世界始まりの時、伊諾冊の二尊五尺の人間に成ると云い玉いたる故五尺は一人前なり。男女夫婦にて一丈一とたけ男五尺二寸、女四尺八寸、四寸の違いあるは一の道具の凸凹ある理。月に大小と閏月ある、閏月は女に三十年間月水の御守護下さる理なり。月経又月役ともいう。



一日と一年と同一の理

夜九つ冬至

朝六つ春分

昼九つ夏至

宵六つ秋分

丑刻大寒

未刻大暑

冬至 陰十一月廿一日

春分 陰三月二十日

夏至 陰五月十五日

秋分 陰八月廿三日

大寒 陰十二月二十日

大暑 陰六月二十日

中半月節半月合わして一月の理は一日にては上刻下刻合わして一刻と同じ理なり。

一日廿四刻一年廿四刻の訳

夜九つ	十一月	中	冬至	九つ半	十二月	節
八つ	十二月	中		八つ半	正月	節
七つ	正月	中		七つ半	二月	節
朝六つ	二月	中	春分	六つ半	三月	節
五つ	三月	中		五つ半	四月	節

四つ	四月中			四つ半	五月	節
昼九つ	五月中	夏至		九つ半	六月	節
八つ	六月中			八つ半	七月	節
七つ	七月中			七つ半	八月	節
宵六つ	八月中	秋分		六つ半	九月	節
五つ	九月中			五つ半	十月	節
四つ	十月中			四つ半	十一月	節

人間一代の理

五歳	冬	至	一六、七、八歳	冬土用
二十歳	彼岸	・二月中	廿一、二、三歳	春土用
三十五歳	夏	至	卅六、七、八歳	夏土用
五十歳	彼岸	・八月中	五十一、二、三歳	秋土用

右土用の理老年(冬十五日春十五日) 六十日と二代六十年(幼十五年の内三年、壮十五年の内三年)と同一の理。

最も土用四郎と云う日より十五日の間、十八日と云うは土用四郎前の三日を加えて十八日なり。八十八夜と云うは人間一代の内にて二十四にて前厄なり、二百十日は四十二の後厄なり。

身の内が出来て一日が出来る。元々人間がこの世に生れ出た故一日という事が出来始まる。一日が出来て一年が出来、一年が出来て六十年が出来る。四季故に八方の神が四季十二支十二刻十二カ月五年ずつ三つ寄せて十五年を一季とし、五年と云うは六十一カ月、一カ月は閏月五年を十二合せて六十年。一年の閏年を加え六十一一年が還暦と巡戻る。天理は冬が始まり、十五歳迄を冬の理、世界草木と同じ。冬の間は草木に色なきと同じ。十六歳より三十歳迄を春、卅一歳より四十五歳迄夏、四十六歳より六十歳迄秋の理。春は芽生じ一代の内最も花やか美麗なる時、花咲き色気が充つ。夏は茂る智慧盛りと云う、又慾が強くなる、一日にては午未申の刻。秋は実乗る、(一と刻、即ち二時間と五年と同じ理なり)。(五年と一と月と同じ理)十五年が一季、六十年が四季、一年と同じ理なり。

## 九四の詠

九つ子四つ亥九つが第一時、四つが第六時、一日十二時なり。

夜九つ子の刻月様、この世の始まり夜が始まり。昼九つ午の刻、日様、月日は陰陽、天地交合、

万物の親様なり。一年に取れば冬至が子元、一代にては生れ出で五カ年が子、子は北南、北がこの世八方の根なり。夜九つ昼九つ、月日あって人間万物を生ず。九の胴九の世界という。

夜九つが始まり故九つが一つ、八つが二つ、七つが三つ、六つが四つ、五つが五つ、四つが六つなる故皆十となる。よって一九が九にて、九つが子の刻に始まり九つに二つ目を掛合わして二九十八で、八つが丑の刻、三九二十七で七つ寅、四九三十六で、六つ卯の刻、五九四十五で、五つ辰、六九五十四で、四つ巳刻にて六刻四つ時なり。

同じく昼日様九つにて始まり、一九が九、九つが午の刻、二九十八、八つ未、七つ申、六つ酉、五つ戌、四つ亥刻にて六刻即ち四つ時にて一昼夜終る。合して十二刻は十二支八柱の神、一日一年一代身の内も同じ理、身の内にあるもの世界にあり、世界にあるもの身の内にあり。夜九つ昼九つ九九の本、算術の根元は皆この理より始まる。宇宙の真理は皆九九で理が出るなり。算術と云う術法なり。或は測量とか天文とかすべてこれにて明算する。算術は天理より教えられたるなり。十路盤と云う、皆世界は十より無い十と云う世界なり。

天理は根元、学問は枝末なり。この世の根は月様、子が一番の元、故に人間も子が宿るが始まりなり。月泊まると云う、月様宿り下さるなり。故に人間子の宿る所を子宮と云う。竜宮と云うも同じ意味にて、身の内では子宮、世界では竜宮という。

## 大小閏の訳

月に大小あるは男大、女小の形あり、故に親神その理を計り御守護くださるは六十年に十二カ月、五年に一月の閏あるは、女に月水をくださるなり。晦というは月様全光悉皆黒くなり玉う。則ち宵酉六つ戌五つ亥四つの三時にて真闇なり。朔日と云うは夜子九つ丑八つ寅七つの三時にて一分白くなり玉う。一日四分というは一年四季の理なり。四分ずつ十五は則ち六十分にて満月なり。十六日夜子丑寅五カ年六十一カ月は一つの閏、六十年に七百三十二カ月は十二カ月の間に則ち一カ年なり。女十六より四十五まで三十年の間に三百六十日の不用水あり、一年に十二日の不用水あり。一日子刻より亥刻迄月水満ちる時は働き不自由なるゆえに、三日或は長きは五日そして御守護くださるは親神様子を憐み給うなり。

十八歳より四十八歳、二十歳より五十歳、十六歳より早きと五十歳より遅きは前世因縁と親の因縁の理あるなり。

月経は天の月様の恵みなり。閏壬は雲読様が水を分けくださる理なり。女の魂は日様の分身故三十年間の月水無ければ女は焼け死ぬ故、月様より授け下さる水なれど、女の身が日様の分身故赤き心写りて赤くなる。すべて血液は日様に赤くなる。三十年間月様よりそれだけの余分の

水を御守護下さるで、七十とか、八十、九十と、男と同様に連れて通り下さる。月経は色気の花なり、色気なき者にはなし。世界にては桃の花と同じ理、廿九日の小月が女の理故閏月が月経なり。閏月があつて男と同じ事になる理なり。

## 朔日満月晦の理

朔日子の刻より八日巳の刻迄冬の理、半月八日午の刻より十五日亥の刻迄春の理、十六日子の刻より二十三日巳の刻迄夏の理、二十三日午の刻より三十日亥の刻迄秋の理、八日上弦、半月二三日、下弦半月、朔日を新月と云い、八日を半月と云う。十五日を満月と云い、二十三日を半月と云うなり。朔日と云うは月様夜の九つ子刻より始めて宵の四つ亥刻の至りて四分の光明を放ち給うを云う。ただし晦というは月様全光悉皆黒くなり給うて月籠りというなり。朔日というは朝六つ卯刻より宵六つ酉刻を云う。十五夜は宵六つ酉刻より朝六つ卯刻迄を云う。

## 月の出入りの訳

朔日の月様は朝六つ卯刻に出給い、宵六つ酉刻に入り給う

八日の月様は昼九つ午刻に出給い、夜九つ子刻に入り給う  
十五日の月様は宵六つ酉刻に出給い、朝六つ卯刻に入り給う  
廿三日の月様は夜九つ子刻に出給い、昼九つ午刻に入り給う  
朔日の昼と十五日の夜と表と裏なり。八日の昼と二十三日の夜と表と裏なり。

朔日 新月 八日 上弦半月  
十五日 満月 廿三夜 下弦半月

### 満潮干汐の訳

朔日十五日朝六つ宵六つ 満潮 夜九つ昼九つ 干潮なり  
八日廿三夜夜九つ昼九つ 満潮 朝六つ宵六つ 干潮なり

しおとは四方の事、四季の事。この世は月様の御神体、北に頭を取り東より南西と四方くるり  
としめる世界なり。この御心味四王と云う。四方と云う心を真と云う。真を骨と云う。骨は四方  
根と云うも同じ事。この真は神なり、心なり。その真の気が則ち味なり、天地なり。大海の潮汐  
は天地の息なり。天地の息には呼吸と云うて一日一夜に二度宛ずつの息あり。則ち月息は潮満ち  
かけて来る。又日の息には汐干くなり。月息はこれ元素地に下りて潮ゆるみ溢れて殖ゆる。日の

息はこれ元素地上りて汐沈む。これによって満干するものなり。この潮の差し引きには刻限四  
分宛ずつ違い、日々にあり。

月様はこの世界の王、月体天地の自由用にて人間あり、世界あり。それには万物ある大海の潮  
汐の満干も月の出に満ち上がり、月の入るには同じく潮満ち上がる。これ月は万物を司どる元  
にして、人間鳥畜類魚貝の類草木等に至る迄、天の月様の養い下さる潮汐の味を世界へ潤わせ給う  
故に、大海の塩水が引くなり。故に月の天井には必ず汐干となりて引く。しかして東西南北の違  
いにより満干の刻限少しは違う。違うだけ月の出入りも遅き早きあり。則ち十五日の月の出は夕  
の六つ時にて、潮の満つるも夕六つ時なり。月天井は夜九つ時なり。この時は全く潮干る底なり。  
然れども世界の広き事なれば、東洋と西洋との月の出入りも時刻に違いある故、満干も違い有る  
なり。月の出入りにつれて満干をするものなれば、そこで月の天井には必ず潮干るなり。刻限の  
違ふは日々日の出の時が違う故なり。月日には夜昼同じように照し下さる故、神の守護に違いは  
なければ、例えば朝寅の七つに日の出る処と卯の六つに出る処と五つに出る処とある如く、日の  
入りも申の七つに入る処も六つに入る戌の五つに入る処とある故、潮満干も同じ。又東西南北に  
よって少しは違い出来る。世界の真の地は元の子として神として一として天地世界の元なり。東  
とは日を貸すと云うて人間万物の温みを与えて照し下さるものなるが、その処によって方角も同  
じからず。北と云う根は元故定まれども、東西南の三方は所々に少々に日の出も違うなり。月

の出も同じ事。やはり東より西へ入るなれど、出入りの刻限は違い出来るなり。

朔日は朝六つに出て暮六つに入らるるが、一日に四分ずつ遅れて三日には朝五つ二分に出て、夕の五つ二分に入らるる故、夕方には糸目程の月を拜む。十五日迄刻限四分ずつ遅れて十六日より四分ずつ早まる故、元の朔日には朝の六つ時となる。月の三十日を月籠りと云う。この四分と云うは一刻の四分にて、一刻は時計の二時間百二十分の四分、四十八分ずつなり。又月は一日四分ずつ光を増して、十五日に六十分満月となるのは水を司どる、月様は人間万物生い育ちの守護下さるその万物の飲む水なり。この飲む水を一日より十五日迄天理の元素と共に月様が与え下さるなり。又十五日より三十日迄は、万物に水氣を与える為に元素をゆるめて下さるなり。月の光は元素なり。人間万物この元素なくては一日も活きる事出来ん。この元素の水氣もいつ迄も入れておいても温度の違うて腐る故、日々に四分々々の四季の運びによって水をゆるめ巡り、又与えて守護下さるなり。月は天の父親、日は天の母親、万物の親様なり。月日の御守護なくばいかなる物も生を有する事出来ざるなり。人間も母親の胎内へ宿し込み日々の理の増すも成長するも、草木の育つも、花咲くも実乗るも、味の付くも、月日より水氣を与えたり暖めたり守護下さる故十用に育つなり。又月は万物の元の父に物を引与えて下さるなり。日は万物を育て下さる元の母なり。月日は天地の夫婦南無と云うも同じ事なり。月日あって天地あり。天地あって夫婦あり、夫婦あって人間あり、人間あって万物あり、万物あってそれ々の用をなす。されば月日の守護

は広大無限の南無なり。人間はなむくと二人ずつ宿し込み下されたる故、なむくと陽氣に暮す事なり。大海の潮はなむくといつも変らぬ働きあるは天地の息。波と云うはなむと云うも同じ理なり。

### しほみち、しほ干の理

「し」というのは四方の事、四季の事、しめる事をいう。この世は国常立尊御姿は大理王なり。北に頭とり東より南西と四方をくるりとしめいるせかいなり。この神様の心の味をしほ(四王)という。心をしんというも、又骨をしんというも同じ事。ほねとは四方の根という事なり。この世のしんは神、神もしん、心もしん、そのしんの王は天地(あじ)なり。大海のしほがみちたり又引いたりするは天地のいきなり。天地のいきは、二こうきゅうと云うて、一夜一日に二度のいきなり。月いきにはしほみちかけてくる、又日いきにはしほもひくなり。その訳は月いきにはこの世の元素地に下り、しほゆるみてふえる日、いきには元素のぼりてしほちぢむ。しほちぢむ時は地も宇く。しほほるも時は地しぢむなり、これによりて潮満ち潮干とする者なり。この潮満干には刻限四分ずつの違い日々であり。これは月の満かけと出入りの理に委しく記す。

潮 汐

大潮 十六日	朝六つ四分	改 時間	前六時四十八分	此時間の左右共 千汐時 月の天井なり	改 時間	前十二時四十八分
大潮 十七日	朝六つ八分		後同	昼九つ四分		後同
中潮 十八日	朝五つ二分		前七時三十六分	昼九つ八分		前一時三十六分
中潮 十九日	夕同		後同	夜同		後同
中潮 二十日	朝五つ六分		前八時二十四分	昼八つ二分		前二時二十四分
中潮 廿一日	夕同		後同	夜同		後同
小潮 廿二日	昼四つ四分		前九時十二分	昼八つ六分		前三時十二分
小潮 廿三日	夜		後同	夜七つ時		後同
小潮 廿四日	昼九つ六分		前十時	昼七つ時		前四時
小潮 廿五日	夜八つ時		後	夜		後
			前二時	昼七つ四分		前四時四十八分
			後	夜		後
			前十一時三十六分	昼七つ八分		前五時三十六分
			後	夜		後
			前〇時二十四分	昼六つ二分		前六時二十四分
			後	夜		後
			前一時十二分	夕六つ六分		前七時十二分
			後	朝		後
			後二時	夕五つ時		後八時
			前	朝		前

長潮 十一日	昼八つ四分	改 時間	後二時四十八分	夕五つ四分	改 時間	後八時四十八分
長潮 十二日	夜		前	朝		前
長潮 十三日	昼八つ八分		後三時四十六分	夕五つ八分		後九時四十六分
長潮 十四日	夜		前	朝		前
長潮 十五日	昼七つ二分		後四時廿四分	昼四つ三分		後十時廿四分
長潮 十六日	夜		前	夜		前
長潮 十七日	昼七つ六分		後五時十二分	昼四つ六分		後十一時十二分
長潮 十八日	夜		前	夜		前
長潮 十九日	夕六つ時		後六時	夜九つ時		後十二時
長潮 二十日	朝		前	夜		前

十六日より三十日迄は、左月の出、右は日の入りなり。

月は天の眼、国常立尊様はこの世の王、天一枚は月の体。天の十用で人間あり、それ〴〵万物もある。又大海の汐差引きもこの月の出のしほみちあがり、又月の入りには同じく汐みちあがるなり。これ月は万物司る元にて、人間も鳥畜類も草木に至る迄天の月様のやしなひ下さる故、汐の味を世界へうるおす故、大海のしほにふくんでいる元素天に登り、刻四季々に汐ちぢんでゐるなり。月天井には限らず汐かわくとなれども、世界中同じ体、月の運びにつれて汐も干くものなれば、東西南北の違いなり。違うだけ月の出入りもおおそき、早き、とあるなり。即ち十五日の月の出は夕の六つ時なり。天井の月あるは夜九つ時、この時は全く汐の干そかなり。なれど世界



広き事なれば、東洋と西洋とは月の出入りの時刻違いある故、汐の満干も又違いあるなり。なれど月の出入りに連れて汐満干きするものなれば、その所々では月の天井には必ず汐干くるなり。

刻限の違うは、日日、日の出の時が違うから刻限が違うなり。月日は夜も昼も同じような世を照しくださる故、神の守護は違わねど、朝寅の七つに日の出る所と卯の六つに日の見る所と、又辰の五つにあがりさす所との違いあって、日の入るのも申の七つに日の入る所と酉の六つにくらくなる所と、戌の四つに日の入る所とある故、月の出入りもそれく違うなり。故に汐の満干くも早きおそき違いなり。我国にて月の入るとき日の出と見える所もある故、これを世界のへんばと云う。又東西南北もその理によりて違うなり。

これは世界のしん、これを元とし子とし神とし一として天地世界のほん真中なり。東というは日をかすという事、人間万物にぬくみを与えて照す理で日がしと云う。皆その所によって方角同じからず。その証拠には今東の海より日の出を見て西の山へ入るように見ゆれども、その西の山を越えて西へ行く時は、又一だん西と見えたる山が東となつて又日の出の見る事あるなり。北という根は定まれども、東西南の三方は所々で日の出違うものなり。又月の出も同じ事、やはり東より西へむかひいれば出る刻限は違うなり。その理由は左に記す。

北巳は元として根は替らねども、日の回るに応じ東も西もくるうなり。人間も背中は北左は東、右は西前は南ゆえに、一方見えても後見えん理は夜昼ある如く世界へんば。この如く昼でも夜の

所あり、又夜でも日のである所あり。月も日も同じ事や。十五の月はよる満ちなれば又うらはよる満月と成故、いづくの所にも同じ満月を見る。

又三カ月もその通り、日も月もいづくに迄も守護の理は変わる事なし。又月は一月目に同じ六つ時に出てくれ六つに入る故、月を見る事なければとも四分ずつおかれて、三日には朝の五つ二分に出て夕の五つ二分に入る故、夕方より糸目ほどの月を拝する事あり。十五日迄刻限四分々々とおかれて十六日より四分々々と早やまる故に、元の一日は朝の六つ時となる。月の三十日を月ごもりというなり。

又月は一六分六厘六毛ずつ理を増して十五日には十分の満月となるのは、水の可なる月は人間も畜鳥類も木竹草も月の守護でいきている。皆人間にはのうずいあり。木竹草にものうずいあり。こののうずいを一日より十五日まで次第々々に天理の元素と共に月がだいて守護するなり。又十六日より三十日まで万物にのうずい入るため元素をゆるめるなり。月の光りは元素なり。人間でも草木でもこの元素がなくては何にもならん故に、月夜から木も竹も、のうがない故切つていては虫が付く。暗夜には木でも竹でも力十分ある故に、いつ迄も虫もつかん。又海老や蟹でも月夜回りにはのうみが少なく、暗夜には十分のう水あるはこれ証拠なり。この理いつまでもその天理の水きを入れておいても、ぬくみの力でくさる故、日々四分々々の四季の運びによりてのう水をだきしめたり、又与えたりして守護あるなり。

月は父親、日は母親なり。月日は人間万物の主なり、この月日守護なくば世界を保ちいきをする事出来んものなり。人間母の胎内へ宿り込むのも日々理の増すのも生れ出るのも成人するのも又草木のそだつも花の咲くのも色のつくのも味のつくのも、この月様が水をだいたりゆるめたり守護する故に、いかなる十用も出来るなり。月は万物のもと父なり、日は万物育てる母なり。月日、天地、ふうふも南無と云うのも同じ事、月日あつて天地あり、天地あつて夫婦あり、夫婦あつて人間もあり、人間あつてそれれ用をなす。されば月日の守護は広大無限の南無なり。人間もなむなむと二人ずつ宿し込んだゆえこの世なむなむと陽気に暮す事なり。大海の汐もなむなむとたえず働き、よふきあじをいつまでもかわらん理をなみ(渡)という。なむというのも同じ事なり。

## 太陰 太陽

太陰 表鬼門 朝明星 金 神 天一 地六

太陽 裏鬼門 宵明星 破軍星

見る事は 月日 朝明星 宵明星

聞く事は 金神 破軍星 表鬼門 九曜星 (風の神)

月日朝明星、宵明星は東西南北でも四季でも幸故よく見える。人間も目は正面で耳は両方に分けてある如し。三十年人間一生六十年一代の理、夜の燈明は宵明星の理、朝の明星は供える水、晝夜の神様なり。

男のする事は引出す事は向うの分らんこと故、宵の明星が上がれば世界は暗くなる。例えば商売でも何程引出すか儲けるか分らん事、百姓でもすべて男の働きは月様の方殖える方故陰。女のする事は物をへらして行く方は分っていること故陽。故に朝明星が上がれば世界が明かるうなる。例えば朝起れば熨斗がへる、薪がへる、御飯炊けば米がへる、着物縫えば糸がへる、洗濯すれば石鹼がへると云うような風で、日様は物をへらして下さる神故に、女のする事は皆物を耗らす事ばかり。月様は物を殖やして下さる神故に、夜は万物が殖える、水にかければ皆ふえる。男のする事働く方は皆物をふやす事ばかり、皆この世は陰と陽、月日で立つて行く、日が暮せる。

人間身体にて東西南北は左が北、右が南、前が東、後ろが西、人間は東向きになつてゐるもの。四季とは頭が冬、顔が夏、腹が春、背が秋。この頭に付いたものが目耳、顔に付いたものが鼻口、腹に臍一の道具、背に手足合せて十二あつて十二カ月の理。臍は雲読尊と同一の理、腹の辛、腹は養いの神、食物は天のじき物を身の内に入れるから活きている。天地と身体との続きの道は臍一の道具も飲食いの粕の出る処、皆三つで一季、口からはいつて腹を通り大小便に通ずる迄が春の理、秋は働きの神、背は立働く理。例えば手で仕事する、背で負う、足で運ぶが如く、すべて



働き引出しの理、頭、顔、冬、夏は目耳鼻口、首より上は五倫心の働きなり。

身体は一年の理、手足を使うは一と月の理、心は一日の理なり。左は北、国常立尊、身の内、左半身、すべて左は一切男の理、右は南、面足尊、右半身同じく右一切は女の理なり。

御論しにも左なれば男、一切に関係する理、又埃なれども目上も左なり。右は女一条なれど目下も右故に、その人その人にて見分る事必要、これが大切なり。

又左はさきさき右はこれ迄の事とも論す事あり。例えば右の通りに御座候、左様御承知下され度候というが如し。

又裏と表と反対になる事等その人に当らねば分らんことあり。神様の身の内御守護処これが御論しの台なり。例えば月読尊にそむかず仲が善かつたら足を煩う事は一つもいらん。大戸辺尊の御心に副い理が合うたら、手を患う事一つもいらん。皆かくのごとく、身の内世界万物、万事一切、八社の神より無いのであるから、皆天地間は天理きちっときままっているもの故、この八社の道を止めているから起る、論し方話し方は見分けとその人によりて違うが元は一つ。

人間が分りにくいで説明がしにくいので、一つ一つ多くに分けるなれど、神様は一つ故、成程人間の左というものは世界では北である、前は東である。世界で四季というは身の内ではここ、東西南北、艮、坤、巽、乾、世界は八法、身の内は八方、八社の神、世界で八方は身の内では目耳鼻一の道具、鼻口手足である、世界で五行木火土金水十幹十二支、又人間で五倫五体というも

のは身の内ではことと云う。宇宙間一切の理、その理を心に治めたのが天理を知ったのである。そこから悟りて論しが明かに分るのである。

天ははじまり地はろくくというなり、天一地六日月あつて五穀成就、三千世界は四海兄弟、天一地六、南三北四、西二東五これは骸子の目の事であるが、一の裏六、二の裏五、三の裏四、七が妻、七は一切りひと切り七に刀。さいは昼の名妻、昼は大食天尊の理、内の事を知る。夜寝る時は女房、国狭土尊の理、交合つなぎ、磁石のなき時元々はこれを使うて東西南北の舟の方向を定めたものなり。又魔除けにも使うた。

月様ねいるという子根に入る、丑寅思切りという。朝おきる(切る)、めぐり目、芽(切)卯うるおい、めだし、めぐむ(芽出)(芽倉)、月日様の恵みを朝飲食う身が潤う、辰巳(巳)が立(辰)ちて働くから続きが出来る、午真昼まひる干たべる、へるも同じ、未申日様の辻風親様の息なり。酉戌亥日様西に入る物を酉、亥、取入れる、実が入る。

## 九曜星の詠

○日○月○火○水○木○金○土○計○斗○羅喉 人間第一慎むべきは日々口使い方を考うべきなり。風の神五音呼吸吹き分け、人を助けるか又治める時は月日なり。それに反して人を倒し痛

める時は計、斗、羅喉星なり。よく／＼慎むべきなり。火水木金土、この五星は人間日々天より借りて五行を使う如く、口にても普通の事に仕う言葉なり。

## 交合交際の訳

世界にて土用というは、身体にては交合交際、共にまじわるなり。

### 交合の訳

夜体横なる故、縦の女一道具を使う、則ち春秋の土用。

### 交際の訳

昼体縦なる故に横なる口を使う、則ち冬夏の土用。横と云うはろづくにて水、縦と云うは火、六は水、四は火、人間真実<sup>マコト</sup>に交際するをにんげんと云う、男女真実<sup>マコト</sup>に交合するを夫婦と云うなり。冬の土用と夏の土用とが人間交際の理、春の土用と秋の土用とが夫婦交合の理、世界の土用と云うのは人間身の内に取つては交合交際の理、土用の理によつて皆万物が殖える。世界も身の内も土用と云うものは冬至と夏至という、根があつて出来る。秋春の彼岸は身の内では背と腹、冬至と夏至は身の内では頭と顔。

人間交際は大暑と大寒なり。その位骨の折れるもので、交際は互に辛抱の仕合いをせねばなら

ん。春秋の土用が一年に於て最も陽氣のよき時、夫婦も交合が最陽氣のよき事。

交合も交際も同じ理、自己の口から出て人の肉、為になる人の口から出て自己の為になる故に交際は丑、大食天尊、耳未、惶根尊、口耳と口とがなくては交際は出来ん。言葉の神。四季の土用と土用が夫婦、冬至と夏至、彼岸と彼岸、大暑と大寒、冷氣と暖氣、皆陰陽夫婦の理なり、裏表なり。土用は十五日かかりの三日は辛<sup>しく</sup>の神の続きの理にて合せて十八日、色情とは四季の情と云う事、四季の陽氣、陰陽交合にて万物成育す、人間も男女陰陽同じ。

身の内が出来て一日が出来、一日が出来て一年が出来、一年が出来て一代が出来る、四季六十年、一代は神の一年の理、人間一年が神の一日の理、土用が四季共にその真中故、温度正当の順氣なり。時候不順なれば米穀とても完全に成育せぬと同じ、人間も夫婦の心情合わざれば子供完全に成育せぬ、健全の者が生ぜぬ。

堅いと云う理は皆月読尊なり。柔いと云う理は皆国狭土尊。堅きものは一切この神の理、柔き物一切はこの神の理。堅い柔いと云う理は一切夫婦この二神の理が元。故に一方がなんぼ堅くても一方が柔かにあれば睦じく行けるなり。又柔堅の二者の時は柔が表なり。

一六まじければ四合せよい。天理は皆十と云う世界なり。水は横に流れ火は縦に立つもの十、人間も昼は立働く、夜は臥す、横に寝たら水の理。ただし夜でも光を点し仕事中は昼の理に、昼でも寝たら夜の理に御守護ください、家屋でも縦に使う所の、立つ柱は皆月読様の理、桁とか梁と

か横に使う、つくものは皆国狭土様の理。

目二つ耳二つあっても一つが聞けぬ、手足皆二つあれども左右に利かん、皆夫婦の理なれど、一の道具だけは男に一つ女に一つずつしかない、二人合せて夫婦。

男一の道具も平素は国狭土尊、女一の道具にて親戚になる。世界中つながらる。女一の道具も昼は大食天尊、夜横になれば国狭土尊。

世界中の道具は皆金と木が一の道具である。金、国狭土尊、木、月読尊、日月の一の道具の神様なり。例えば汽車でも水を入れ火を焼く、月日親様木と金で作ってある、蒸気は風にて動く如し。

人間はどんな智者でも水と火を拵える事は出来ぬと同じ、天地間の万物は皆水靈火靈親様が入込んで神が作りたまう。人間はこれを扱かう者、使わして下さる使うために守護下さるなり。

### 陽氣本元の理

胆眼勇む、心臓鼻安んず、肺口喜ぶ、肝耳楽しむ。勇む、安んず、喜ぶ、楽しむ、この四つ一つが、よおき心。陽氣とは心臓安んず、肺は喜ぶ、胆は勇む、肝は楽しむ。この四つに腎臓を入れて五臓と云う。腎臓は夫婦交合の時情を発する源なり。情を催す時の心を志（し）と云う、行

うて仕となる。仕はしにて仕ると云う。仕は四合わせなり。首より上にては目耳鼻口、首より下にては手足臍一の道具、四つ合うなり。志は嬉しという心なり。心臓は即ち心、肺は思う、胆は意、肝は慮り。虎は虎なり、七なり。七は切るなり。故に堪忍はたえしのぶ。忍ぶは刃に心、刃は虎に同じ理なり。慮りは忍と云うも同じ意味なり。

天地親様の陽氣に合わぬと云うは、人間の慾が深い故なり。足る事をしらず足納の理が治まらぬ故なり。皆埃にて心身を害する。神が早く陽氣になりてこいとおっしゃるのは、陽氣は神の心、誠を云う。足納はこれ十分という理なりと仰せらる。不自由を十分と足納するのは心の道、この道通り何も十分になる。

### 五臓の訳

胆臓は月様、目に通じ、心臓は日様、鼻に通じ、肺臓は惶根様、口に通じ、肝臓は大食天様、耳に通じ、腎臓は月読様、国狭土様、皆裏表なり。胆は意、見るは表、意見、心臓は即ち心、肺は思う、肝は慮る、音響の耳より肝に入る、目の醒るも肝が一番先き、眠るも先き、算術者の違者なるは肝が一番の働き、勘考、堪忍、肝の病は大食天、慾から起る。疝の下には刃あり、疝が起ったらあぶない。腎臓は男女交合の時梅の木と同じ理にて夫婦一つになった理、人間を造る源

なり。嬉しい口二つは男女、胆から胃が生ずる。

心臓肝肺

この四つが心、この四つが一つに働いて心、この連絡は神の働きなり。

心は月日と惶根、大食天、冬夏夜昼の理、腎の時は春秋の理なり。春秋の土用最も陽氣のよき時季なり。男の臍大戸辺尊、女の臍雲読尊。男の方は秋彼岸勢氣下がる理、女は春彼岸勢氣上ぼる理。男一の道具秋土用、女一の道具春土用、首より上夏冬、首より下に秋春あり。物が恐ろしうて心細くなるのは胆臓が弱っている。物が案じられて心配でならんと云うは心臓が弱っている。胆は月様、胆の小さい者は月様の御心に副わぬ、胆は月様の御心に副うだけ太くなる、借物と云う事が分つて心が落着いたら太る。心臓は安心すれば丈夫になる。心太るといふは神様の道をだんだんおさめて安心が出来たら胆が据わるから太る。月日夫婦の理、胆が一番の理なれども、世上人間は心が弱っている故に安心によりて心太らせねば胆が養えん。それが元となって楽しむ心も喜ぶ心も出来る。喜ぶから楽しみ、楽しむから喜ぶ。夫婦物を知りて安心するだけ胆が据わるから心が太る、八埃が五臓の働き即ち神を無にする、五臓を腐らす心なり。

人間はこの働き自由用が叶うから使い過ぎて迫る。又徳を積めばいか程でも徳は積める。心の使い方にて大なる相違となる故に、御言葉に善悪二つの理は、助かる道と死ぬる道と落つる道と上る道との理の区域をよく間違いのなきように、と仰せらる。楽しむ、勇む、安心、喜ぶの四つ

が胸四つを養う心、この四つの心が信神信心という事なり。勇む心は胆の養い、勇むは勇氣と云う。胆玉の小さい者は勇む心なし。我身も喜ぶ、人にも喜ばす心を使っていたら、肺は痛まぬ。我身安心、人に安心させる心なら心臓は痛まぬ。それに嬉しいと云う心が腎臓を養う。人間は日々心の不足、喜べんのが天の理には一番重い、迫まる。人間上ではさほどにも思えぬから答める事も出来ぬが、天の親神にはこれが不孝の第一。肺は思う、我れも喜び人も喜ばすには六くろくな心でなくてはならん故、田の心と書く。世界にて田は六くろくなもの、人体目ほど六くろくなものなし、水なり誠なり、六くは六物六台、惶根様誠なり、喜ぶという心が天理に叶う第一なり。喜べんという心は慾が深いから、いかほど結構でも結構と思えぬ不足から起る。自分が安心せずして人に安心させよと云うても向うへ写らんから、道が付かぬ如し。自分が嬉しい心なくては人に写らん、匂いが掛らん。嬉しい楽しもと云う心に花が咲く。その薫ばしき匂いを人に写すが匂い掛けとなる。自然と人の心が写るなり。皆八埃から心が小さくなって神魂の徳を失う。

又学問すればするだけ物事を覚えるだけ、一つ学べば習うただけ心が広く太る。屋敷を広めるも同じ事、我が心の範圍を広くする。感心は心の養いと云う、苦勞したただけ心が作れる。

小さい心では神の器にはなれん。世界中の事を計り、世界中の事を皆な知ってこそ神の道具である。又勇氣なく胆玉小さきは心に真実無き理なり。例えば昔の武士はまさかちがえば命を惜しまんと云う度胸あつて胆が据つた如く、一身を捧げてなすと云う真実なれば太し。心を作る事、

心を大きくする道を知らねば、道は何年暮れても役に立たぬ。これが天理の第一なり。

世界中の物が天理故、皆なその元その神の理を心に治めて我が心の宝とする。末代の宝、心の財産である事の極意を治めねば何んにもならん。皆治めてしまわねば済まぬ心、澄まぬ理。故に八方の神様の括り治めは月読尊、天理を皆読んで治める、安神立命、それが心を作る大らす道。どうかこうかと心に分らんくらい心では定まらん。定まらん内は心が小さい。又心の小さい胆玉の小さい者は世の中の役に立たぬと云うは、いかなる訳で心の小さきものと大ききものと分るるかと云えば、身上は一列の神の借物故変りはなけれど、心にて大と小、高低の階級分れて各々その神の守護、神の徳に相違を生ずる所以は、ただ我身我家の食う事だけに心苦しめ、人はどうでもかまわんという慾深くして神の徳を失うものが小さい(誠なき心より神魂の靈光を失うたるもの)。神様の御言葉に、大きい心になれ、小さい心ではにっちもさっちもどうもならん、と仰せあるは、大きい心とは欲しい惜しいもない、苦勞をいとわんという身慾のない真実の心を云う。又真の誠の心をもって力の及ぶ限り国家の為、道の為と云うて尽し運びをしたならば、心に治まった理は末代の理なれど、親が何んぼう宝を与えようと思つても心に相違あつては、どうもならん、と仰せられた。五臓を胸と云う、六腑を腹と云う。六腑は脾胃大腸小腸十二支腸膀胱、胸は六つの根、目耳鼻口飲食息する道具六つ(命の親月日と身の親両親と食物)。胸はあたまと云うも同じ。頭は月日様、八方八社の惣附副い下さる八という、頭のおいと云うも胸のおいと云うも同じ。

事なり。もっとも心は胸が本根なるがただ胸四つだけで心が働くと云うものではない。全身あつて心が働く。神は全智全能なれど人間は身体離れては心魂の働きは出来んと同じ、神より限られる。

### 指の理

子	左親指は	月様	冬至	戌	左人差指は	月読様	秋土用
午	右親指は	日様	夏至	辰	右人差指は	国狭土様	春土用
酉	左高指は	大戸辺様	秋彼岸	未	左紅差指は	惶根様	夏土用
卯	右高指は	雲読様	春彼岸	寅	右紅差指は	大食天様	冬土用
	左小指は	伊弉諾様					
	右小指は	伊弉冊様					

一年の理も一と月の理も一日の理も身体にある。理は手にもある。両手一ぱいの輪は一年の理、両手の高指と親指と合わせて一ぱいの輪は一と月の理、片手の親指と人差指との輪は一日の理。

又一と月の理は十五夜満月の理。この満月を二つに別けると、左の片手は廿三夜の月、下弦半月、右半分は八日の上弦半月なり。故に左の親指より廿三夜の月は夜の子の刻より上り給い、右の親

指八日の月は昼の午刻より上り給う裏表、右の手に冬の大雪だけはある、左の手に夏の酷暑だけはある。土用の四日目土用四郎から大暑大寒となる。冬は左親指と右の紅差、春は右の高指と人差、夏は右親指と左の紅差、秋は左の中指と人差なり。両手合わすれば百二、三十度位に定まれど、一方が高い故一方が低い。一本の指の節三節あるは、元々泥海の時五分から三度生れた理、十本の指合わせて三十節あるは、一と月三十日の理、又五本十五日で満月。人間身の内五体は水火風三つに止まる故、三十五節あり、それに手の三大節を合せて十八節。

八十の陰陽四季で、土用の理、両手合わせて三十六節は一年三百六十日、手足四つ合わせて七十二節は四季土用七十二日の理。

左親指子、右紅差丑寅、右高指卯、右人差辰巳、右親指午、左紅差未申、左高指酉、左人差戌亥。

親は二つに折れ、子指は三つに折れ、五角になれば内輪が円くなる。四角の内は角がたつ。左人差指月読様が月様の一の道具神、右人差指が日様の一の道具国狭土様。故に親指には人差指がいつも副うて一番力になる指なり。月日は親様故、いずれの小指にも親指が副うて用をなす如く、親様が入込み下さらねば道具神様の御働きは出来ん。

## 誠の訳

正直	ま	水気	い	水	み	やさか	の	ま	が	玉	た			
真	慈悲	こ	命	温熱	の	尊	火	こ	宝	や	た	の	鏡	か
堪忍	と	呼吸	ち	風	と	と	つ	か	の	剣	ら			

氣は長く心は広く勤めは堅く氣は長くというは、堪忍を旨とし、何事にも癩敵癩癩を出さず、又何事に懸りても捲まざるを云う。心広くと云うは何事にも心を動ぜず先き案じをせざるを云うなり。勤めと云うは言行一致の事なり。

玉は月様、鏡は日様、劍は風、惶根尊、大食天尊、刃物でもって切分け、空気は惶根尊の御働きて、月日の息、風となる。言葉は月日の賜物陽気なり。

正直から情けが出る。慈悲と堪忍と三つが誠（真事）なり、誠は神なり。誠より尊き心なし。水火風これより上の宝はこの世にない。これが人間万物の命なり。人間の肉体を初めとし、一切動物の肉体、宇宙の万體はことごとくこの水土温熱風にて産み出され、この世に生命を有し、活動をなす神が命なり。故に神様を尊、命と云う。

月様の刻限は何千年たっても一つも変らぬのが正直、その分心が人間故、正直でなくてはなら



ぬ。八日なれば半月、半月なれば半分しかお光がない、お照らしがない。これ程正直はない。その理が皆身の内にあるのだから、大きくても月様、小さくても月様、真直は正直、真正しいは神、天理は明かと仰せ下さる故に、水程正直なるものはない、水程ろつくなものはない。人体にては目程六つくなものはない。一寸のいがみでも見分ける如く、水はろつくなの本、正直水によってこの世は曲直を分ける事が出来る。例えば建築地の高低を分るに水盛り定規、皆水が正直の元。この世は水が元、水が台にて立行く、治まる。水は宇宙の万象を現わす元素にして、千変万能、万体の徳を出す根元なれば、即ち人間万物の本家親玉なり。

水程低いものはない。水は月様の御心、下が可愛いく下を下をと流れ巡って万物に入込み巡環して万物を養い下さるこの大徳が親心なり、情けなり。水は宇宙間切れ目無くへだて無く万物を養いつなぎ育てる徳が情けなり。故に水程力あるものはない。例えば何万トンの軍艦も水があれば浮かぶが如し。いわゆる方円の器に従いて万能の効用働きを成すの大徳を、例えば人間親は我子を教育する情けの心味と同じ。

この世は水の世界、万物は水土より生じ、水氣入込んで生成化育をなす。水は万物の元、身体は月様の清水の固りである。水は心なり、故に正直でなくてはならぬ。この世治まるは月様の心人間にとりては情け、又足納が正直。足納は治まる水の理、治める心、足納と云う理が明か、心の澄む理なり。清水誠の第一なり。足納の理が治らぬ故八埃を生ず。

情けは水月、慈悲は日火なり温みなり。日様の暖み照し下さって万物が育つ。火水一体なり。この和合によりて風生ず。水氣に火氣が合うて明かとなる。月日は万物の親なり、根本なり。火と水とが一の神、風より外に神はなし。情けは陰、慈悲は陽、水氣あつて火の靈働き、火氣あつて水の靈働く。温みが無くては万物は一日もこの世に活きる事出来ん。水には必ず温みと合下さつて一切万物に入込み下さるで生を保ち、同じく照光あつて皆育つ。火の燃ゆる、日の照る、光り一切点ずる、この陽徳が無くば、世界は暗黒嚴寒で何も出来ざるなり。万物の生ずることごとく水氣に温み御副い下さつて生ずる育つ。粒毛、草木も温みを入れて下さるで芽切る、生へ出る、成長し花咲き実乗る。日様温みありて衣食住万物がこの世に現われその用をなし、人間初め生物立ち働く自由用が叶う。身の内の温み、世界の温みはことごとく日様貸し下さる賜物、万物に御心入込み玉う、これ程慈悲のものはない。道と云うは水と火という事、この二つが満ちている故道という、身の内と云う、道と云う、この身の内が道なり。道とは身体に習うて行わねばならん。身と云う鏡という、八形と云うも、八たの鏡と云うも同じ事にて、人間身上は前世より今日迄の心の鏡として心通り身に現わし貸し与え下さる心の形なり。故に身に現われる理が論しなり。身の内が神、宇宙も同じ神の誠で立つ。身上あつて幸福円満に世界立乗える道が誠。

神言に、身上有つて楽しみ、身上あつての道である。これよう聞分けてくれ、と仰せ下さる。ばつと腹立ちたのをそのまま風に出さずに堪忍して、どんな事でも分かるように説いて聞かす、

人の満足の行くように聞かず、人に満足与える。善き方／＼と優しく物の治まる風の風を吹かす言葉が堪忍の風、惶根尊の知恵なり。剣は大食天尊、惶根尊、言葉、口弁舌、賢いというは人の心中道理の見分けかみ分けのよく出来る者即ち切分け故に惶根尊の裏は大食天尊（丑寅の未申）、見分け聞分けの神、交際義理の神様、智恵は四季の理にとれば日様、惶根様、誠が現れ、慈悲心気を長くして人に満足与える風が智恵。

しかして言葉は心が現れるもの故、物が惜しいや欲しいで慾が深いようでは人の助かる人に満足与える真実の言葉が出る。木の葉も根より水気入込み温味が入りて芽が出る。芽は葉なり、言葉も同一の理で現れるなり。

誠は四季の理に分ければ冬夜、月様、大食天様、情けと思切りの理。例えば人を助けるにも人様に志し心尽すにも情けを施すにも思い切らねば出来ぬ如く、我家我身慾を思い切れぬようでは社会の為に働けぬが如し。

その真実は誠が無くては出んなり。誠の心陽に現れ、或は人を助ける、食物与えるとか、世話をするとか、金銭物を施すとか実行して、その誠の現われたものを実と云う、真実なり。心に誠あっても行わざれば見えん、行うたものが即ち実。例えば人間夫婦の間に子の生れたのが実。柿の木は甘き柿の実を結ぶ、渋柿は渋い味の実が現われる。甘き木の誠が現れて甘柿となる如し、木の実も実も同じ。親神様の誠が宇宙万物に現われて衣食住その他すべての物を身に受け見聞し

て陽気に暮す。皆親様の実を頂いて生きている人間なり。これが神様の真実誠。人間も同じ助けよと思う心は誠、誠は無形、現われて実、慾の無きものは誠。親が我子を思うて我れを忘れ、慾を忘れ、真心尽して育てる慈悲、この心が真実誠なり。

堪忍と素直と同じ理となる。素直は神の心、水の心。人間誠というは足納が第一。足納はこの世の大王とも、足納大き木とも仰せられてある。心澄む、心の掃除するには足納。足納はこの世の治まる理、水の心なり。四季に理を分れば誠は冬、智は夏、春はつなぎ、秋は力と立てるなれど、八方の神様の御心が一つにまとまり下されたものが即ち誠、月日の御心なり。

やさしき心と云うは誠にて、この世は八方八柱の神、この八柱神の心にかなう心に定めるが世界の式なり。この心をやさしと云うなり。

正直、慈悲、堪忍三つは人間暖み、水気、息一日も無くて立たぬと同じく、これより宝はない。堪忍は物のよく分りた賢い人から堪忍をする。寛仁大度慈悲心をもって敵を味方にする如き古今の例話もある如く、誠程尊きものはなく、誠程人を感化するものはない。誠には刃も立たず矢も立たず水に濡れず火にも焼けずという。

宇宙間なことごとく神の誠の現れ故、本書中だんだん述ぶる処は借物の理を了解せんとするもの皆誠の一つに止まる故、この誠と云う理は何程にても話し尽せぬものなり。

神言に、誠という理の働きさえあれば、天の親よりも実があるで。実と云うは分かるうまい、



火水風というこの恩理が分れば一切の恩理が知れる。これ知れば衣食住の三点は火水風の賜物という理が知れる。この理が分れば神の守護という理が知れる。この理が治まれば神の誠という理が明かに知れる。なれど教えの理を取違えるというは、これ迄の心の理が忘れられんから目に見えたものに惜しみをかけて身上の大敵という事を知らず、欲しい惜しいの心の理が離れられんから、真実という理が治まらん。早く思案をしてくれ。世上の難はどういう処から身に受けるは八つの箇条は何と申うて論している。

又神の守護という理が心に分った事なれば、道の理は容易ならぬ重い理なれど、深い楽しみを理を与うるには、日々めいめいの心の勤め方の理によって与うる理と与えられん理とあるから、取違いの無きように勤めにゃならん。我身の助かるというは、人の為なら我身捨ててもという精神をもつて人を助けにゃならん。人に手柄をして貰わにゃならん、人に喜んで貰わにゃならん、という心で日々勤めて、人の心を助け、自分も喜び、日々勤むる理は高も値打ちも分らん容易ならん理である、との仰せ。又御道は話一条で助け下さる。その話は月日の真実、これを取次ぐ者は月日の代理である。神様の御言葉は人間が考えたり作った事でないから、正直に取次がねばならん。我々人間が智慧高慢をまぜて我身慾から我身の用害や我身例えはこの話をしては人がいかに感ずるから氣に入らぬからと云う風にて、取次ぐにひかえるとか、上手口とか、遠慮気兼ねしては人が助からぬ故、神に対して高慢となる。神の御言葉は正直に取次ぐ。神に素直になく

ては誠とは云えぬ。我身をたくは慾。

又人間の俗に云う硬いと云う心は、一時強いようなれども、慾というものために決断力が乏しく、心が変わる崩れる。硬いものがやらかい、中途でくじける真実定めた心は立抜く、くじけぬ、変わらん、迷わん、くるわんと云うのが誠、真実の定まった心を日本魂とも云う。

たとえば弾丸は出かけは強いが先きに行くと布に包まれる。矢は出かけは弱い、手の利いた者はつかむという。先きに行く程烈しく強くなると云うたとえの如し。

神言に、自由用と云う理は、何処にあるとは思ふなよ。只めん／＼精神一つの理にある。日々と云う常と云う、日々常に誠一つという。誠の心と云えば一寸には弱いように皆思うなれど、誠より堅き長きものはない。誠一つが天の理。又人を助ける心は真の誠、と仰せ下さる。

## 勤めの訳

つとめ、切留め、着物なれば裁ち縫い、普請なれば木を伐りて用材に使用するを云うなり。それ故に人間言行一致せざるは、反物を裁ちて縫わざる如く、木を伐って普請用材に使用せざるも同様にて、皆無駄事となるなり。

月日様元々泥海中より人間御造化のため永々御苦勞下され、又人間を作るためにこの世界を開

關せしものと仰せらる。その容易ならざる御苦勞によりて今日人間万物生々として立榮えているものなり。苦勞がこの世の元なり、宝なり。神は日夜一刻も御休みなく御働き下され、宇宙万物は皆人間の為に造られてあるゆえに、諸動物はつまり人間のために働いている。徳とは十苦と云う事なり。十柱の神様の御苦勞下されてある理が徳、故に苦勞と云う事程結構なる事はこの世界に無い。しかして人間では理に叶うた苦勞でなくては何にもならぬが、苦勞という理が働かねば万事出来上らぬ。神様は靈妙不可思議なる御徳にて蔭より御苦勞下さる故、世界万づが成り立つ。人間初め一切は我れの力で生れ出て生きてるのでない、神の力なり。胎内に宿し込むのも月日なり、生れ出すのも月日世話どり。この大恩を報いるには人間、他に報ゆる事なし、ただ互々に人を助ける、人の為互に勤むる、これより外にない。神の分心たる人間なれば天の理に副い、人としてこの世に出たる勤め、物事勤めると云う理が無くては切れる、天の理に切れる。つとは切れる理、大食天尊、とめるはつなぎ、国狭土尊、この世は日々に一切万物が切れたものがつながらり、又切れてつながらりてこの世の用をなす。人間もこの世の縁を切られたれば活きられぬ、勤むる理で留るといふ。

苦勞と云う理より尊い事はない。苦勞の理より徳は出来ぬ。人間も御苦勞様という事程結構な尊重すべき事はないのである。

御教祖の御苦勞の御徳によつて御道が始まる、皆これと同じ。誠が無くては人と切れる、神に切れる理となる。心勤めて神につながる。神様には心一つより勤めるものは無い。有形の物は世界万物神のものなり、人間の物は心一つよりない。神の道は胸三寸心の道、心の内に仕事がなくてはならん。心の働きあつて形に現われ、神に近づく。親心をもつて一列にへだてなく人を育てる、人に満足さすと云うのが親神の御道である。互助け合い立合いは人間の勤め、その人を助けた世の中に勤めし効能の理によつて、天理より我身に徳を授け下さるなり。この世は万物皆助け合い立合ひにて立つ世界故、互に人に満足与えるという心は最も美しき心にて、神の心なり。人間社会は天の親神即ち天理に対する勤め、功能の有無により多少によりて神は徳を授け玉う。一人限り働いた勤めただけの価は神よりその身に与え給うもの故、たとえば他の人に損害迷惑をかけ、或は人を害して我れに利益を得る。天理を害し社会に功なき働きをなして、たとえ我身に利益をなすとも、人間上にては利益を得たようなれども、天の理より見れば徳を授かる事出来ぬ埃ゆえ皆辛働が無駄事となり、かつ人を害せし罪は我れに戻り、我身の天徳を缺き、難儀不自由、病氣災難の道を作る。故に人間は日々心の理、勤め働く理により徳を積むものと、日々に徳を落としてつあるものとある。

例えば一日に一円の価値ある働きをなし一円五十銭の価、日当を取り、又は一円五十銭を衣食住に費し、我身に付けるとすれば、五十銭は天理を食い込んで行く理となる。前世の徳を削つて行く。又一円五十銭価値ある働きをなして、一円の物を我身に付けて儉約し、足納なして行けば、

五十銭の理は天理、社会に勤める、我身に陰徳を積んで行く理。しかして人間は万物の靈長故、心の働きが身の働きより大きい。同じ身体を使うて働いて、一日に五十銭の日当を貰えぬ者と五円六円にも当る人とある如く、心の働き前々の徳、その価値を有する故なり。もし心の働きが無くして物事の目先も利かず、只々五体を働くだけの者であれば働きの機能は小なり。又日々に人の恩を着て我れが動むる理なくして過分のおごり、私身に付け過ぎ天恩に尽きれば、身の徳が保てぬ。神は昔より色々助ける道を拵えて恩の報じ道、報じ場を作りて心魂が畜生道に落ちぬよう導き下されたものなり。

神言 神々のおがみ祈禱や占いや これ人間の恩の報じ場

だん／＼と思が重なりその上は 牛馬と見える道があるから

神は人間を屋形として御心入込んで世界の陽氣を染しみ下さる思召故に、人間は病、難儀不自由して苦悶すべき管で造化下されたものでない。八方の神様一つとなつてこの世界が造られ、万物一切は相互、助け合いの理によりて生命を保つ。いわゆる生成化育してこの世が立ちゆき、人間も互助け合い、もたれ合いて立っている。男一人女一人でも立たぬが如く、人間一人々々に単独の生活をなし得べきものでない、必ず相寄り相扶けて生存の目的が達せられるものである。

宇宙全体は神の一体、人間はその一小分身であり、その個人が集りていわゆる団体を形成し、社会的共同生活によつて存在し、又進歩を見らるるものである、互助け合いは神の心、天地の理

法にして即人間の勤めなり。もしこの助け合いの精神が無いとすれば、とても人生の目的は達し得られないものなり。

神言 我身立つよう、我身一人先へ助かりたいと云う心の理は世界の理であるけれど、自分の甘い事にしようと思えばその場のよき事ばかりするけれど、理から見れば天の理では甘い事ならん。人を倒そうと云う心あれば我身が倒れるが理、人を掛けようと云う心なれば我身が掛かる、人に損を掛けたら我身損せにやならん事が出来て来るのが理。人を助けたら我身が助かる、人を立てたら我身が立つと仰せ下さる。宇宙間万物は皆それ／＼の役目を勤め、それ／＼の働き、それ／＼の用をなすは、皆人間の為になつてある。人間もそれ／＼の家業応分に働いている、これは一人一名のこの世に出たる勤めなり。人間の勤めは神の働きと同じ故真の代理なり、皆神様と同じ事をしてるのが人間である。

食物持え川井戸の水はかわいと云うて、雲読尊、飲食い出入り。例えば子供に乳を飲まず、大小便この世話をする婦人は皆、雲読尊と同じ事している。東朝明星、養いの神様、又織鎌等を携えるとかすべて働きに出る、引出すは男の理で大戸辺尊、西宵明星、働き引出しの神様、皆男女陰陽の理なり。

神様陰陽御夫婦の理は何事にも御副い下さる。月様には日様、水には必ず温みが副いて流れ、火には水気が副いて光り、燃える。日は月様なるが日様が副うて見える。物を云う、聞く時は言

葉は惶根尊なれども、大食天尊が罰うて切り下さらねば物云えぬと同じく、月読尊御働きの時は裏に国狹土尊が廻りて御働き下さる。人間も男一人女一人で子の出来ぬと同じ。雲読尊御守護の時は裏に大戸辺尊が廻りて御守護下さる、大戸辺尊御働きの時には裏に雲読尊が廻りて御働き下さる。皆人間のする事は一つもない、神様なり。男神は男に入込み下され女神は女に入込み下され、世界も身の内も同一の守護下さる。皆人間の自由用が神の自由用働きである。人間が寄りて社会という、人間は神の社なり、男見れば男神、女見れば女神と思えと仰せらる。何んでも人を神と思う、皆社会の人はこれ神なり。この心にならねば真の敬神という、真の尊王という事にならぬ。そこから真の愛国というものが起るなり。

神言　口と心と行いと三つ違わぬように日々守らねばならん。何事も胸と口とが違うては神の心にこれはかなわん。誠となれば胸と口とが違いそうなる事はない。なれど口と心と違うと云うはいがみ、かがみがあるから違うのである。真実が神の心にならねば、いか程心尽したるとも。自分の心には真実と思つて尽し運んでおりても理の取違い、通り間違ひあれば心だけの理通りただけの理が現れるから通り違ひはすまい、通り違ひあつてはならん。汚ればかり、いか程誰れに相談してもかなわん、月日退く、と仰せられてあるなり。

### 言葉の大切な心得べき根元の理

善に仕えれば月日なり、悪に仕えれば計斗羅喉なり。善き詞にて国を治め人を助く。悪き言葉にて国を乱し人を倒し我身を倒す、恐るべし慎むべし。和歌五音七律なり。これより成りたる倭言葉なり。元本天神教えくたされたるなり。木火土金水の五つ、この五つに月日にて七律、日月火水木金土、人間口程充滿なるものはなし。心を真に改め陰徳を積みたる人の言葉は、風に草木のなびくと同じ事なり。尊き人の言葉にて人心柔らぎ、悪人も善人となり、邪を正と改め、国乱を平治し、衆民太平を誦い歡喜を唱うは、最初真実の風即ち言葉口なり。言葉は口で陽なり、心は奥なり陰なり。言葉の元は五音なり、あやちは六物六台なり、六台とは惶根尊なり。

神様の御話をなし又御論しをなす時、すべて誠から出た言葉は月日の代理である。徳を積んだ人の息程人が動く。又天皇陛下より下し給う御詔勅、教祖の御言葉、これ皆神様の御言葉なり。この世は言葉の理で治まる世界である。

又賢いと云うは言葉にて人を満足するよう得心の出来るよう、治まるよう、舌一枚の動かし方にて風を吹かして行く事。風の吹かし加減によつて人間は人に不足腹立ちさす事も喜ばす事も出来る。この言葉は心の根より出る。木の葉でも幹から出る如く、心に誠が無くては人が助かり、



代が出来、四つの理、五柱と惶根様なるが月様には必ず日様が御副いなり。月読様には国狭土様、雲読様には大戸辺様、惶根様には必ず大食天様、故に八方の神となるなり。

木火土金水、喉、舌、齒、唇、はぐき、身の内の方と字の理から説く方とあり。身の内から説く四十八文字は皆身の内にあり。又世界で説くのは空海上人が一つの歌に綴られ仏法の経文に象りたるが、文字はそれより以前からあったもの。

親神様の教えは言葉に理があるのは、言葉が先きに出来て文字が後に出来た故。天地開闢以来幾千年の間に人間に万づの事を仕込み下されて天理から名がつき、言葉が出来ている故に、言葉が元なり。名に理がある、言葉に理があるなり。文字は種々様々の品を分ける為のもの故、言葉は理があつて、言葉あり、言葉あつて文字あり。仏教が一の枝、文字が二の枝、と仰せられた。故に世界に昔から云うている事の理が天の理から出ている、名もついている。神様も、云うていれども元知らぬと仰せなり。

世上で云うとか諺に云うのも歌に謡うのも、皆神が云わすのや、歌わすのや、歌の流行するのでも世上は歌で知る、又夢を見るのも月日なり、と仰せらる。

例えば病人の論しでも、その人の云う言葉の理を分ける、神が云わす、と仰せらる。言葉一切天理をはずれては云えん、無きもの故（又病む時は言葉がなまる）云う事となり、ふりに現るる処で皆見分けるなり。

## 衣食住・機の理

身体に纏うを衣と云う、又着物と云う。衣の元を反物と云う、これの元を機たと云う。はたと織物なり。一機四端は一年四季の理、一端一季の理、一端三丈は一季三カ月の理、一丈は一月一機、十二丈は一年十二カ月の理。巾九寸は夜昼九つ、子午の理、四つ枝まき、九寸巾は四九三百六十筋、一年日教の理なり。二端を一疋と云うは半年の理にて、牛馬は人間に比較すれば半年の理より具備せず。一機は一年一人の理、二反は半年一疋の理、人間には一年の理、具備する首より上冬夏の理、首より下春秋の理、牛馬全体にて人間の首より下と同一の理なる故に、半年二端を一疋と云うなり。

一人一年一機。一疋半年二反、人間首より上冬夏の理を具備す、首より下春秋の理を具備す。牛馬全体人間首より下と同一の理なり。

## 着物の理

着物褌袴帯、七五三注連しめな繩七、着物五、褌袴三。帯七、五め三なわ着物一反七つに裁つは、七



は切ると云う理にて、身に纏う事を着ると云うは切ると云う理なり。これ第七大食天尊なり。五は襦袢にして五体に纏う十の半なる理にして、襦袢即ち十半にして五つに裁つなり。これ第五雲読命なり。三はつなぎにて親なり、帯なり。結ぶつなぐと云う理なり。一筋を左右より二つ結びて三となる。縄と帯とは同一の事にて、これ第三国狭土尊なり。故に女出産の時安産の許しを受ける事を帯屋と云う。帯屋は国狭土尊の司りにして産王様と云う。し七大食天尊、め五雲読尊、なわ三国狭土尊、右三神いづれも女神なり。故にこの三品を女のしんしょ、女の身代と云う。三品とは着物襦袢帯、しんしょ、しんだいとは身上身体の事なり、女の大切な物なり。

## 膳の理

膳とは睦もろくに揃そろいし真実を云う。睦とは即ち六つなり、飯、汁、壺、平ひら、猪口ちまぐ、箸の六つなり。以上六つ揃いしを本膳と云う。飯は洗米を六台に載せて煮たるものにして、六つ揃い又睦の台にする本なる故に五膳と云う。一品にて総名を取るなり。これ第六惶根尊にて男の理にて亭主なり。汁は菜なり妻なり七なり。妻は内の事を知ると云う理にて汁と云う。七はさい、これ第七大食天尊、汁は女の理にて妻の事にて菜と云う、飯菜夫婦、壺は男一の道具の理にてこれ月読尊、四品が理なり。平は女一の道具の理、これ国狭土尊、三品が理なり。猪口は諸冊の二尊なり。ち

よくとは直ただしいと云う理にて、身体直ただに保つ理にて、男女の道直しが天理、猪口は直ただし。箸は月日二柱の神。食する口は雲読尊、左右の手は大戸辺尊、以上十柱の神なり。台は地、四方正面にて東西南北なり。載する器は天なり。食物は神の心なり、味いなり。

水霊、火霊二つが元本なり、又六台は竈の事なり。かまどは九胴と云うなり。

膳は五つあって五ぜん、箸は月日様、食物は神の心味い。

母の乳を飲むも同一、天のつなぎのじき物なり。食物は天と身体をつなぎの命なり、天の実が入って下さる故活きる食物入れてある。内満ちとる時は満潮の理、食後は蓋をあお向けにするは引潮の理。

## りきもつの訳

木の実、くだもの一、穀物二、野菜三、右三品は人体五行と同一に御守護くださるなり。魚類四陰にて水気入込み暖みは世界より受ける。鳥類五陽にて暖み入込み、水気は世界より受ける。人間りきもつは種と卵より生ずる物を食するは天の理なり。生れながら親と同じ形なるものは、りきもつとは云わぬ。水と米は充分むまい舌に合わしてある。これがからいが冬、あまいが夏、にがいが春、すいが秋、この四つを合わするとむまいとなる、則ち四合せ内の仲よろしいがむま

という。仕合せのよい内という、この味いでしたと云うなり。夫婦息見えん月日和合にて息出る言葉、風見える惶根様の御守護なり。

五穀第一米、第二麦、第三粟、第四きび、第五稷、一種稗と云うものあり、食にあらす。

野菜、第一大根、第二蕪、第三人參、第四午莠、第五芋、第六蓮根、七芹、八蔓物に生ずる一切の野菜、右八方八柱の神の理なり、八百屋というのはこの理より始まる。山に自ら生ずる芋に自然薯あり、五穀と野菜を菩薩と云うなり。

## 文具の理

身体が子、丑寅は墨、卯は中の水、辰巳は硯（女一の道具も同じ理）。

午はつくえ、これは面足様故台なり、地なり。膳でもすべて乗せる台は日様、未申は紙、酉は筆の毛、戌亥は筆の立っている全部軸（男一の道具も同じ理）。

万事神様の事や人の事、人を助ける事、又人の為に頼まれて書く時は例えば机に向いて御諭しでも書く時は、私が身が国常立尊様の理、万事我が身の事書く時は我身が伊弉諾尊様の理なり。書く手は大戸辺尊様、皆神様が御守護下さる、膳の理、文具の理、この二つ極く尊き大切な事なり。

## 屋敷堅め石搗の理

人間の住む家を建てるに、やづくりと云うのは、やというたら月の事。なぜなれば、三夜の月、十三夜の月、十五夜の月、廿三夜の月と云う。よるはやという。夜は月なり、月は夜なり。世の中と云うのも月の事や。どういふのも月の事なるをもって、やづくりという。この家を建てる所をやしきと云うのは、屋を定める故やしきと云う。定めるのは四季で定めるなり。又八方八柱の事をやしきと云うなり。石搗をするには戌亥の角より辰巳の方へ行き、それより八方つき終りて又戌亥へ納める理は、戌亥月読命様、本心は破軍星なり。辰巳国狭土命様の本心は源助星なり。月読様は男の一の道具、国狭土様は女の一の道具、この二つは、星は一日一夜の内に両方からはこび合い、この世界の真中で二星かさなり又元の所へ戻る星なり。これ故戌亥より辰巳へ搗き始め、辰巳より戌亥へ納めるなり。この時に「よの、ひよあうたんと云うのわよのひに逢たん」という事なり。「男の子をばうと云うのは戌亥、月読様は身の内、ほねの守護、又男の一の道具、このよき理をばうという」、むりというのも同じ事、みなつよき事をむりと云うなり。

## 宮社堂館家の理

社と云うは男の体を云う。体とは首より下を云う。建ち始め戌亥の理にて腰なり、腰は身体中骨の要なり、竜頭なり。この要にて身体立つなり。故に人間立たざるを腰抜けと云う。表は腹、裏は背、両側は左右の肋なり。棟は胸なり。棟より雨垂れ落ちる故に胸の下を水落ちと云うなり。雨は水、雨垂落ちも水落ちと云うも同一なり。両腋は破風なり。社と云うは八柱の神の代なり、しろなり、体なり。乳は棟の紋なり、腰腹胸背腋鳩尾、乳臂は地形なり地場なり。神前鈴は男一の道具、鳥居は天なり。堂と云うは洞と云う理にて女の体を云う。戌亥は建て始めの理にて腰、表は腹、裏は背、両側は肋、棟は胸、雨垂落は鳩尾、破風両腋、乳は棟の紋、玄関口陰門、会堂本堂御堂とも云う。人間参詣して中へ入りて礼拝すれば子懐胎、胎と同一にて下向は出産、同一なり。堂は中へ入りて礼拝する故女の胴体の理なり。社は神を鎮座して中へは入らず外より礼拝す、男の体の理なり。もつとも神の社と云うは天地の理、身体の理なり。頭顔は上、即ち神、胴体は下即ち八代なり。社と云うも堂と云うも皆天よりその形を教えその理を下げ給う故に、左の肩右の肩と云うは左右の形は肩なり、左は月様、右は日様乳七夕の二星なり。

○宮の理、みとは水火風三つ、やとは八柱の神、人間首より上を身と云う、下体をやと云う。

やとは八形の理、人間住家とする処を館と云う。やかたとは八方の理、世界にては八方の理、館は家と同一なり。右いずれも尻は地形なり。宮、社、堂、館、家皆同じく月日二神よりその形を教え玉う。(伊弉册尊様の御腹より元々人間生れ出したるこの理で宮と云うものが後生に出来た)

## 鳴物の意味

なると云うは言葉に理ある故、音の鳴るも木の実のなるも物事の成るも理は同じ。これを字で書けば違いあれども、文字は物事色々の品を分ける為に後に出来たるもの、名は元なり。言葉が先きにて天理より名が付く、名に理があるなり。なると云うは月様の理、世界くるりと包め玉うて守護下さるで何事も成っている理。又神楽勤めに鳴物九つを使うと云う理は、この世人間は月日の御苦勞九から始まり、九(苦)の世界、人間は九の洞というは九つの道具の借物なり。目、耳、鼻、口、臍一の道具、手足首の九つ、又世界の人間は産に広まり(三)、水火風三つ、衣食住三つにて命をつなぐ。人間は心と口と行いと三つで、三三が九と云う。この九(苦)を勤めるを人間の勤めとす。故に神様の勤めにも九つの道具を使う理なり。人間万物は天地神の息で育ち成人する処の理を合わす。神の心と調子を合わす理なり。

又この九つの鳴物は元々の教えより故あって二、三点変りあれば、現に使う物について不完全

ながら大略を記して研究の参考に供す。

拍子木で辛を取るは人間宿し込み、体内で理が増すのも産れるも夜昼成人するも、粒毛草木育つも、花咲くも実の乗るも、味の付くも、万物皆月日の指図、四季日夜四季にて定まる定規なり。木は真直よく副え附く故その陰陽の理が合えばなる、心合えば成る故に上役の人にて拍子木を辛という。琴はこは月日親様の光の理とは、十柱の神の理。糸十三筋、十は十柱神、三は天地人。又一年十二月に閏の一月を入れてある。又世界万づの事が神の光なり。鼓は羯鼓もほほ同じ理。つは切る事、みは水の事。水はつなぎ、上下同じ丸く中を縄にて十文字にかけつぎ縮めてあるは、切る事をつなぎ(つなぎの神様の理にて)天地抱き合せて世界に夫婦の縁をつなぎくださる所の理を打つ。胡笳とは人間は万づ物事のこきうが第一、心の味い。こは月の光、きうは九つの道具の理、天地陰陽張合い、持合い、心のこきう、又息をする事をこきうという。

擦鉦、金はこの世のつなぎの理、心の合うをかねと云う。双方の事をするをかねると云うが如く、又物事に当りて成す事をすると云う如く、又二本の棒にて打つは一家では夫婦の理にて、心を合わしてすれ合わぬよう互に立て合うてすれば、心の合うをちん／＼と云う如く、きまりよく何事もちん／＼とよく成る理。笛とは風、人間上下共にその風なり。夫は夫の風、妻は妻の風、その風さえかけばなる、吹けばなる。風榮、物の殖え榮える理。即ち風は息、言葉なり。風は天地の息にて万物生きて行く最も大切なるものなり。穴八つは八方揃いて吹くと云う理。

各々その風本分を守り睦じければ、物が殖える成る理。又太鼓大きい事を大という。こは光る。遠音響くは太鼓なり、表裏張りしめたるは月日、天地を抱きしめる理、ぐるりと鉦にてしめてある。鉦は月日の理、この世界を月日でしめている理。誠は月日の心にて大きく光り遠く響く物の長たる理。琵琶の糸三筋は水火風、三つの理にて天地人をつぎ合いの理で、(三味線もほほ同じ理)、胴竿音締め心のねじめが第一なり。笙とは正しき真事を正と云う。又人間に子の宿る時情合いを正という。濁りなき心の理、正の事とは違わん事を云うなり。

九つの鳴物を入れて勤めをするは月日、夜昼二苦身の内世界九つの理を合わして二九十八、十八は陽氣と云うて二九となる。心の苦を忘れ心勇めば肉となる。身体は肉が元、水気温みがこれ陽氣なり。神の心に合わして勤めば神勇む、神勇めば人間万物皆勇むゆえ、陽氣勤めと云う。又箏、鳳、笙、篳篥の三竿を合わす。これは最も古くより伝えられたるが、すべてこの世は三つ揃わねば完全成らぬもの。音律の名を脍、平、双、黄、盤、大中小の三曲、又祥事弔事四季等によって奏楽の法式ありて、俗に八十八曲と云う。この雅楽の由来なかなか深し。

### 神前供物の理

三 平 平物

神

五行のきれ

鏡餅 水 木実  
神祠 神酒 玉 鏡 劍

洗米 塩 辛味  
生鯛 野菜 榊 五行のきれ

神前五列の供物は五行の理にて、五行とは木火土金水。

木甲乙、火丙丁、土戊己、金戌金、水、水癸、五倫五体にて十干なり。

神酒は木の理にて甲乙、餅は火の理にて丙丁、生鯛は土の理にて戊己、三平は金の理にて庚辛、洗米は水の理にて壬癸、野菜は八つ七つ丑寅、八七鯛の理、大食天尊なり。木の実（菜実）は六物の揃いし理、惶根尊即ち風、辛味は月様、味、干物（乾物）は日様味。魚は陰鳥は陽、塩は大食天尊に月日の味籠りて味の王と云う。辛、甘、苦、酸四の王。

### 供物道具並びに飾付けの理

三宝は水火風、膳は睦に揃いし理、翠とはみずの理、真菰は生れ落ち菰より出世する理なり、水玉は人間の心なり。この玉の水の如く一名一人の心を澄して仲よく和合して暮す心を親神に供するなり。この事を水の大神を知ると云う、これ朝の明星なり。三つの燈明は人間の行いなり、

身体明るう暮す、世界明るう通る行いを親神に供するなり。明るうとは身に暗い行いをせぬ事なり。この事を火の大神を報いると云う。三つ一つの理にて宵明星なり。水玉は朝明星真心。燈明は宵明星誠行い、心は夜行いは昼。鏡は月日二方の御身輝やく理にて鏡と云うなり。神殿の左右に建て供うる神は神の気なり、神は人の心とは逆なり、さかきなり。人間も五歳迄の小児は大人の心とは逆なり、神のきなり。いつも青々として変らぬものなり。故に三歳心と云うも同じ事なり。それ故に小児の髪の毛を月代と云い、さかいき、さかきの理なり。月代、さかいき、榊、さかき、かみのきなり、さんさい心なり、いつも変らぬ青々として陽気なものなり。満五つ即ち六十月の間は、慾もなく心配なく案じ心もなくして神の氣も同じ事なり。神の氣、髪の毛。

### 身の内一家に於ける七福神元本の理

夫婦を初め家内中睦に揃うて丹精尽すを七福神と云う。睦に揃うは六にて家内仲よくむつまじい事なり。揃うて丹精尽すは七なり。睦則ち六金神、六金神とは金銭睦に融通するを云う。六神金神国狭土尊、丹精尽すは鋼の理にて大食天尊切る神なり、金神連統鋼の神を切る。真心にて丹精尽せば毘沙門天にて切り分け与えくださるなり、その理をもって譬えば拾円を壱円拾枚に替る事を人に頼む時は、切ってくれと云うは、拾円は円く睦にて六金神、切ってくれる人は毘沙門天

にして第七大食天尊变化座しまし、切る事一切を司る神なり。

夷、大黒、福祿、芸豊、布袋、弁財天、以上六金神と毘沙門天にて七福神なり。六神国狭土尊の变化にて一神大食天尊の变化なり。

大黒天、平常男一の道具の形、二俵の米俵は舉丸二つなり。担ぎたる囊は舉囊なり、手に持ちたる槌は則ち国狭槌なり。大きなる頭布を被りたるは〇〇なり。下を向きて足納す。これは世界にては大國主命にて金持長者なり。現今の銀行株主なり。福祿神は女一の道具の平常なり、夫婦むつまじく暮せば福に睦く祿と云う理。側に鶴のいる理は、つるはたつると云うて男一の道具の理なり。〇の一の道具は男一の道具を起る役なり。弁財天美女の姿に見ゆるは〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇とすときの心はたとえ醜き女房でも美女の〇〇〇〇〇〇する、その心の理を顯したるなり。芸豊の頭の長きは男〇〇〇〇〇〇〇〇形の理、布袋の腹の大きいは女懐胎になりし姿なり。夷の足の立たざる姿は婦人産する時の風体なり、抱えし赤鯛は懐胎せし子の生れ出たるなり。懐胎は海鯛の理にて赤鯛は赤子の理なり。釣針は大食天尊、胎内にて肉縁を切分けくださる理。釣糸は大戸刃尊、胎内より引出しくださる理。釣竿は国狭土尊にして産を司る理、竿と云うは産の王と云うなり。猿王権現猿田彦命、又庚申とも祭るなり。夷を少彦命と礼拝するは、人間は分だけ相應に金錢を持っては少なくとも足納して喜んでおれば福の神少彦命なり。又につこと笑つて暮せば恵美寿様なり。毘沙門天の姿は産する時の婦人の力みの理を顯したるなり。笑う門には福来り、怒る門には鬼来

ると云う。家内仲よく笑うておれば福神の祭り、怒る心は鬼なり。世上には鬼と云う者はおらぬものなり。腹立ち怒り強慾重慾の心が鬼なり、悪気なり。鬼は心の内より出で福は外より入るなり。内は我身なり、他人は外なり。往古より節分に煎豆を蒔くに福は内、鬼は外と云うはまさしく反対なり。なぜなれば福は世界外に在り、鬼は我内銘々の心に在り、故に福は外、鬼は内なり。節分とは身体にては万事思い断ち思い切る事にて、世界にては万づ芽切る事なり。一日にては夜丑の下刻、一年にては十二月中終り、正月節の始めにて四季四節、旬の初めての大節なり。豆を煮るは悪気の芽を出さぬ理、鰯の頭を用うるは目鼻口耳の四つを祝う理にて祝四、即ちゆわし心、思い始めにはこの四つの使い方を祝うなり。鬼の目刺を差すは強慾重慾、怒る心の芽を出さぬ理なり。よくよく往古よりの式来りの例を見てその元本の理を考え、人心を改良すべきなり。

### 正月祭りより十二月の理

年の始めを正月というは正しき月というなり。月はこの世の元の神、国常立尊様なり。この神様は人間身の内目胴水きの守護、世界は水の司り、夜を照らしようから始めてこの世という。人間やどし込みの時は上よりつくがゆえ月様という。

この月は万物の親、万づ始め年の始めなり。年という事は十方というも同じ事、又日の始めも



月が元となる。この正しき月の始めを正月と云うなり。

朔日と云うは元泥海より月たちあがりし事を云うなり。

二日、ふとは月の事(つとは畑の事)、日様が人間世界を掃えるそうだんなざれし事なり。

三日は、みとは人間身の内の事、みで産み広めた事、又水の事をいう。つとは月より人間のたまひいと身の内と切りわけたる事を云う。

日は火の事、ぬくみの守護なり。一日二日三日、この三日を水火風と云うなり、これを正月まつりというなり。この祭り様は家の門松に神を建て、七五三を張りひくくなり。

松は男松女松、これは国常立尊の御姿、頭一つに尾一つの三で産み広めの事。又水の事という。大竜の事。ちと日の面足尊様の御姿は、頭十二尾三つの大蛇なり。男は月様、女は日様。この月日の鱗ある木は松なり。又葉は、二つならんで、さかえ、ちりおちくさるも、共にはなれぬは天地夫婦のえん結び、互の誠思合い、へだてのないは松葉なり。又神はさかえ木と云うて、元人間は伊弉那美様の胎内になむなむと二人ずつ宿し込まれ、三年三月止まりて七十五日の間に泥海中へ五分から産みおろされ、同じ胎内へ三度宿り、その後は虫けら、いぎよの物に八千八たび生れ変わり、又その後、国狭土尊様の腹に男五人と女五人と都合十人やどまり、十月目より五分から生れ、この間の年限は九億九万年なり。人間始めて地上りし時は山の中なり。これより五十九年前十月廿六日迄のやどしこまれ三年三月とどまりて、七十五日の間に、年限は九千九百九十九年

の間に、だんだんさかえきたのも神のしゅごう。元地に上りし思いを忘れぬ為神を立てるなり。

しめなわというのは、しめとは一年の理をしめる事を云うなり。なわ、なは月、われ月、つきはきれめのなき水の御守護を云うなり。七五三と云うて七は天神七代、五は地神五代、三は水火風の理、これを合わせて十五となる。これ月の満ちる数なり。又この神様へ供える物は鏡餅と雑煮なり。鏡餅は月日の形なり。もちとは夫婦親子兄弟心をやさしくもち、家業も丹精にして家をもち身をもち、宝をもち行くには、家内心をねり合わせて行かねばもちきれぬ。このもちをこうじ幾つう幾つう同じように練り合わずで、もちと云うなり。豆腐は十柱の神のふうを云う、心白く四方正面内も外も同じ理なり。

昆布は元人間泥海中でこんぶのねもとに身をかくし、ようきたのしきそだちきたゆえ、ようきたのしき事をよろこぶと云うなり。

にしんの子を、かずの子という。にしんとは月日をいう。数の子とは九億九万九千九百九十九人の子数をいうなり。その他年中でけたるいろいろのものを一時に煮るゆえ、ぞうにといいなり。又年酒というて酒をのむは、酔うという事に理がある。よい月様、ようきの神、このふしをようというなり。御神酒というはこの事なり。三日の間石の物を献つるなり。

四日は四方の日、五日は五りん五たい、六日、六だい、身の内この六日をとしこしと云うは、六だいの神の借物を十柱の神で十用しまるゆえ、とうしめ光しめという。七日天神七代、八日は

八方、九日九のどう、九のせかい、十日は十方、十柱の世界定まり、十分の理これより元へ戻り、十一、十二と順にゆくなり。又十四日を年越えといふは、人間十四を越え十五になれば一人まえとなる。月も十四日を越え十五日となれば満月となる。この理をもつて十四日年越しというなり。十五日のついたち、小豆粥、米、粟の餅を入れるは、泥海中に月日兩人あり、月は水をふき日は火をふき、泥海中を照らしていた元どろかいを、かたどりで、かいという。小豆を入れるは粥をにごす為なり。それより廿日、三十日となれば、正しき月を終りと成り、月は夫日は妻なり。女は三十日同じように日を照らしても一と月とをさえるは月は夫なり、日は地なり。月は三十日の内一日満つる故一と月と云うなり。二月は月日かさなりの理あるゆえこれをまん月と云う。十二日夜は夜中に月見ゆる。

三月は水火風。三日を節句と云うは人間三から生れ、水火風で生きている故三月三日をせつくというなり。これは人間三三の六みちの日ゆえ大海のしおを大小干なり。

四月は四方の世の中月。

五月は五りん五たいの理、五をせつくというは、理をふく事なり。

六月は六たいの理、朔日を半がためというは、一年の半分目の月故、はがためというなり。

七月は天神七代の理、七日より十日まで、ぼん祭りと云うは、元十柱の神が台となつて、ない人間、ない世界を拵えた故、台を、ぼんというなり。よつて十日の間月中を祭るなり。

八月は八方八柱の神の理。

九月は九のどう、九日九の世界、この九九は、二九十八の心ようきなるゆえ月五歳わたり、よききに守護ある故せつくと云う。

十月は十方十柱の神御揃いになり、ようきおどりをして人間やどし込み、又生みおろした後、月日より使うた道具に神名をさすけたまうゆえ、十月を神名月という。この世の始め、人間始めは十月廿六日なり。又この度助け始めも廿六日なり。

十一月をしもつきというは、霜降りて云うでなく、十分理揃いじまいの月ゆえおさめ、しもうた月ゆえ、しもつきとゆう。

十二月をしわすと云うは、しわきる事。わはつなぐ事、すは切る事、無い月日を始めこの月でしまい故、元へ切りかえることをいうなり。又人間一年の理をしめて蔵をしめ、しをしめしわきるとも云うてあるなり。

## 神を祭る理

十柱の神を祭るにも月日を元としてなむてんりおうのみこと、と十人の神をいわいこめ、社の前へ又は鏡をたてあるは、天の月日は鏡の如く祈る心、願う鏡に現る如く、月日の御受納ある事

なれば、精神を清らかにして正直なれば、その修理えきある事を教えあるなり。

又禱にヒモロギを付けるは、世の中は五色五行五味五倫と云うようき心を備えるなり。

水を供えるは、人間心も水の如く、すぐい、きれいな、よごれない、ちぢんだものはふやし、死行くものを助け、いろを付け、人の心のよごれをあらひ、丸きも角も人にしたがい行く心を供えるなり。

塩を供えるは、人間も塩の如く、白いきれいな味のよき水へ入れて、姿失うても変らん物は塩なり。これをもつてやさしき人を、しおらしいという。

洗米を供えるは、ほしい、おしい、かわい、にくい、うらみ、はらだち、よく、こうまんの八つをほらい、まこと真実より人を助ける心になりし理を供えるなり。

又御燈明光りを三口供えるは、水火風の理、この風であしきはろうて我胸の内を暗夜に火をともせし如く、天理人道明かにして万づの元までも悟り取る心になりし胸の内を供えるなり。その上、海山里の珍らしきものを供えると云うは、百味と云うて、我心にはどのような味もある、まあすぐな心もありますと云うなり。神を祭り供物は皆我心をそなえるなり。

又拍手を打って拝みをするのは、右の手も左の手も十五ふしある。これをあわして三十ふしになる。これは一カ月の理、二つ打っては六十ふしとなるは、内々睦しいと云うて打つ理、四つ打つは世界も内も六と云う事なり。

拜をするのは人間顔の上に（したい）というところあり。神をうやまうにも下へさげ、人を敬うにも下へさげたいと云うのは、人間身の内にある、あおい、あかい、くろい、きいろい、しろい、の五しきあり。神の教えを心へ承知した事と人の心を承知した事を拜と云うなり。

又神楽勤めは神をいさめるために、ようきおどりをするなり。

おどりとは、月日はこの世の王、おう、うやまい、きそく守るもおどりなり。又親や夫にそむかんのもおどりなり。皆目上のさしずそむかんなは、おどりなり。王のとうりにしていれば神の心叶う事、これを神たのむと云うなり。

## 九つの鳴物の理

なると云う言葉は、音のなるのも、木草の実のなるのも、理は一つや。これを文字で書けば違えども、文字というものはいろいろ分かる為のもの。あざなを分ける故もんじと云うてあれども、なりものと云うは、言葉では同じ事や。この世はことばが元やで。などいふのは月様の事、なりというは国常立尊がこの世界をくるりとくるめている処の理をもって、なりと云う。それでこの九つの道具をなり物と云う。この鳴物九つある理は、人間は九から始まりて九でおさまる所の理なり。

又人間には九つの道具あり。目耳鼻口両手兩足一の道具、これ九つなり。

又世界人間、三で産み広め、水火風で守護して、衣食住で命をつなぎ、身上を敬い、身下を憐み、我身の行いとこの三つ、これ三三の九のゆう動めにこの九つの道具使うは、この九つの理によつて人間も世界もいきて成人する所の理を合わす為にこの九つのなりものをいれるわけ。九つのもなりものと云うは、ひょうしぎ、こと、しゃみせん、つづみ、こきゅう、すりかね、てびょうし、ふえ、たいこ。ひょうしぎと云うは月日四季ひょうしぎで、人間のやとまるも胎内でりずますのも生れでるのも、よるよる成人するのも又世界の、りゆうけい育つのも、花のさくのも実のりもあじのつくのも、この月日のしきで定まる。これをひょうしぎと云う。故に上役の物でなければ使われんこの理なり。又元年十二月に閏の一月を入れて十三すじにしたる意味、その理をたじめるなり。あのことこのこと、わがこと万づのこと云うは神の光りを云うなり。

しゃみせんとは、水火風の事、せんと云う事は元の事を云うなり。糸みすじは天地人をかたどり、水火風の三つの味の理、この三つが元を三味せんとゆうなり。

つづみとは、つとは切る事、づと云うは同じ事、みとは水の事なり。

つづみは上下同じ丸いもので、その上切る所をつなぐためになわを十文字にかけてしめてある。よつて天地だき合わせ、又夫婦の切れんようにつなぐところの理をうつなり。

こきゅうとは、こうは光の事、きゅうは九つの事なり。人間のいきをこきゅうと云うなり。もの

のはずみをこきゅうと、みなはりあい、もちあいのはずみの理をひくなり。

すりがねとは、すとは切る事なり、かねとはつなぐ所の理をいうなり。つなぐ事をかねと云うは、二つのことをするをかねと云う。又ちんちんと音のするは天子様の事、世界でちんと云うは大切な事をちんと云う。又子供の一の道具の事をちんぼうと云う。ちん物ちん重、物のきまりをちんと云う。又ふうふ中よき事をちんちんと云う。なかよき事をちんちんと云うは、すりかねを打つには二本のぼうでうつのは、あなたのする事はわたしがする、わたしのする事、あなたがすると云う互に立てやいの理を、ちんちんと云うなり。

てびょうし、左は男右は女。月日をかたどりたるものなり。天地だき合わせの理をうつなり。人間生れでるのも死行くも月日の御守護、この理をもつて仏法にても葬式の時、みようはちと云う物をうつなり。みよとは文字から見ても月日、とかくその形、てびょうしも同じ事、月日だきしめる理なり。

人間は日月のふところよりやどり、産れても月日のふところに住みて、死行くも月日がたましいをだきしめる理をあわすなり。

ふえと云うは、ふはめいめいのふう、上も下もそのふうあり。夫は夫のふう、妻は妻のふう。このふえ吹いたらなるであらう。ふうとはいきの事、いきは風なり。この世に空気ほど大切なものは無い。空気は月日のいきや。その月日のいきで人間はいきている。又万事いきある者は月

日のいきがついている。花の咲くのも実のなるのも風があるからや。この月日の御いきがなければ何にもない。この日月の御守護によりていつまでもなごうつづくのや。

ふうとは風なり、いきの事。えとはながい事さかえる事を云うなり。その口と子あな七つあるを合せて八つとなるは、八方のさかえをふくなり。ふくとは徳のあること、よきことなり。

たいことは、たいというは、大きいたいのこと。こうは、ひかりのこと。なり遠く音のひびくはたいこばかりや。表も裏もはりしめたは、月日天地しめいる理なり。又ぐるりにびょうにてしめであるは月日の事なり。この世界は月日がしめているという事なり。

右九つのなりものいれてつとめをするのは、人間も世界も九つのどうぐの世界、この二九を十八と云う、十八をようきと云う。この九つの理を合わす為にようき勤めに用ゆるなり。

### 草木に花の咲く理

世界の物は皆それぞれ花の咲くのは、そのものの子をうみだす元なり。白い、赤い、黒い、青い、黄い、この五色は性質によりて違えども、皆それぞれの本生なり。花の色も違うだけはその実の味もちがうなり。花にはめん、おんの二種あり。女花と男花とのころごうする故実がのるものなり。男花というは実を結ばぬ花を云う、女花とは実を結ぶ花を云う。このころごうは東西の

風で交合する。そのわけは別に風の理に説きおくなり。人間女は十三歳より一と月に一度ずつ月水の下るは、草木に花の咲くのも同じ事。月水下るあとさき十八日間に交合すればいんすいのるものなり。十八日は前六日、月水下る時六日、あと六日、三六十八の間を云うなり。子のやどりこむ所の理は、人間身の内のなはしるにくわしくするものなり。

### 竹に寅という理

寅と象とは、げきものなり。寅というは、この世界であらきげものなり。なれど象に会うてはしんの骨がくだけてしまうものなり。又象は竹とは、げきものなり、故に竹の中へは入らず。象の骨がくだける故、寅はこの理をもって竹林の中に住んで象の道をのがれ、寅の為には命の恩なれば、これを世界の人間に教え天地の大神をしらす為に竹に寅を書くなり。

### 牡丹に唐獅子の理

獅子は世界第一のけものなれど、獅子身中の虫と云うて、体じゅうへ小さき虫湧く時は唐獅子の命を失うなり。その時獅子の命を保つこととなりし故、獅子のためには牡丹に恩ある事なり。

この世に生ある物にはげきやくあれども、それをけすものあり。又人間にもどくとなる人もあり、又助ける人もあり。助けられたら我命にかえても恩をおくれというために、牡丹に獅子をかくなり。

## 庚申の理

かのえさるの月を、こうしんというなり。こうは光る事。しんは神なり、心なり、目なり、ほねなり、親なり。親孝心なりと云うもこの事なり。元人間、いざなみ様の腹に九億九万九千九百九十九人の子数を三日三夜になむなむと二人ずつやどり、三年三月止まりて五分から生れ、九十九年目に三寸五分まで成長して又死亡す。又元の人数同じ胎内へやどしこみ、これも五分から生れて九十九年目に四寸まで生長して、この時伊弉那美様はこれまで成長してからは五尺の人間になると喜び、にっこり笑うて死亡す。親のあとしとうて、残らず又死亡す。これより鳥畜類のはらを八千八度生れ変りし時、猿が一人残りて、この猿は国狭土尊なり。この腹に男五人女五人とやどりこみ、十月日より生れてこれも元は五分からや。生れてだんだん成長に應じ天地水地分りかけ、一尺八寸まで成長した時、子が親となりて、男一人女一人と二人ずつやどまり、これも十月目より生み下し今に至るまで生れでるなり。この鳥畜類より元の人になる時のつなぎ親を、

こうしんという。こうしんは八千の内にある。八千とは、鳥畜類に八千八度生れ変りし利を云うなり。この時国狭土様の守護で月日てらば、ふらず、ふらば、てらず。この理で八千の入りに雨降れば八千中照る事なり。又入りの日に照らば八千中は、雨ふるか、くもるかするなり。又人間こうしん月はかぜを引くは、つなぎ親より心のそうじせよと教えくださる事であるなり。

## 湯だちの理

人間親が親となって女男二人ずつ産おろした時に、その子をあらうため、天よりぬくい水をふいてくださった故、今に於ても子が産れたら湯をもって子を洗う事なり。月日元々湯を下した理をもって、今所々へにわか降る雨を湯立ちという。夜ふるのも昼ふるのも同じゆうだちなり。

## しきものの理

しきものは、六尺に三尺をいまいと云うのは、人間一人天理一つ天地も一つずつ、東西南北も一人限り、世界も一人限り、そこで世界一枚と云うも、しきもの一枚と云うも同じ事や。一人寝ても三六のはばで十分や。起ても十分、すわれば三尺四方にて十分なり。世界は何程大きいも



人間の住む所は三六よりないものや。一寸東へよれば西が一寸あぐ、千里北へよれば南が千里あぐ故、天地八方も人間一つに一つの理より無き故一まいと云う。又しきものとは、よろよろ九十六四季の内にやどりこみ生れでたり、又死行くもこの刻四季なり。人間はしきの上で育つ故に、三六のしきものという。又三六を一人まえというは、人間三から生れ、六だいの神のかりものやで、十用する故、三六を一人前というなり。三と六とは三六十八というて、よろきのかずなり。又量は三尺に六尺、これを、じょうと云うは、一は、ひとはというてこの世のはじまりじや。うはすじというて、切つてもつなぐをすじと云う事で、一じょうとは月日天地相はなれん事。人間の心も人のためを心に忘れぬ事を助け一じょうという。その量の上にて半じょう寝て一じょう(心一すじ)というなり。これを二枚ならべて一坪というのは、夫婦あわした事なり。つぼの理をもって女ぼうとなり、これ六六四方は三百六十日一年の理となるむつまじいの理をもって男をつまという、女を妻という。どちらも同じつまというは、睦まじい中をいうなり。四方六九なれば内むつまじい世界むつまじいと六九に納まる事なり。

### 印形と肉の理

いんというのは月の事、いん水というも同じ事。いんすいは身の内骨のしんにある水気なり。

いんが元で骨がある。ほねとは天地八方の事。人間も骨が元で五たいとなるなり。いんというのはほねの事、又にくと云うのは身の内の肉の事。世界九つの理と身の内九つの道具の理と合わして十八となる。このよふきで二九となる。心いさめば肉もますますふえる心。いずめば二九もへる。身の内のにくは、水きとぬくみなり。この二つの理ではねも肉も五分々々の持合いで五たいをなすものなり。人間名前の下へ印形居るのは我五体を居るなり。

### 十路盤そろばんの理由

このそろばんをさんというのは、人間三で産み広めた事、さんからひらけた理を云うなり。八さんの元は一九が九から九九の声を遣うは、人間九つの道具の理と世界九の理とを合わして九九の声を遣わねばならん事なり。この一九は元なり。九一、加一、九二、加二、九三、加三、九四、加四、九五、加五、九六、加六、九七、加七、九八、加八、この八つをもってはつさんと云う。元の九として十にまん三ぜん四ひやく五十六こく七とう八しよ九ごうとなる。これは米の舂目ではない、人間身の内の事なり。一を十というのは、一に月が始めて日様にだんじ、八柱の道具の神をみだし、都合十柱の神が一つになって持えた人間なり。一から十まで、定まれば又元の一つにかえらねば数は十よりない。又元の一にかえる理と、一から十を持えた理とで十を一と云うなり。

十用とはこの事なり。二まんというのは、いざなぎ、いざなみの二神を人間の種苗代につくり、人間の父親母親となした事というなり。十五日まんげつというも、月は一日より理がみちてまるとなり、これをまんげつと云う。人間も母のたいないへやどりこみし時は水なれど、十月の間に五りん五体となりてこの世へ生れ出る。これを月満るといふ。みちとはまんの事、二万とは父母神二柱の体をいう。又人間のめいめいのからだもまんと云うなり。人間の元という事なり。又三からうみ出した事をいう。三とは大食天尊は親子胎内の縁切りの神、大戸辺尊は引出しの神、国狭土尊は古血を下し、皮つなぎ、あとしまいの神様なり。人間生れでるにはこの三神の守護でなくば産む事も産れる事も出来ん。これをもつて三から産み広めたというなり。千とは、せんは元の事なり、これを三千というなり。

四ひやくというの是一年四季春夏秋冬なり。月四季は七日半を一季として三十日に四季あり。日四季は三時を一季として十二時に四季あり、一時を二刻に分ちて四十八刻あり。この内に四季あつて、九十六四季となる。これ一日一夜なり。この刻四季より人間やどり又産れ、よるよるせいじんするも、又草木のびるも花開くも、四季より出来る。この世の万づ開くは元なり。開といふは日夜九との言葉なり、それで四百という。この四季の理は別に説明す。

五十といふは身の内五たい、左は男神、右は女神。十柱の神の自十由用にて五体となるなり。六こくとは身の内目は月様のしゅごう、ぬくみは日様の守護、皮は国狭土様の守護、骨は月読

様の守護、これで五たいという。いきふきわけはかしこね様の守護、これで人間身の内六たいの神のかりもの。身の内六くろという、この六九の借物この理を六石というなり。こころ六九身体六九世界六九なれば、三六十八よふきに光る体なり。

七斗といふは七柱大食天尊、親子胎内のつなぎを切り分け、元は一つの理を、人間と世界に分け、親と子とに分ちて、身の内も世界も十柱の神のしゅごうかわらん理を、とるといふ。又身の内五たいと世界は水火木金土の五こう、きつて合わして十と云う。

舛と云うは、八は八方、八柱の道具をもつて紋形ない人間を産みおろしたるを云う。生舛とはむまれる事、又いきていることもいふなり。

九合と云うは、九と九と合わしたる事を云う。この九と云うは、身の内九つの道具のかりもの、又世界を九の世界と云う。これは、なりものの理にある事ゆえ季、しきは鳴物の理と引合わすべし。十路盤けた上五つは五りん、下五つは五体、都合六つの玉は六柱の神の理。これを九九の声で遣うは六九と云うて身の内を納め心の納め、六九より外になし。身の内六たいのかりもので九つの道具十用するは十五日満月の所以。又九つのどうを六たいの神守護あるは、九十四季の理をもつてなり。九六で日夜九と云う故開りゆ開坪という。かいは、ひらくという事、火は日なり。あは月なり日夜九となる。百というも開というも同じ事。

## この地球を国という理

人間くのどう世界くの世界、この二つを合わせて九二、世界あつて人間なくば国とならん。人間あつても住む所なくば国とならん。九と九とで国という。又郡とは、こうは六たいなり。人間の身の内の事、イは人間がすんでいることと国常立尊様はくるりと取りまいて世界守護下さる理をいうなり。よつて理五分という。

村というのは六柱の神の理、六九の理をいうなり。里というは月の事、かんろのさとりのこと。

## 四季の理

四季というのは春夏秋冬の四つをいう。春とは、つわるといふて、つは大食天尊、切る御守護の事をつとという。つで切るところへ芽の発することをつわると云う。はるは万物の芽をふきだす時なり。じくと皮との間へ水気を上げ実をふとらす時なり。人間は子のやどりし事を「つはる」と云うも、日々理がまして、はりでる事をつはるといふなり。

夏というのは、なほ月様、天の事、水気のしゅごう、さむい事なり。この水気のさむき、ひや

かい、理をもつて地のそこへ入りこみ、世界が日のしゅごう、さむき事あつくなるなり。

秋とは、あは天の事、きは月日のいきなり。天地のいき五分々々のようきをあうきという。又月日春より夏まで万物を育て、十分の守護して手のあく事もいう。又人間春種を下して夏迄修理肥をして十分の実のりをとり、人間の手のあく事を云うなり。

冬というのは、ふうは風なり、ゆはぬくみ。日様は地なり、地のぬくみし時、天のいき地にさがり、風つよき故ふゆと云う。又人間は万物を目に見ていれば心ようきとなる。目にもぬ時は心ふじゅうとなる、ぶしゅうともいうなり。この四季と云うは三カ月を一季といふて、三三九十日なり。これを四季合わして四九三百六十日なり。この内春九日夏九日と四季のかわり目に十八日ずつ土用という事あり。又夏九日秋九日これも土用という。秋九日冬九日これも土用と云う。いづれも十八日ずつありて都合七十二日、四たびにわたれば十八となる。これ半土用を四季のかわり目として八つに割れば九日ずつとなるなり。

春とは東、木（水）の事、夏とは南、火の事、秋とは西、金の事、冬とは北、水（土）の事、これ四季なり。

土用とは中土の事。この土は一年三百六十日の内に四度あらわれて水火金木土の五行となる。これが五ふうふの神即十柱の神なり。春七十二日夏七十二日秋七十二日冬七十二日土用七十二日、都合五つに分ちたるは、人間の身の内の（ろくろ）左手十八右手十八左足十八右足十八、このろ

くろの敷七十二ふしの理なり。

四季とは一年三百六十日の間月日の差図を四季と云う。身の内も七十二のろくろで身の内十用の働き出来るなり。一年七十二節と云うもこの理なり。月四季というのは一カ月三十日の内に四季あり。一季は七日半なり。これを一週間ともいう。一日より七日半迄を春という、八日より十五日までを夏という、十六日より廿三日までを秋という、又廿三日より三十日までを冬という。よりて一日より三十日にようきが変わりくるなり。日の四季と云うは夜昼の内とある四季なり。一日一夜を十二時として三時を一季という。即ち三十四十二時なり。朝卯の六つ辰五つは四つ、この三時を春という。午九つ未八つ申七つ、この三時を夏という。暮、酉六つ戌五つ亥四つ、この三時を秋という。子九つ丑八つ寅七つ、この三時を冬という。よりて日の出より四つ迄と四つより七つ迄とはぬくみも違い又日の色も違うなり。日の入りと亥の四つ迄と又この九つより明の七つ迄とはようきが違うなり。これ一日一夜に四季ある所謂なり。一時の内に二刻あり。二刻とは月日の光りをこくと云う。光はひかり、九は一九の理なり。十二時の間に廿四刻あり。その訳は朝卯の下刻、辰の上刻、辰の下刻、巳の上刻、巳の下刻、午の上刻、午の下刻、未の上刻、未の下刻、申の上刻、申の下刻、酉の上刻、酉の下刻、戌の上刻、戌の下刻、亥の上刻、亥の下刻、子の上刻、子の下刻、丑の上刻、丑の下刻、寅の上刻、寅の下刻、卯の上刻と都合以上廿四刻あるなり。

刻四季と云うのはこの一刻の間に四季あり。廿四刻のこのげんには二四が八、十に四、四十六と都合九十六四季あり。この刻四季は人間胎内へやどるも又母の胎内で十月の間理を増すも生れ出るのもこの刻四季がもとや。よつて子がうまれる時を四季理という。生れて後夜々せいじんするも、又神の毛ののびるのも刻四季なり。又死行くもこの刻四季なり。

草木の実が芽の切りだすも、せいじんするも、花のさくも実ののるも、味のつくのも、この刻四季なり。花の開くというは、日夜九というて一日一夜に九十六四季の事をひやくという。百という字も一日と書くも、人間も世界も万物もいきあるものも、いきなきものも、この刻四季でせいじんするなり。

四季の元は塩なり。この四季はきりきりきりきりと四度ずつ動く合数三百八十四度なり。三百は水火風、八十は八方八柱の神、四度は四王の理。四王とは刻四季の元なり。この刻四季の時、夜せいじんつよき朝顔や又山の芋の如きのびるものを夜中ためして見るべし。必ず刻四季にはひりひりくくとのびるなり。又ものに味のつくのはこの刻四季のたびくしおのぼり、かんろの露となりて夜下るのを四季理でその物にたかす故、万事に味がつく者なり。よりてこの四季は広大ななき天味わいのある話なれば、めいめいに我身に引合わして委しく悟り考えみるべし。

## 人間身の内の事

○人間身の内、最初母の胎内へやどり込むのは男女のいんすいなり。男のいんすいが五分、女のいんすいが五分なり。

この水気は、国常立尊、月様の守護でやどり込む故、子がやどりしより後は幾月というて、幾日とも幾時ともいわん、一月二月というなり。この月様は身の内目胴、水気の守護なり。二月日には面足尊、日様のぬくみの理ゆるしくだされ、この水きとぬくみは月日なり。三月目には国狭土尊様は皮つなぎの理をゆるしくださる。四月目には月読尊様は骨と力の理をゆるしくださり、五月目には雲読尊様は飲喰い出入りの理をゆるしくださる。これで身の内五体という。この飲喰い出入りと云うのは、最初やどりてより元、よなというものあり。よなとは、よは月様、なと云うも月の事なり。このよなは人間のへそなり。この五月目より五体はかり母の日々食する者は母の身を養いよなへ戻り、よなより、へその緒もつたい、胎内の子を養ない、あまる所は又一すじの道よなへもどるなり。これ飲喰い出入りの初めなり。この理は、なり物の柿でも蜜柑でも皆親木よりゆずありてそのりゆずをつたい、なり物を大きいしたり実を入りもつたりするも同じ事なり。人間でも子の出来るは、りゅうけいに実のなるのも同じ事なり。そのやどり込む元は月水と

いうて、月に一度ずつ女には月水下るなり。これは人間の花なり。この花の咲く間は一月に十八日ある。前六日はつぼみの如く、中六日は満花の如く、後六日は落花の如くなり。この内に男女交合すればいんねんによって子がやどるなり。木の実でも月日のようきによりて、花咲きても実ののらぬ事あり。これより木のいんねんなり。この如く五月目より胎内の子をやしなうは、よななり。六月目には惶根尊様はいき吹分け、言葉の分る理をゆるし下さる。これで身の内六九の守護という。男子をむすこと云うも、又女子をむすめというも、この六柱の神の守護の理を云うなり。七月目は、大食天尊様は十月目に子を産みおろす時、親子胎内の縁を切り理をゆるし下さるなり。又死行くときはこの世とのいきねの縁を切り下さるなり。八月目は大戸辺尊様は産時引出しの理をゆるし下さる。九月目には伊弉那岐尊様は種の理をゆるし下さる。十月目伊弉那美尊様は苗代の理をゆるし下さるなり。

十月目産時のせわどりの神は、親子胎内の縁切りは大食天尊様、引出しは大戸辺尊様、皮をのばし、十月の間たまりし古血を下し、あとを元娘の如くしまい下さるは国狭土尊様なり。この三神の世話どりにて産下しする故おびやおさんというなり。元月日の守護でやどし込み又月日の守護で生れ出るなれども、あと八柱の道具ひながたをもつて十月の間月日より守護下さるなり。尚産下してよりも夜昼月日の身の内に入込み、この夜御照しの如く守護くださる故、せいじんもする、十用も叶う事なり。身の内は神のかりもの、人間は月日の遣う道具なり。よつて人間は小天

地とも云う。身の内と世界は同じ事なり、その理由は左に記す。

### 子のやどる理

女子には月一度ずつ月水下る事、十三歳より後は毎月なり。これは草木に咲く花も同じ事なり、この時は二百十六時なり。前七十二時はつぼみなり、この日数は六日なり。中七十二時は満花なり。この日数も六日なり、後七十二時は落花なり。これも六日なり。

二百十六時の内に男女交合して男女のいんすい五分々々の理と天地いんねんの理によって子がやどまる。これは両親の心通りと前生のいんねんによって男女の子やどり込むなり。やどまるとは月とまるといふ事なり。胎内にやどまりてより日々理がまして、五りん五たいとなる。この四季数は二万七千三百六十四季なり。

時数は三千四百二十時なり。

時数は二百八十五日の間に実身のりするものなり。胎内へやどり込むのも刻四季よりやどり、生れ出るも刻四季で生れでるなり。四季数二万七千三百六十。四季は、しきしょうと云う。二万とは月目で体の出来る事、七千とは天神七代の神、千とは元の台の神を云う。三百は三で産れる理なり。六十は六だいの神のかりものの理。

刻数六千八百四十刻は、六千は六だいの神が元で出来る理、八百は八柱の道具の理、四十は四季でやどりて生れる理。

時の数三千四百二十時は、三千とは、水と火と風が先となって、四百は四季から花が開き、二十は二柱のまことで身の十用出来る理。

日数二百八十五日は、二百は月日二神でいきをして、八柱の道具しゅうごうで身の内動き、五たいと五はいとのたひいとなる理なり。

人間は四季上でやどまり四季理で生れるなり。この四季なければ生れる事出来んゆえに、差汐の時に多く生れ又引汐の時にも生れるなり。この差汐と引汐の間は知死期時というて、この四季に生れた子は命短かし。又命あれば運わるし。その理は、やどり込みにも知死期時にやどりた所以なり。

### 男女交合を色事と云う理

身の内五色のはい、青い、白い、赤い、黒い、黄いの五つを五しきというは、この心を合わしにする故に事という。又世界も四季というて、春九十日夏九十日秋九十日冬九十日、四九三百六十日なり。この内に土用と云うて、一季に十八日ずつあり。これを四季合わして七十二日とな



る。三百六十日より七十二日となる。この四季と土用と五つにわりて五色という。この理も四季上というなり。

世界中子のやどるも生れるも同じ事なれども、きりょうよきとあしきとあり。又福德のあるとなきは前生の因縁この世にはえてくるなり。又世で心の定め方、身の行い方で理が分る。なんば精神の因縁あしくとも心月日に叶うたら前世の因縁も切つてめづらし守護下さるなり。

## 乳の理

男親を父といい母親をははというていれども、母の体より乳が出る。なぜちちというなれば、父は天なり、天のやしない地をこやし万物を育てる理なり。人間の母も夫の養いを重じて身をこやし、その身を肥した味がちちとなつて出るなり。乳の色は白い色なれども、元は、皆青いも赤いもいろいろ食つた者が白い乳となつて、又味もすいもいがいも皆あまい乳となつて、これは元よりかんろうの露で育つた食物ゆえ、白い甘い乳となるは元の甘露となつて子を養うなり。これれ天なり父なり。この理で父という。人間はいつ迄も天の父にやしないを受けて地の母のひさで育つなり。よつて世界中の人はひとなめの者を喰うて育つなり。

## 月様は万物の元

皆世界中の物は名あり、なほ国常立尊、この神が元で出来たる。それぞれできたる万物であるゆえ何品でも名があるなり。名の違うだけは品も違う。違うだけは色も違うなり。

白いでも、おしろいと豆腐は同じ白でも違いある。又木の葉の青いと草の青いとは違うなり。名も違えば色も違う。色が違えば品も違う。皆百色百品違えどもその元は名の一つにとどまる。水の元は身のづうと云う。火の元は水からでけた草木なり。風の元は水気と火気の二つなり。

## 世界地震ゆる理

この地球に湯口四十八カ所あり、この湯口一カ所止れば地ふるい動くなり。人間身の内も四十八カ所の脈すじ、一カ所でも止れば身上ふるいうごくなり。身のふるいとは世界地震とは同じ事なり。

## 雷の理

水気強き所へぬくみ急に登り、水気でつつまれたる火勢発する故天なるなり。これは天のくもりなり。人間心のくもりあれば腹のなるはこの理なり。

こえる、やせるというは

こえは月日のいき、天地の事、あじの心、こえるはようきなり。こころがこえたらずいしんがこえる。ずいしんがこえたら身もこえる。

やせるというは、やは月様の事、心の事、心にくろうしたら神の心のいずむなり。

小成神の心をせめるでやせるという。なんぼ味のよきものでも心やせたら味もない、味を知らねばずいしんがやせる、ずいしんがやせるで身もやせる。

## 嫁入りの式

嫁入りの時には、下に赤き物を着て上に白衣を着るは、月日の理、白衣は何色にても染まるなり。その先方の家風に染まると云う事なり。

又頭にさす笄は一天の理、我生涯に夫一人より他に身をくるわさんという理なり。鼈甲の櫛は月日の形、鼈甲は亀の甲なり、亀は国狹土尊、皮つなぎの理なり。女常にあいそより世界つなぎの道具なるゆえ、又その家の世つぎを育て先祖の名をかがやかす為の嫁なり。この理で鼈甲の櫛をさす。又日々心の結ほれをときあげて内々睦しいの元ゆいをかける道具なり。

三世のかために盃を三三九度するは、夫婦三から生れ六九に家を始める理と、月日の如くようき、ように心いさんで暮す事を九どうというなり。

万歳干以相の緒を奉ると云うは、万年も変らん儀をもって親孝信夫貞女兄弟仲よく身上を教い身下を憐むことをいうなり。

松竹梅というは、松は末代の理、松の色のかわらんみさおというなり。二葉は枯れおちるとも共にはなれぬ理なり。竹は節数あれども、元から末までくるいなし。千代も八千代も心かわらん事を心の丈という。梅は五りんの花に良き香を含み、実を結び、その実の味は千万年かはらんも

のなれば、右の三種を数いこめるものなり。

### 草木のいきの事

木も草も生れあるものは、皆いきている。その訳は、木の皮に人間のはたと同じ木あなあり。このあなより温みを入れて水気をだかす。だいた水気はその穴より吹出す。これで草木のせいじんするものなり。

草のさくもその物の性質によって色々五色の色含み、それぞれ花が咲く。花も水気とぬくみなり。

実を結ぶも、水気と温みの二つを含み、空気にも水気と温みあるゆえなり。

実は風で実のる。よってこれをなり物と云うなり。なほ国常立尊、この世界をくるりととりまいて守護する故、理という。理は九九理なり。この世界を九で始めてしめて入る所を九九理という。

この神の守護を「なり」という。万事何の事なりその事なり、この事なり、という。なり、は神の守護をいう。人間風俗をなり、というも、何事もなりきたるといふも同じ事なり。

### よあい、つよいの理

よわいとは、よい月様、この月の心よりあいをするゆえ、心のやさしき人の下に従う者をよあいというなり。

あいするはよき事なり。

つよいとは、人間心できばよき事なれども、つは大食天尊の切るの神、世界中の人を切るといふ事、切るよいういをつよいというなり。

### まけた、かつたという理

まけたとは、よき種をまけたという、こちらがまけたら、かつたほうがよろこぶ。人のよろこびはわがゆえなり。よきたねがまけたというなり。

かつたというのは、かかっとうたということ。世界の人がおそろしがる、又我身もたかぶるゆえ、上の所へ者はよらん、ひくい所ならすなおな水が流れよる。けれど高い所はあらしがふく岳のことで、木も草もそだたん。この理でかかっとうたという。

やさしいというのは

やは月の事、八方の事。四方四方からあの人でなければ、あの人ならとその人をさしてくる事をやさしいというなり。又しおらしいというは、いつも心のかわらんひくい人をしおらしいという。しおは世界中のいちばん低い所にいるけれど、世界中の人に味をあたえ、よろこばすは「しお」なり。しおらしいというはこの理なり。

### 動物の三種

世界の嗅ある動物は、食物噛み分ける物は上から目をふさぐなり。この物は胎内で形をつくり子を産むなり。

これ天に住み天の養いで十用する証拠なり。その種類は人間、牛馬犬猫の類は又食物を丸飲みにして、腹の中でとかすものは目を下からふさぐなり。この類は玉子で産みおとし、温みをもって子にかえる。これ地の勢生を受けたる証拠なり。

この類は蛇鳥かわずの類なり。

地の中でもいきを保ち、又空を飛ぶの十用あるなり。

又食物を左右より喰う物あり。これは生れたまま目ふさぐ事なし。この類は玉子を産付け、天地のようきで子にかえる。又親なくして生ず、これ風の理なり。

天地水気と温みとでわくなり。

わくとは、わは月日の事、九は風、月日のいきで出来るゆえ、わくというも、つめたい水が火の勢いと合して湧くというなり。皆天地風の三種は動物ばかりでなく、木竹草にもこの理ある故、大木になるもある。伏いん木とて年限たちでも小さい木の類あり。竹でものみふとるだけで又年限たちでも小さい竹もあるなり。万事この理をもって万物を考えみるべし。

### 雨降る理

天一枚は月の体、国常立尊、御姿は竜なり。月は水の司さゆえ水をふいて地をしめすなり。

### 月様御姿を竜と云うは

理王と云う事なり。世界りょうぶんそうりよ始めの子、神の心にかのう事を、りょうにかのう

という。我が心に叶う事をりょうけんという。金一円というも、りょうしんというも、りょうが  
ん、りょう手、りょう足、というも、皆月日の事なり。

### こいしというは

こいというは、こは月日の光、いは月の事、心の事、人の心へ、我心うつすゆえ、こいしと  
いう。こいは月日の誠の心をいうなり。ほれるというは、あさい事なり。ほは八方の事、心のよ  
るという事なり。よるも月の事なり。

### 風ふく理

風は月日のいき、西北の風は男、東南の風は女なり。その訳は、神の古記を見て知るべし。風  
は八方より浪の如くに吹くは、かしこねの神、ふきわけなり。りゅうけい或は実のりをさすため  
男女の風をふき分けるなり。先ず麦は東女風にて実のる。米は西男風で実のるなり。この時東風  
強ければ実入り少なし。万事草木の実のりもこの理に引合わすべし。

### 開闢という理

書物などに天地開闢という事あり。かいびやくとは、かいは海の事なり、びやくとは、日と夜  
との九の理につんだ事をひやくというなり。

### つき日という理

つきとはひろい事、ひとはちぢまる事なり。故にびんぼうを、ひんという、こじきを、ひんに  
んという。

面足尊様は、頭十二に三筋の尾に三つの劔ある大じゃなり。十二の頭一ときずつ頭かわりて守  
護あるなり。

いなびかりというて照るのは面足尊様の、頭の守護ある方に光るなり。又いなびかりを、いな  
ずまともいう。これ日様と月様の御夫婦の理なり。ひかりとは日様か月様より理をかりたるを光  
という。日様は、頭十二あって十二時に一時ずつ頭がより、十二支の方へとりまき御守護くださ  
る故、いなびかりの見える方角はその時、日様の頭の向いた方なり。

### からてんじくという理

からてんじくといえは、文字者なれば支那国と印度国の事と思えどこれは大きな間違ひなり。神は世界中がからてんじくや、とおっしゃる。

からといえは、みのなき物をからというである。よつてからとは、何もなき、何のたのしみもなき事をからという、世界中がからの国や。てんじくといえはこの世界は、くで始まりくで納まる、九の理でせまる。身の内も九の道具の借物なり。てんじくとは天と地の九の理でせまった所を、てんじくという。世界中の事をいうなり。

### 時という理

時の始まりは朝の六つが始まりなり。六つとは、むつまじい理、六たい始まりの理なり。

五つとは、五倫五体の理なり。

四つとは、四方で面誠の理なり。

九つとは、この世は九のどう、九の世界の理なり。

八つとは、八方八柱の神の理なり。

七つとは、天神七代の理なり。

この時と時の間にはん時というがあり、これを夜昼合わせて廿四時となるなり。

### 四季の理、銭の理

一年に四季あり、年四季という。月に四季あり、月四季という。日に四季あり、刻四季という。皆四季々々にて身の内も世界もうつり変わるなり。夜昼十二時にて一時に四季あり、これ四十八四季なり。この四十八四季の間一四季に一度ずつ水もめくれば血も通う。合わせて九十六度、通うなり。ぜにといはは、丸くして、中に四角なるあなあり、丸きは世界を丸くつなぎよう合う理なり、金はつなぎなり。

四角の穴は四方の人のゆうずうをする理なり。昔は、九六というて九十六文を百というなり。これは身の内よるひるに九十六どの両親のはたらきを理につめて九十六文を百というなり。

百とは、ひやくとて、ひるとよるとの九の理のつんだ事を百というなり。

一日 はじまり。

二日 たつぶり。

三日 みにつく。

四日 (四つ) よのなか。



五日 (五つ) りをふく。

七日 (七つ) なんにもい事ない。

八日 はつぼう。

十日 (十は) 十ぶん。

十二日 (十分) たつぶり。

十四日 (十分) しあわせよきよう。

十五日 (十分) 理をふく。

十七日 (十分) なんにもゆう事ない。

十八日 (十分) 八方ひろまる。

十九日 (十分) 九がなくなる。

廿日 たつぶり。

廿二日 たつぶりたつぶり。

廿三日 たつぶりみにつく。

廿四日 たつぶり仕合せよきよう。

廿五日 たつぶり理をふく。

廿七日 たつぶりなんにいう事ない。

六日 (六つ) 六たい。

九日 (九つ) くがなくなる。

十一日 (十分) 一にはじまる。

十三日 (十分) みにつく。

十六日 (十分) 六たい。

廿一日 たつぶり。

廿六日 たつぶり六たい。

廿八日 たつぶり八ほう。

三十日 みにつく。

一月三十日 わるい事なくば一年も同じ事。

廿九日 たつぶりくがなくなる。

### 女の子を糸さんという理

女の子を糸さんというのは、辰巳、国狭土尊は身の内皮つなぎの神、女の一の道具、このやさしきつなぎの理をもって糸さんという。

この二つの理は夫婦の理なり。これ二つの道具は針と糸との理なり。針の行く通りにやさしくついて行けば、いかなる者もつなぎつくなり。糸はつなぎ道具、皮つなぎの守護とは世界中の事をいうてある。世界つなぎには助けてなくばつなげん。この理をもって源助星という。げんは元なり。

助けは文字から見ても日の力とかく。日の力は助けなり。万事やさしく人をたすけたら、世界の内の人がこいしがる。こいしがるのはつなぎ理なり。

## 神様の御顕現

伊勢国五十鈴川の水上に鎮座まします日本総社内宮外宮様は、諸冊様、月日二神御入込みくたされたるなり。天照皇大神宮の天は水、水は月様、照は火、日様、す諾め冊おみ親様なり。八幡大神、春日大神御副いくださるは月読尊、国狭土尊にして、月日様の一の道具神様なり。

讃岐国琴平山に鎮座まします金毘羅宮の御神体は大己貴命にして、即ち大国主命なり。国狭土尊の変化にして金の神、きんびら様なり。舟神と崇む。舟はつなぎの理にて女一の道具と同じ理なり。ほばしら、櫂、櫓、皆男一の道具と同じ理にして、舟を自由自在にするなり。これ金毘羅宮に癩病の者一心不乱に祈願を籠むれば御利益著しくありたるは、つなぎの御守護くださる神の变化故なり。

山城国男山に鎮座まします八幡大神の御神体は、神功皇后の御腹より降誕まします養田別皇子即ち応神天皇なり。この八幡宮は武将神と崇む。破軍星の御心即ち、月読尊の変化ましますものなり。悪気逆徒を制しくださる神様なり。

山城国伏見に鎮座まします稻荷神社と云うは、往古即ち神代の時天の親神初めて人間に米を与えられたる時、種配りを命ぜられたる神なり。心正直にしてよく勤勞せられし故、米の神様となり玉う。人間その往古その時分神代の頃の如く正直真心狂わねば、稻荷様と同等の位あれども、だんだん人間の心悪気盛んなる故に皆下りたるなり。例えば今の米屋が稻荷様と同じ理なり。米買うもの正直にやれば御徳意様と米屋主は敬えど、代金を怠惰し又払わざる時は皆ののしりを受けるなり。命の親たる米なればその心得大切にすべきものなり。世間に往々狐の為にたぶらかされ路に迷い困難する者あり。狐は賤しき獸類にして万物の靈長たる人間必ずしもだますものに非ず。されどもそのだます者は人面獸心にして金銭出入り交際をいつわり、或は命の親たる米屋をだましたる種の生ずる故に、一の獸類たる狐の為に困難するは恥しき次第なり。よくよく注意專一なり。

家々かまどの上に祀る三宝大荒神は人間の命、世界水火風三つの宝、身体にては水気熱温呼吸の三なり。この三つは平常一秒間も欠くべからざるものなれど、洪水、大火事、暴風となる時は恐るべき大の荒神なり。故に三宝大荒神と崇むなり。かまどは六台の事なり。六台とは木、火、土、金、水、風の六つにて命を保つ故に九の土と云うなり。くど九つ胴、六台は三つ載る理。

出雲大社は大国主命、第三国狭土尊の御変化なり。縁結びの神又弁財天と祭るも同じ、金比羅宮も同じ、金の神と祭る。金銭もつなぎ、舟もつなぎ、すべて乗り物は皆女の理なり。弁財天美女の姿を描きたるは国狭土尊の御徳を現わす。怨み残念三代持越せば癩病と云うはこの神様の立腹。この神様は人間万物つなぎ一切、又表の神様ゆえ見える処美しき、奇麗なるは、何事に限ら

ず表のつなぎはこの神様の御心徳の現われ故、例えば人間もいかなる美人と云うても癩病、皮膚病の如く皮つなぎ腐れ破れ、或は体内のつなぎ切れて病体となれば醜き姿となるが如く、この神様の心に叶いその道に徳を積んだ心の理が美人と現われるなり。人のつなぐは人を立てる、天の理を立てるも同じ理、又音声の美は惶根尊の御心徳。

又月読尊は昔より弓矢八幡大明神と祈りたる軍の神様にて、勢いの神と云う。破軍星軍を破ると書く如く、誠を立貫きて悪を破る勢いの強き立ちきつたる御心にて、この神様の徳によって世界万物は倒れず立っている。万づの物事成り立つ納めの神、誠をもって世界を立てる事に強い。善に突張り抜く、くじけぬという神様なり。勢いが弱くては何事も立たぬものなり。故に人間も天の理を守りて誠を立てて人を立て、理を立てて行けば、月読尊の御心故、破軍星と云う。向って来るものが皆ことごとく負けてしまふ、突き破らるるなり。立てる事に強き神様なり。人間の埃と云うは我身の思惑を立てんとして誠を失い、天の理を立てぬ、破る故、我身が立たぬようになるなり。

御教祖は天保九年秋戌の十月より神様の御命を承り給い立てて下された、用い下されたも同一（戌亥が建始まり）、その神様の思惑を立てるために、我身我家我子を犠牲にして、あらゆる迫害の中幾度の監獄、いかなる御艱難も御厭いなく、その突立った御心を五十年間くるわず御通り下され、神の思召を立貫き下されてこの道が立始まり立教となった。御教祖は有形の物は人に施さ

れたれど、心は即ち神を立てられたのである。教祖には恩の送りようがないとの神様の御言葉もあり、故に御道は人間の親たる神の思惑を立てる道なれば、人間の我身勝手の思惑を立てよと思えば間違ふ故、神に水くさい、成り立たぬ人間心で成り立つ道でない。人間心はすっきりいらんとの御言葉なり。

又この神様は道教えの神と云う。地藏神とも云うて、道分け例えばこちは山、こちは海という、こう行けば間違ふ、こう行けば道という教えがこの神様が抜けてある人は出来ぬ。

この神様の御心は八方八神の括り故、この理が立てば皆理が治まる。一日たつ一月たつ一年たつと天理を説玉う理、万づ納めの神様にて月読尊と云う。人間も万事成り立ちせざれば括りにならぬ如く、御道の教師に取れば天の理を心に納めて読んでしまえば心が澄切る理、十分胸の内に治めてあれば、いかなる人にも十分満足与える事が出来る。

又五行の道では礼というは、この神様より出ている人を大切にす、人は互に立て合ひ助け合ふ礼儀という、この理がなくては畜生に等し。人間も古き昔は野蛮時代で獣類の如く力づくで倒し合ひ、強い者が弱い者を倒し、喧嘩ばかり家宅の取合いと云う風な悪気であったもので、神がだんだん戒め、成人に応じて教えを布き、善道に導きて育て下さって進んできた。例えば獣類は親も子もない、目上目下の順序も恩を知る事も、或は色情でも誰れ彼れの区別なく、義理も情けも礼儀作法もない。人の作物我の作物の区別もない。ただ食う事ばかりの心、大小便及びきたな

い事も掃除する事も何も知らぬ如く、人間も追々成人して神に近づくに従い人を立てる事、行儀作法などが分つて来る。恰も子供が成人するに従いて何かに分り来るが如く、人間も神の世に進むに従つて心が進んで行くから、我慾のきたない心が清浄な立て合ひ助け合ひの神の心に進んでいる。故に下等社会程この理が心に無いのである。だんだん心が汚れると獸類に近くなる。それで段々この理の無いもの程下等に住み暮しが立たぬ、難儀をする。神様もだんだんと子供の出世待ち兼ねる、神の思惑こればかりなり。又成人次第見えて来るぞやとおっしゃつてある通り、子供時代には大人の教育しても分らん如し。故に御道は皆深い尊い事が云うてあるなれど、我々の心が進んで行かねば聞いても分らん。神世はこれから先きに来るのであるなり。神は何から何迄持えが出来ておると御言葉にある通り、神の守護により世界が神の世に進んでいる。例えば昔は日本の内輪一國一郡でも取合ひをしていた如く、又川向うの火事と云うて眺めていた如く、今は他県の火事でも全国が知り全国から互助け合うようになった如し。

又聖徳太子様はこの神様の御変化なり。建築大工業の守神と祭り来るは、立木建物立柱と云う。大工業はこの神様の理、建てる役、正しい定規をもつて立てる。いがんだ傾いた物は立たん、倒れる。宇宙間一切の建築物はこの神様の理によりて建っている。倒れぬなり。彼の昔より城頭棟頭に鯨しよを飾りたるはこの神様の理をもつて立つて倒れぬという理なり。甘露台動めに鼻高面と鯨をこの神様の処に飾るは、この神の御神徳を象りたるもので、鼻高と云う理がこの神様である。

鼻柱顔の辛鼻で顔が立つ、鼻も立つという理はこの神様の理なり。筋道を立てるといふ、誠を立てる、道を立てて人を立て、親を親、上を上と立て、女なれば夫に、貞女操立ての如し。なすべき事をきちんきちんとす。人に恩を受けば恩を返す如き、皆筋道を立てる理。鼻は人道とも云う、人の道を守りて崩さず、立てる。誠一筋というが如く、鼻は世界の花と云うも同じ理。花も種々ある如し。人間の花も種々、花は実を結ぶもの、人間の鼻は考える道具。その考えたる事を行う故、一つ一つ実が入る理になつてくる。

例えばあの人は鼻を高くしているというが如く、人間はなすべき事をなして踏むべき道をふみ、何処へ出ても恥かしからぬ道を通り、立派に行うておれば、鼻高くしてびんとしておれると同じ。低いはその反対で、立てておらぬ、人にすべき事をせぬ。例えばこうすればよいのに、ああすればよいけれども、思う事をせずにおくが如く、なさねば実ば乗らぬ。そのなさんのは埃からなさん、その因縁で物が与わらぬからようせぬ。故に人の中に出ても鼻低うしておらんならんが如し。すべての鼻の高低等は前世の理なり。

鼻筋の潰れたる者は前世に以上の理により、我行うべき理を立てずして大いに人の恩をかぶりにて来たる理、鼻筋の立つはこの神様、男一の道具も同じ理。例えば一の道具を使って伝来の財産も潰し身を持崩し、家が立ぬから鼻落ちるが如し。又一の道具が立たねば一家世界も立たぬ。鼻は舵取り、鼻の落ちた者に考えのよいものはない。又鼻高天狗は大食天様の理で切れ物が上手な

り、思切るから立つ。すべて天狗など云う事は理想を描いたもので、昔話なれど、一に勢いと云うて、天狗は神故に人間の心の勢いに乗って働くものなり。恐れて逃げるような弱い心の時には天狗は逃げてゐる。これは理を云うたものなり。

天理の事を読むから月読尊、天理の風を守るから大日如来、天理の道を守るから不動明王。

大日如来は惶根尊の御変化、この神様一番大役故一世は、大日如来と変化し給う。世界中のものが物を云うている。日々に大きいと云う意味。この神様休みなし。人体でも肺は生まれてから死ぬるまで夜昼一つも息は休まぬ如く、惶根尊は風の神、誠の神様故、人を憎まぬ治める神なり。人に満足与えると云う御心にて、堪忍の風というて不足腹立ちを風に出さず、寛大にしてどんな者にも分るよう説いて聞かす。いかなる事でも善き方善き方と物事の治まるよう人に足納与えるよう、誠からやさしく言葉を吹かすのが惶根尊の智慧なり。それ故にいかなる事も皆善悪が分りて世が治まるなり。聞かすという、助けると云うは心を治めるも同じ、この世は言葉の理で治まる世界なり。陰陽和合によりて陽気を生ず、水気と温みが合うから風が出る如く、天の理に合えば誠の風智慧が出る。御教祖が月日の御心に合致せられて神様の御言葉が出たるにより、世界助けの御道が始まる。御教祖の神聖なる言行風儀は天理の風なり。又神がかりの言葉一条が天の白由用と云うなり。

人間も天の理に合わぬ、天理に切れている心をもって働きては、陽気に勇む事が出来ず、智

恵も出ぬ、一身が治まらん。例えば人と人との心が合わず仲が悪ければ物云わぬ心、合わせて睦じければ家内の中でも陽気、又人と交際して智が付く如く、例えば子供が学校へ行って一年の間に非常に智慧が付いたという、これは先生が教える事を一心に覚えて守っているからである。すべて心の合うた先生につかねば智慧が付かんが如し。教える師匠は我れに取っては国常立尊、君臣の間は主君が国常立尊、親子にては親が国常立尊、夫婦の間は夫が国常立尊、皆水と火、陰と陽が合うて成り立つ世界。故に親に切れ主人に切れ師に切れ兄弟親戚に切れ人に切れていては天の理に切れている。天の理に合わぬのであるから、なんぼ苦心しても頭が進んで行かん。

又この神様は義の神様、義理と云うも同じ。この神様から義と云う事は出ている。すべて皆月日両神から出るなれど、月日二神から惶根尊に義と云う事は御任かせになつてゐる。人と交際、言葉一条、白紙に文字を書いたらもう直すと云う事が出来ると同じく、云うた事を違えん、云うた事の違わぬという約定をたがえぬ如く、人間は義が大切。義理の道、万事義と云う事はこの神様、未申、羊に我と書く、羊程義の堅いものはない。羊は虎に向う時は朋友を助けるために我れも我れもと皆先きに先きに進んで行く。食われるという。我身を虎にあてごうて朋友を助けようとする性を持つ。

昔の武士道でも義で持っていた。例えば武士に二言なしと云うて義を守り、又向うが刀を捨てれば自分も刀を捨てて掛る如し。義を立て、不義なる事は死してもなさんという義を重んじた事、

これ義の徳なり。羊でも惶根尊の理が附いているからその性がある。神様が羊にも虎にも狗にも十二支に御変化下さって開闢の間潜つて通つて下さった故にその理が動物にある。人間には勿論義が無くてはならぬ。義は誠、我身の小さい慾を捨てて、たとえ我身を犠牲にしても人を助ける。と云う、又国家の万人の為に尽くすという真実誠なれば、その心は神と同一、必ず神に分通する故、天晴れの働きの出来る。神は人間の心に乗って働き玉う故、誠によつて神の働きの現れる。神言に我身捨ててもと云う心なれば神が働く、と仰せある通り、人間は我身を案じ身慾から心が小さくきたなく暗くなって徳を落とす。真の誠なれば天が守り玉う故、天運尽きず長久なり。誠が無くしてこの世の役にも立たず、又人に害をなし埃を積み、天の竜頭が切れて神退けば人間程もろいものはない。

どこにいても、どうしていても、所謂量の上からでも死なねばならぬ。天の竜頭さえ切れねばどんな危ない処でも大丈夫通れる。たとえ霞の如く飛来る弾丸の中を潜つても、又昔で云えば矢の中でも身に当たるとは当らぬ。例えは昔の太閤秀吉でも徳川家康でも天が世の為に必要あつて守つてござつた故殺されず天下を統一したと同じ。

昔より憶病者が世に勲功を残し、天下に天晴れの名を残した者はない。もし秀吉や家康が憶病者で戦場を恐れて出なかつたとすれば、かくの事業は出来ないが如く、神は心に乗って働きあるものなり。又国家の為世の為に犠牲となつて功勞を残して死したる魂は、直ちに生れ出でて国家

の上立つ徳をもつて世に現れる故、万人の尊敬を受ける。上に立たるる人は皆前世に世の為に尽くされた因縁ある魂にて、これが因縁心の道なり。

御教祖が照之丞を助ける為に我身我子の命を神に捧げて助け玉う教祖の真実を神が見定めて、天保九年より教祖を神の社として天下り給う。教祖は二十五年の命を縮めて魂一つとなつて存命通り働くに仰せられ、又一列の子供が成人したならば教祖は再び生れ出ると仰せられたのであるが、勿論一代を犠牲にして世界の為に働かれた御方々が再び世に出られぬような事ではこの世に神は無きも同然暗闇も同じ。この世は神の世界で、一寸先きの分らぬ人間の自由になる世界ではない。人の神魂たましいは神の分心故、代々この世に出でおるものなり。

身体は所謂水の泡同然のものなるが、魂は神と共に不滅なり。人間の生死は全く神の支配にて決して、人力の左右すべきものに非ずして神の自由であり。又我身の慾を去つて我身を犠牲にして人の為国の為に尽くすという位な真実があれば、この神様入込み給うて実が利くなり。我身の慾で田地や山林や財産を持ち、又金を溜めようとするような間は、この神様の通力が利かぬ。この言葉一つで世の為をすとか息で働く天徳は出来ん、身薄になくは出来ん。身薄にならねばこの神の実が利かぬ。

世の中に芸人とか歌或は浪花節とか鳴物をもつて人を喜ばす事に達者なものも理は同じ。又天性美声にして人に珍重敬慕を受ける人は、この神様の理に叶うたきれいな心にて、前世に人の為



になる言葉を使いてある理で、或は人を喜ばせ人を助けその道に徳を積んだ因縁あるなり。すべて陽気に面白く話をして人を喜ばすとか勇むとか笑わす方面はこの神様の理に叶う方であるが、これの反対で我れの慾心から色々と人を害する、人の心を煩わし、人の腹立ち怨むような悪口、そしり話や悪風を吹かす方は、皆我の徳を落として行くなり。声のよいと云う理はなかなか意味が深いなり。

又鳴物は人間言葉の理と同じく鳴物の一番は狼鼓が第一位のものなり。これは心の格好という理で、心の格好は悪しき処を立替えせねば格好よくならぬ。又三味線は鳴物の中でも広く用いられ、僅か三筋にて最も美妙なる音調を発し、人心に陽氣を与えるものなるが、三味とは言葉の理にて三つの味わいと云う理で、強いと弱いと中程すべて言葉は心の現われにて、人を助ける事も人を苦しめる事も、大にしては世を治める事も世を乱す事も、皆言葉が働いているもので大切のものなるが、例えば御道一条或は一家の子弟を教育するにもいつも柔かな言葉だけでも育たぬ、助からぬ者あり、かえってその者一生をあやまる事あり。強き厳しき教育にて助かり、生涯の出世さす者とあり。皆云うに云えぬこきりがある如く、兎に角埃無ききれいな即ち誠親心より施す言葉は、たとえきびしき内にも温かき味わいのあるのみならず、人心を感化し教訓するの力あるもの故、人の心育つなり。

不動明王は大戸辺尊の御変化、不動は動ぜぬという理。

盤石の如くと云うて、人を助ける為には、誠のためには心を変えぬという理なり。かの仏像に炎の中に真黒の像が剣を持って泰然たる姿を描きたるは、たとえいかなる中でも心を動ぜず苦勞を厭わぬといふこの神様の御心の姿を教え玉う。御道なればいかなる悪因縁、埃の中も切りぬきて埃にまびれぬ、心を倒さぬ、人を助けるため世のためには真心を変えん、誠一筋押通すと云う真実定まったのが不動の精神。又この神様と月読尊二神で秋が出来ている故、御心もこの二神同じ処がある。酉戌亥秋の神、力の神、働きの神、御守護も御副え下さる。この神様は出世神とも云うて、人間は自慢や高慢では出世出来るものではない。低い心で万事行届く心を開き、自分が守り行うて実力を拵え価値さえあれば、自然に神が引出しなさる。万物引出しの神様。引出し下さるは何の為かといえ、万づ引与えて満足与え下さる神故に人間も人に引与える、満足与えるという。すべて我が働きの骨折りにして人に十分与えると云う心になるから我身に力が備わる。又恩を返すと云う事に力を入れて人に引与えすれば自身に力が出来る（殊に御道はこの理が大切なり）。身の内では筋の御守護。筋は全身に行渡って働いている。たとえ一小部分でもいささか一分でも足らんとか短かかったら、筋を釣って伸縮の自由叶わぬ如くで、隅から隅迄行届く、一つの抜け目なく八方に心を配り、よく行届く神様、人間もその心の理で十分物事を心に納める、それ故に人に満足が与えられるなり。

筋は骨の行き渡る処は筋が行渡っておるが如くで、この神様の理は人のするだけの事はする、

人に引けん、人のなす事、人の知る事は我れがなせん知れんという事はない。人に負けん、後れぬ劣らぬ、人より優るといふ心。例えば十あるものを六七分知りて私はこれでよい、分つたと思つてゐる如きものゆゑ高慢。私は行届かん、まだまだ十分学びて上達せにやならんと、自分の短所欠点と人の長所が見えて人を見下す心、切る心なく、心使ひの低い柔かにして熱心の強い心から日々に徳が付いて上達する。又人がこう云うから、人がどうしたからとて、心がたよたよして倒れるような真実の定まらぬ薄弱な心では何事も出来ん。たとえ人がどう云おうとも我れがこれをやりぬかねばおかんという変らん、くるわん、真実の据つた辛が立つから延び上がる事が出来る。この心の無いような者は役に立たん。と云うのは世の中は多く埃に染りて徳を落とすのであるから、自分の前生の悪性質を切り、天の理を胸に納め心澄まして誠一筋押し切つて世の中の為人を助ける技倆実力の天徳を得るに、意志の強固なる迷わぬ動ぜん強き誠を立抜く真実親心が不動明王なり。

御教祖が雛形、教祖がいかなる中も世界の子供助けるために盤石の如き心にて御苦労くだされた故、この道が出来立つた。もし御教祖が御苦労艱難に堪えられず中途御心倒し心を変えておられたら、神の思惑たるこの道どうなつておるかと云う、その強き誠が末代まで光り輝くのである。又高慢は学ぶ事を学ばず、自身行わずに理屈で人を押えろとか、知らん事でも知り顔をする、人よりえらそうに思つても自身に行わぬ、通らぬ。たしかに心に分らん事はうそになる、又自分で

分らん事や無い事云うて人を迷わし人に迷惑を与える。高慢では力は出来ぬ、高慢を去るから力が与わる。心に力の出来るはこの神様、月読様の理。

例えば理屈が達者になつて人を押えてみた処が、その実人を教育する仕込む、すべて実力がなくては役に立ぬ。

又身の内はこの神様の入込んで端し端し迄どこでも伸縮自由自在出来るはこの位やさしい素直な心はない、十人は十人に人を引出す押し出す人を連れると云う神様なり。自分の氣に合わぬ者にも氣を合わして行くのが引連れる心。又人間は心が低う無くては行届かず、低い心で働かねば徳が取れぬ。どんな人の云う事でも聞分けるといふ度量の広い人を容るるといふ理で、我が心広く大海になる。埃の中にも正味あり。よき所は心に治める。又力は血、地からといふ意味ありて、低い処にある水は低い処低い処と流るるもので、この世の中に水程強い力あるものなし、水程やさしいすなおなものはない。例えば下駄をはいて力出すよりも、足を地に落として踏張る方が力が出るようなもので、我身の低い程力が出る如し。草木でも根張りが下に下にとおりるほど上に延長して大木になる程多く花実が稔る如く、又親は根である(一切の親)、根に切れては実が乗らん。肥がなければ太らん如く、道を治むるには我心落として師に仕え、十分勉強して恩を返す。根に肥をする程自分に徳が出来る、大人となる。例えば人に従うとか頭を下げて人を立てる事がうるさいから頭を下げて物を学ぶとか習う事をせず、初めから物知り顔で先生顔がしたいよ

うなもので、たとえいかなる賢人聖人というても天下に名を輝かすような御方でも、生れながらに物を知ってはござらぬ。幼少の時代には或は学校で先生に習い、だんだん目上や先輩に習い従うて自分が先生になる。元々より先きに生れて又先きに学んでいるものが先生、昔からでも一世に名を挙げられた位の御方は皆師に従い苦勞せし修養の根があつて世に現われた如し。又世の中に物のよく出来る人、出世せる人は、或は高慢も強く人を見下げるように見える人もあれど、その実は心が届いて働きの多く強くしてある。熱心が強いから徳を積んで高慢の埃無く理に叶うから出世成功出来るなり。

又心の届かん、物事の出来ぬ、人に満足与えん人は、天理にては高慢なり。例えば高慢の埃に前世から迫っている故に心には行届かそう満足与えよと思つてもようせぬ。天から押えられてゐる。蔓類は皆この神様の理故、どんな事にも人より延び上がつて下向きに頭を垂れると云うのがこの神様の御心の理が現われる。彼の藤は美しい花を咲かして高い処から下に向つて花を見せる。人間もいか程出世しても心を低めて人に花を見せる心の味い、この理が大戸辺尊の御心に叶う処を人間に見せておつて下さる。さがりやさがるほど人の見上げる白藤の花、咲いて実のない山吹の花、蔓類は何んでも他の物に蔓がやさしく副うて伸びる、そのものよりどうしても一段伸び出るといふ性、低い柔か、やさしうて実力の勢いが強いもの。又人間に対する高慢は人の云う事なす事つきくずす、或は我身を顧る智恵無く、人を恨み、人が行届かぬように思い、又人を

見下げ、我がえらいように思つて我事を鼻にかける、人に折れそうもない高い心、高慢から人の云う事でも耳に入らん、用いん。人に情けのない小さい心から胸の内が暗くなる。

神様に対するの高慢は、己が前世より今世のよごした埃が十分ありながらそれを払うて心を磨く事、心に主とせず、又氣付かずして清浄なるように思つて、自分の目的や思惑を立てようとする心で道を通る心。我れの勝手思惑あれば天の理を正直に守る、即ち神に素直になる事が出来ぬ故、高慢があつては話が納まらん、教え通り行えん。例えば日夜の身上の大恩を思い神様の御守護で働かして貰えた、さして頂けると云う心でなくして、これが我れが力でなしたものだ、我れが助けたものだ、我れが働いて我れが食うていると思つて心は神に対する高慢、神の理を突きくずす理。故に形は人に与えても、心は与える、尽くす心なき理である。

道に年限重ねて人を助ける位置にある人には神様に対する理の論しがある。人を出世させようと思つて誠の心が我身の出世出来る心である。怨と高慢大嫌い、と御教祖は始終仰せられたり。

## 瓜と茄子の歌

人間一名一人の心を改め誠となりて、互に心を合はしてなしたる事はなり、何事も成就す。又心を合はさずしてなしたる事は成就せず。たとえなりても後破れ易くして、なしたる事仇となる

事多し。故に万事成就は真よりなるなり。これ真実と云いて誠の実なり。根元の証拠なり。茄子と瓜、なすとは事成就する理にて事をなす、真実のなると云う事、又うりは愁いと云いて、花多く咲きても実なる事少く、仇花多し。故に昔より、高いやまから谷底みれば、うりやなすびのはなざかり、これわいどんどんあれわいどんどんという。この歌の意味は月日様が永年の間人間のする事なす事を高い所より御眺めくだされた、その眺めくだされた中に、人間思い思いにて心に巧み身に行う業にて宝を求めよう財を殖やそうとして、真実の花を咲かす者もあれば、又愁いを招く花咲かし、嘘偽りにて財を殖やそう宝を得ようと思つて種々行う者の盛りと云う歌なり。

「茄子は茎（じく）とは茎、空気の理）が紫、葉も紫、花も紫、なる実も紫なり。紫は色の玉にて、青と赤との合いたる色なり。青赤は月日の真なり。故に千に一つもあだ花なく、始めより終り迄実がなりて誠の理なり。瓜は葉青く蔓青くなる実も青く、なれども肝腎の咲く花が黄なり。故に瓜はあだ花多く、なる実は十に五つ三つに一つ位のものなり。人間行う業も心を合わざしたる事は、十度の事を行いても都合よくして五度位なり。あと五度愁いを招きて悲みの種となるなり。故によくよく心を改め我れより人に心を合わしむつまじくして事を行いその花を咲かし、誠の実をならすべし。謀反の心にて咲かしたる花はいかに栄えるとも長く保たず、折角子孫に譲りてもかえつて仇となるなり。たとえ我身一代榮華に暮すとも子孫の難儀に及ぶ事鏡にかけて見る如く明かなり。又一つの意味はこの度は谷底にてはだんだんと多く用木が見えてあるぞや、と仰せら

れ、谷底に用木があると云う事。歌は神が時世を知らず、この近年に至りて齷すくいが流行する、この理はいよいよ神様旬刻限が至りて神因縁の深き魂をすくい集めらるる理である。（前生の因縁寄せて守護する）ただしこの意味は最も重要な事なれば、文書に書き現す事出来ん。

### 松竹梅の理

松は秋にて月読尊、竹は春にて国狭土尊、松は人間身体骨足の理、色は柑を云う（辛）。故に松の皮はまにあわず、松茸は秋生じ、人間食物に与えくだされ、男一の道具の理。竹は人間身体皮及び一の道具の理、色は（外側）緑又は青竹なり。筍は春生じ、人間食物に与えくだされ、女一の道具の理故に、竹は皮のみ用い辛のなきものなり。松の辛竹の皮という、男女一の道具の理なり。梅は松竹共に合わたる理なり。芽の出ぬ先花開く人間夫婦夜交合の理、花は色なり香は情なり。実は子の宿りたる理、熟して酔きは秋の理、人間宿り始め冬の理、十月となれば秋宵の理なり。梅干として永く保つ処は真実は永き理なり。松竹梅男女交合子の宿ると同一の理なり。植えて楽しみ絵に書いて眺め又歌に詠むなり。

## 正月祝の訳並びに門松を立てる理

正月とはこの世の人間を月様が正しき御心にて始めくださったる故に、年の始めを正月と云いて今に祝うなり。元日とは日様なり。松を立てるは雄松雌松を左右に立て、七五三を張りて年徳大善神と祭り礼拝するは、年徳とは十二カ月、三百六十日は皆月日の守護にて、一年の内に五穀野菜綿糸一切御与えくされ、又立木魚鳥迄人間の為に御守護くださる故に、この恩徳を受け年立つなり。松と云うは三代目辛の立つを待つという理にて、三年目に芽出で辛の立つまでは古葉落つる事なし。木芽は一年に人間一代と同じ理なり。門松三つの辛なるを理とす。我身夫婦一代、子の夫婦で二代、孫の夫婦にて三代なり。孫を産む者を我身よりはよめと云うは、これ三代の世の芽を出す理にてよめという。孫の代となりて云う時は、二代を父母と云い三代をぢぢばと云う。我身より前後を父母、祖父、子孫と云うて五代のものなり。

七五三はじめなり。その七は天神七代、五は五倫五体、三は産み広め産の理、奈良長谷七里を七日にてひと廻り、人間最初五分より生じて五尺となる。産で三度産みくだされし理にて、着物七福祥五帯三、身の内にまといているはこれ神の八形の証拠なり。鏡餅ひと重ねの理は、月日二方の御身輝く理にて、鏡と云う天地なり、故に夫婦心円く柔かにして仲よく揃うて暮す心を供う

るなり。

みきと云うは正しき真直なる氣を供うるなり。故に木の直なるを幹と云い、横に出るを枝というなり。木の実を供うるは最初人間食物の始めは木の実なり。正月七日五日八日より十二日まで三日十三日より十五日まで十五日の間をしめの内と云うは、月様十五日となれば満月となり給い、人間もまる十五歳となれば一人前なり。数の子の元舁冊様が九億九万九千九百九十九人の子数を腹に持ちくだされたる理。鯨という、妊娠の理にてしんという。七日十五日に粥を食するは、人間元泥海より昇りたる理にて、かゆとはかいにて海なり。正月元日より十五日迄の祝いと云うは、元本始まりの理を忘れぬ為、人間に親神様が教えくだされて今に形を行うものなり。

## 嶋台の訳

大倭国にて国式祝いと云うて、婚礼酒宴の座にて第一の祝いとす嶋台の理。それ人間は夫婦結婚の始めとす。故に祝うべきなり、大事なる祝いというなり。我々住居家とする国は島なり、台なり、水の中なる浮島なり、ろつくなる台なり、敷島なり。松竹梅、鶴亀、老人夫婦の尉姥、熊手帯、男熊手女は箒を持って掃除をする形を顕したるは、この世は掃除をする程清き芽出度事はなし。人間身体胸の内を掃くは、はくとは白にて白く清らか奇麗にするなり。胸の内の悪しき

埃を被いたるを六根清浄潔白と云うなり。六根とは六つの根則ち胸にて、六つとは目にて見一、鼻で考ふる式、口にて言葉仕う參、耳にて聞くが四、香い或は嗅氣をかぐが五、呑食にて六なり。この六つの本を司る根を胸と云うなり。根は水なり、心なり。男の心にて積む埃は大きく、女の心にて積む埃は細かなり。男の埃は第一欲しい腹立ち憎い高慢四つありて、男神戒め給う。女の埃は第一惜しみ恨み我身可愛い慾、この四つ女神戒め給う。右互に男はあらしき埃女はこまき埃を払いて胸の中を掃除すべし。故に男熊手女箒なり。かくの如く胸の中悪しき埃を祓うたら、お前百まで私九九迄、共に白髪となるまでも、というように長生して、子の代孫の代を安心して楽しむ理なり。

鶴は立つると云いて男一の道具の理なり、亀はつなぎの理にて女一の道具の理なり。鶴は千年亀は万年と古より唱えて寿を祝いするものなり。松は三代芽の真の立つを待つと云う理にて、人間なれば孫の夫婦揃う迄ちぢば揃うて長生してその三代芽の辛の立ちしを見て足納し喜んで往生するを待つという。芽出度と云うは三代目夫婦揃いしを尉姥ちぢば見て喜びたるを言うなり。松は三代芽の出ぬ先は古葉落ちぬものにて誠に目出度いものなり。竹は一年にて親と同一となる故に、親子ただけと云いて中節揃いしものなり。ちうは中にして、せつは節なり。ふしより芽出で枝生ず。一年も十一月中十二月節より則ち冬至小寒の中節、春は二月の中三月節にて始まり、夏は五月中六月節夏至小暑の中節、秋は八月中九月節にて始まり、かくの如き四季中節にて成長する

なり。二代芽子といえども孫の代となればただけの理なり。梅はふえる理なり。殖えるは陰陽和合夫婦交合にて子の宿り月止まると云いて、泊まると云うも宿るといふも同じ事なり。

月様は陰なり男なり、宿りし腹は日様なり陽なり女なり。梅は芽出ぬ先きに花咲きて匂い薫しく、花は色、匂いは情、夫婦交合なり。色情とはいろかと云いて花の薫りと云うも同一にて、花香いろか梅の花は寒に咲くを常とす。寒は一日にて夜丑の刻、芽の出ぬ先、人間朝となれば目を醒して見る事が一番先きなり。なれども夫婦交合の時に見る事無くても行うもの、花咲き情写る梅の実結びたるは人間子の宿りたる理なり。故に梅は殖える理にて目出度く祝うものなり。人間夫婦ありて子孫兄弟伯父伯母甥姪従兄弟と段々殖えて繁昌し、村をなし郡となし国となり、世界出来たるなり。水の中なる島なる大倭は、日の本島国にて、往古はおのころしまと云い秋津洲とも言い、現今にて大日本という。大和国が国の始まり故、日本を大倭と言う。

### 身体と世界五倫五体十千十二支の本元（論しの台）

五倫とは五柱の尊の御心なり。五体とは五柱の台なり体なり、代なり。台と云うも体と云うも代と云うも同じ事なり。五柱の尊の御心とは、月様日様、金星、水星、木星なり。金星とは第三源助星、木星とは第四破軍星、水星とは第五朝明星なり。五柱の尊の台とは、第一国常立尊、第



二面足尊、第三国狭土尊、第四月読尊、第五雲読尊なり。木火土金水これ五行なり、裏表となりて十幹となる。裏倫表体、十幹とは甲、乙、丙、丁、戊、巳、庚、辛、壬、癸、木<sup>甲</sup>火<sup>丙</sup>土<sup>巳</sup>金<sup>辛</sup>水<sup>壬</sup>なり。五倫はえなり、五台はとなり、干支となり、えは甲、丙、戊庚、壬のえなり。とは乙、丁、巳、辛、癸の五つなり。戊、巳、子国常立尊、丙、丁、午面足尊、庚、辛、辰巳国狭土尊、甲、乙、戌亥月読尊、壬、癸卯雲読尊、右五柱は幹なり。  
未申憶根尊、丑寅大食天尊、酉大戸辺尊三柱の神は枝なり。

### 男身体五倫五体の理

口	鬚	頭	面	髮
壬	庚	戊	丙	甲
腹	睪	胴	臀	陰茎
癸	辛	己	丁	乙
水にて	金にて	土にて	火にて	木にて
壬	庚	戊	丙	甲
癸	辛	己	丁	乙

### 女身体五倫五台の理

口	鬢	頭	面	髮
壬	庚	戊	丙	甲
腹	陰門	胴	臀	足
癸	辛	己	丁	乙
水にて	金にて	土にて	火にて	木にて
壬	庚	戊	丙	甲
癸	辛	己	丁	乙

### 男女交合の五倫五体本元の理

男は五倫女は五台にて、即ち女は五つの台なり。女台となりてこの世の人間始めたるなり。これ陰陽和合の始めなり。男女交合の時、男の胴臀は天なり、女の胴臀は地なり。男の腹は雲なり女の腹は海なり。男女陰茎陰門は空気なり。交合の気淫の催すは男の腹にある腎なり、これ世界にて雲に含みし水なり、壬なり。陰茎より陰門に遷る、これ甲より辛に遷り、女の腹なる子宮に

宿るなり。宿ると言うは月泊まるなり。これ人間子種の始まりなり。十月の間冬夜、生るは春朝、成長して世渡りするは夏昼、死する時は秋宵なり。

木	男	陰莖	甲 <small>きのえ</small>	女	兩足	乙 <small>きのと</small>
火	男	臀	丙 <small>ひのえ</small>	女	臀	丁 <small>ひのと</small>
土	男	胴	戊 <small>つちのえ</small>	女	胴	己 <small>つちのと</small>
金	男	睪	庚 <small>かのえ</small>	女	陰門	辛 <small>かのと</small>
水	男	腹	壬 <small>みづのえ</small>	女	腹	癸 <small>みづのと</small>

五輪五台重りて重となる、即ち十、これ夫婦なり。男女呼吸風々として六物六台となる胎に子宿りし理なり。〇〇〇時、男の頭の渦巻が月様、女の額が日様、男の眉破軍星、女の眉が源助星、男の耳九曜星、女の耳十一体星、男の目宵の明星、女の目朝の明星、男の鼻口七夕の二星、女の鼻口諸冊の二尊なり。鼻口が夫婦なり。ふうふ風風〇〇見る事も聞く事も考える事も言葉使う事も用無く、ただ胸一つなり。六つ共根に帰りて〇〇〇〇〇〇写る。天は地、地は天にうつるなり。この時一心の心は、男は満月十六日夜子の刻九つ時なり、女は朔日午の刻九つ時なり。裏表男頭冬至、女の顔夏至、男の背筋秋分にて秋の彼岸の中日、女の腹膺春分にて春の彼岸の中日、男の呼吸女の息のまじるは大寒大暑にて冬夏の土用なり。甲辛まじるは秋冷氣春暖氣土用なり。胸に

かえりてことごとく氣となりて〇〇〇に入り、世界にては雲より空気の中に種あり海中に降る理、これ子種宿りたるなり。この理を月日二神様、伊弉諾尊を男種、冊尊を女苗代として〇〇の道を教えくたされ、人間御造化始め世界御造りくたされたるなり。地と天とを形どりて夫婦を拵え来るでな、これはこの世の始めだし、男一心真心満月の理。月様伊弉諾様に入込み心となりたるなり。女一心真心日様、伊弉冊様に入込み心となりたるなり。

### 身の内に於ける高天原竜宮の訊

高天原竜宮は、人間身体にては夫婦交合の時にて子種を男より女へ宿し込み下さる時の理なり。高天原とは、男の腹世界にては雲なり。竜宮は女の腹の中なる子宮。高天原より天人天降るは、男より子種女の腹に入る。天人の絵に美人を画きたるは、交合の時の男の心の理を顯したるなり。天人琴や笙を持つている理は、子の宿る時の〇〇正の事や。笙琴は鳴物の王なり。正の事は真なり、誠は六物六台惶根尊なり。鳴物は惶根様、子の宿らぬ時の交合は親神様人間夫婦仲よく暮さす為樂しみに守護くださるなり。雲読尊善女と変化なせし理は、この天人と同一にて、よき女という事なり、竜宮なり子宮なり。子は最初一滴の水なり。水は国常立尊、元本は大竜王の理、故に子宮は竜宮なり。子の宿ると云うも月泊まると云うも同一の理、竜宮乙姫と云うは女の体を云

う。世界何よりも天より種を雲にて含まし大海へ下げくださるなり。  
右身の内にある事は世界にあり。元々人間御造化下さるに付き、身体と世界の理と同一に御造り下さる。人間一人を一年と積りて九億九万九千九百九十九人の魂を冊様の御腹より産み出し下さる故、身の内にある事は皆世界にあるなり。

## 十二支の訳

十二支の動物は人間になるすぐ前のものである。一番人間に近づいたものなり。人間が最初は五分に生れ、長き年限の間に、八千八度び生れ替ったとおっしゃって、色々のものに変化して潜ったのみならず、神様も開關の間皆潜って通って下さった。それで子丑寅卯と云うような十二支の名があるなり。人間でなく神様がこの十二支に御変化下されしもの故に、その理が獸類にある人間もこの年に生れた者は因縁としてこの性質がある。しかしこれは大体の事で大あらめの事なり。その人その人にて性質は異なるものなれども、十二支の神に対する因縁の性質、この理は必ず多少ある、又神様は人間をここまでに育て上げる為には実に容易ならん永々の間の御苦労を下されたものなり。

例えば人間が狗位な時代には、馬とか虎とか獅子とか云うようなものに御変化して下されてあった。それで恐れて治まったので、全く成人して人間と仕上げた上は、神様は元の神となり給う。神と云うものは、人間の姿にでも竜にでも大蛇にでも何にでもなる。人間の智慧では到底思ひ計る事の出来ない御力、所謂通力のあるものが即ち神である。

辰巳と云うて国狭土尊も竜に御変化下された故に、金銭には竜が書いてある。この世に昔より大きな恐ろしいものは皆、月日が色々の物に変化しておらるるなり。或は悪気を戒め、善道に導き下された。天地開關の時は八十夫婦揃うた、これは八方八社の理。この時に開關の時の親様は国狭土様、月日様の御召により、これは女猿と変化して出たと仰せ下さる。猿王権現と祭っているのはこの神、産の王と云う神様なり。

九億九万年は泥海中の御苦労下さった間、九千九百九十九年は、開關下されての後の年限故一世、天保九年から二世となる。ただし九億九万と云うは分らん事を云い下さった事、神様には御作り下されたものゆえ、年数は分っているけれど、人間には泥海の何んにも分らん間を九おくと云うてある、仏教で西方十万億土というようなもので、人間でも分らん事。

最初五分の人間が四寸に成長してより八千八たびと云うて、鳥やけものをくぐる。最初は魚の形、魚でも鱗や鱗のないものから鱗のある泳ぐ魚となり、魚から鳥となる、鳥でもだんだん発達して鷲や鶴のようになってから獸物となる。獸類もだんだん生れかわり死かわり発達して、馬と

か牛、狗とかいうようなものになつて人間となつたものなり。(最初魚から鳥に変化する第一歩はあひる、あひるは前世を魚故に前世をよう忘れん、水をよう離れぬ如くで、人間も何程結構な話聞いても好きな道で怪我をする如きもので、それが即ち前世因縁故、これを立替えるのが御道一条、人助ける善の方へ心を向け、力を入れるに従つて心の成長発達変化して悪が取れる)皆な一世の間神様が変化さして育て上げて下さつた。すべて水や火にかければ何物も色々變つて来る如し。よつてだんだん今日の状態に迄人間も世界も進歩して来たものと仰せ下さるものなり。

又人間が八寸に成人した時泥海中が水と土とが分りかけ、一尺八寸の時、海山天地日月分りかけ、三尺にて物を云いかけ、五尺に成人した時、海山天地世界も皆な出来たと仰せ下さる。だんだんと成人に成じてじき物、りうけいも、不自由なきように与え下されて、水中をはなれて陸地にあがりて住むようになり、万づの事を人間に入込んで教え仕込み下された。

人間も初めは裸体で又穴に住い、一穴に何人と住うて段々子を産み繁殖す。それで今に穴のぞきという事を云う。一廻りと云うを七日間とするは、元奈良長谷七里四方の間に七日間に産下ろしの理、今に生れた時は一と七夜、やは月様殖える方、死んだ時は一と七日、かは日様へる方。三十日にて山城、伊賀、河内、産下し、三十日を一と月と云う。大和国内に産下しの人間が日本人の間故大和魂という、日本魂。

天理から人間と現わしてこの世に産み出して世界万物御作り下されたる親様の御苦勞は容易で

ない。ようこそここ迄ついてきた、実の助けはこれからや、と仰せらる。魂が落ちんように色々神が入込んで神となり、仏となり、宗教宗派種々と教の道を拵えて一世の間、育てて下された故、元々より神の思惑たる陽気づくめの真の神世に出来る人間と成人して、今その時季旬刻限が至つたのであるから、最早これ迄一世の間のように、あちこちと魂の変化は絶体でない事になる。例えば人間も一人前になつたら片付く。今迄の年限は子供の成人の時代なり、これから先きが神の代となる。そこでこの度は二世界の立替えの時故、この度魂が落ちたらもう上がる事が出来ぬと仰せ下さるのである。

前生の因縁よせてしゆごする、これは末代しかと治まる、と御筆先にある。これは皆、人間の魂を分けて心通り神が役割を定め下さる事なり。

非売品

大正十四年十一月十日 第一版  
昭和五十四年九月十日 改訂第一版

編者 安 江 明

発行者 北 田 彦 三 郎

天理市川原城町新道二丁目三九三十一  
電話(〇七四三三)三一〇一六

印刷者 天 理 時 報 社

天理市稲葉町八〇

安江 明編

真の宝  
(上巻)